を合し、動靜を兼ね、理氣を統べ、顯微を包む之を性といふ。其目之を仁義禮智といひ、又之を德と云ふ。』（狼疐錄）と。要するに廣義の仁とは、是れ慈潤親切、至誠惻怛、躰用動靜を貫ける融合一和、萬物一躰、物我無間の德なりとし、若し彼仁義禮智といふが如きは、作用上の區別なりとせり。例へば、太陽の光は混然として名くるなし。而も一たび三角玻璃を通過すれば、七色燦然として分るゝが如しと考へたり。

（七）經と權

氏は經と權との說あり。氏思へらく、經とは常道にして、權とは變道なりと。經とは、條理一貫、時の古今なく、地の內外なく、常住此道に由らざるべからずして、是れ必然的なり。權とは、偶然の出來事に接して、已むを得ず變道に出づるものにして、此際唯此變道によるより外に、人道を全うすべきなきをいふ。社會人倫の上に於いて、其常變極りなければ、之に盡すの道も、經と權との二道ありて、以つて其道を全うし得べしと考へたり。要するに經とは、是れ天地已定の道にして、權とは是れ千差萬別の道德的社會に處し、其變時に應じ、其變處に應じて踏むべきの變道なりと知るべし。

氏は經と權とを說明して曰く、『經と權とは、氷炭の異あるにあらず。然れども分別せざるべからざるも、經と權とは、只些子を爭ふのみ。且つ經と權との二者は、目下に在り。經を廢し權に從ふ、是の如くすれば漢儒、敎に反するの說、聖人權を行ふの時、目下只此一途あるのみにして、兩途あるを見ず。故に聖人權を行ふの時、只其當然を見て、未だ是れ權にして經ならざるを見ず。然れども孟子は、常變の二を擧げて、滕文公に告げて曰く、二者を擇へと。則ち學者、斟酌裁判の時、二者比並考較することは是あり。』（默識錄）と、又曰く、『蓋し天地の間只是一理のみにして、二道なきが故に、經と權とを合して皆平生の理、分ちて萬殊となせば、其變窮りなきが故に經あり權あるなり。聖人其千變萬化の事に從ひて、其千差萬別の理を行ふ時は、則ち其迹、或は同じからざるものあり。然れども皆一理に根して、二本なし。則ち日用の常より、以つて其變窮りなきに至る。固より以つて二道あることなし。』（同上）と。然り。道には常あり變ありといひて、之を分ち見ることを得べし。是れ其道德社會の常變極りなきものあればなり。故に之に盡す所以のものも其千變萬化の事に從はむには、千變萬化の理を以つて之に應ぜざるべからず。父母の健は常なり。父母の或は病み或は歿するは變なり。國家の平時は常なり。國家の

戰亂は變なり。身を守るは常なり。身を殺すは變なり。而して其常といひ變といふもの、は他人の見て以つていふ所にして、自己にありては目下其常道變道の別あるにあらずして、只此一途あるのみ。是れしらざるべからず。故に氏も已に、『聖人權を行ふ時、目下、只此一途あるのみ。經を廢して權を行ふには、あらざるなり。』といへり。其精神に至りては、毫も異る所あるを見ず。只其時と處との變に逢ひて之に盡す所以の行の異るあるのみ。されば經と權とは、他より之を觀察して、其行爲の手段に就いて之に附する名稱なりとしるべし。

(八) 格物

氏は人の本性を說き、萬事の大本、未發の中なりといひ、又眞實無妄なる誠なりといひ、又靜にして存する場合には、單に性と稱し、動きて發しては之を四端の情といひ、之を以つて道德的本躰なりとなせり。而も氏は、此際に於ける道德的知(氏は、道德實踐上、知は行に先だゝざるべからずとなし、殊に知を尊重せり。)たるや、元自然的知にして、工夫的知にあらずとなし、實踐道德は、必らずや此工夫的知に依らざるべからずと說くに至れり。是れ修養の必要なる所以なり

曰く、『知りて後に行ふ。知先行後。王子の辯、亦破るべからず。此自然の理なり。渠は良知を致すを以つて、學術の大端となす、亦是れ知先行後なり。特に渠は自然の知を以つて、我は工夫の知を以つてす。』(默識錄)と。かく知を分ちて、自然的知と工夫的知となし、特に工夫的知を主張せり。思ふに、氏は本性の純善を認めて、以つて道德的素質となせりと雖も、常人にありては、其眞正なる道德的判斷は、修養の結果に成れる工夫的知によらざるべからずとなせり。然り、是れ何人も否定する能はざる確論なりといふべし。氏が所謂工夫的知は、人々生有の知にあらずして、格物の結果なり。故に氏が學即ち修養の工夫は一ッには性善を知り、又一ッには格物の工夫によらざるべからずとせり。かくて性の善は、格物の工夫と相擊ち相摩して、此に第二の本性を作り出し、仁義禮智の道、燦然として明なるに至るべしと考へたり。氏は格物を說きて曰く、『天下の理を明にして、天下の理を照す。學の道は、何を以つてか之に加へむ。存養は、是れ知る所の理を存養するなり。誠正修は、是れ知る所の理を明にするなり。齊治平は、是れ知る所の理を推すなり。故に學の道、一言以つて之を蔽へば曰く格物なり。』(同上)と。人は已に本性の道念を生有せり。而して又人心てふ非道念をも固有せり。是を以て本性の道念、時に或は

人心の擴和するあるを免れず。是を以て拘蔽せらるゝ所ありて、理明ならず、而して躰立たず、用行はれざるに至る。是れ吾人の通習なり。故に氏は本性の善を認めて之を說くと同時に、格物の工夫を主張するに至れり。其自然的知を捨てゝ、工夫的知を重んずる所以のものは、これ常人の爲めにいへるものなることをしらざるべからず。

（備考）人之一身。有五臟百骸。而心之爲物。屬五行之火。其官則能照應萬事。五臟百骸之理。天下萬物之理。皆能備於此矣。故其體也。萬理立。其用也。萬理行。惟爲氣質人欲所拘蔽。則理不明。而體不立用不行。是以學則在明此理而已。理明則體立。而用無所不照矣。何以明此理。王氏謂去人欲而存天理。似可謂簡約著明矣。猶言人之目瞶耳聾。告之曰。目本明耳本聰。有病。故失聰明。何以明耳目。惟在去其病而已。其療之也。或以藥。或以鍼灸。其方固非一言能所盡也。蓋求心體之明。其要在即物以窮其理而已。理散在萬物。而其體則不外於一心。理無形體。與物爲體。則理之似也。故物雖在外。然即物以推去推來。物與知相擊摩。則心體之明銖分厘別。久之以可得全體大用之明也。猶金石本皆有火氣。而相擊摩則出來矣。若夫禪家。能勤苦者。可謂心存而無人欲者矣。惟於物理未究。則只是兀然坐忘而已。聖人之教。先養之小學中。而存其心。次之以大學。而其最初教。使學者必即凡天下之物以究其理。則天下之理莫不明。心體之明莫不照。而修己治人之用。無不周矣。然其理雖明。亦心與理不相會。所明之理。不得爲己之有。是以更有誠正修之工夫。其實誠正修亦只是收拾格物之功而已。（默識錄）

（九）歸結

凡そ崎門の學、正義明分に嚴にして、殊に氣節を重んず。然るに才俊の士、或は東に往き、仕を侯門に求め、操守或は舊に似ざるものあり。佐藤直方已に然り。氏も亦此點に於きて闕くる所なしとせず。氏は曾て絅齋が孤介岸峻、義合はずして屢々人と交を絶てるを評して、『氣質の一癖、學問の大疵』と稱せしかど、氏が言ひ氏が行ふ所のものは、崎門の眞精神にあらざる也。只氏は、忠實なる宋學者なりといふべきのみ。其闇齋が、說きて未だ及ばざりし經學を、檢覈討尋して、其理を明にしたりしは、是れ氏の功といふべし。其他は余の知らざる所也。

第二編　陽明學派

(一)陽明の學風。——(二)本邦に於ける陽明學派、

(一)　陽明の學風

宋代に於いて、朱晦菴と相對峙して、陸象山(一一三九、一一九二)ありて、心即理なりと道破し、極端に直覺說を主張したりき。明代に至りて、陳白沙(一四二八、一五〇〇)出て、上、陸學を繼き、下、王陽明を呼び起せり。陽明は、此學の大成者なりといふべし。

陽明(一四七二、一五二八)は心即理の說を唱へ、知行合一を說き、其直截簡明生氣あるの學說は、明の學界を、風動し、所謂陽明學派を開けり。一に明學といふ。陽明、名は守仁、字は伯安、明の憲宗の成化八年餘姚に生れ、世宗の嘉靖八年、歿せり。年五十七。陽明、始めは任俠に溺れ、再び騎射に溺れ、三たび詞章に溺れ、四たび神化に溺れ、五たび佛氏に溺れ、遂に聖賢の學に歸せりと云ふ。性、豪邁不羈、曾て事により、艱險に遭遇し、死生の境に出入し、一夜

忽ち廓然大悟し、致良知の說を唱ふるに至りき。其死に臨み、門人に告げて曰く『此心光明、亦〻何をかいはむ。』と、卒に逝けり。今、陽明が學說の一斑を叙して、我が國祖述者の說と對比するの便に供せむ。

陽明が說を見るに、(一)心即理、(二)致良知、(三)知行合一の三綱に歸着するが如し。今之を略叙すべし。

(一)心即理。　氏は、晦菴の如く、理氣併存を信ぜずして、唯理論者なり。是れ氏は晦菴と、根本的相異のある所也。而して氏は思へらく、人の本心は、普遍的に先天的に稟賦せしにして、虛靈不昧、衆理具りて、道德の本源たるべきものなりと。故に直に心即理なりと道破して、大に晦菴が格物究理說の迂疎空濶なるを笑へり。乃ち曰く、『心即理なり。天下亦心外の事、心外の理あらむや。夫れ物理は、吾が心に外ならざれば、吾が心を外にして物理を求むれば、物理なく、物理を遺して我が心を求むれば、我が心なし。心の體は性、性は理也。心は一身に主なりしと雖も、實は天下の理を管す。理は萬事に散在すと雖も、實は一人の心に外ならず。』と。されば其修養上に於いても、內省して以つて衆理を直覺し得べしとして曰く、『若し心理に向つて尋求し、自己の心體を見得ることを解すれば、即ち時として處として、是れ道ならざるはなし。古今無始無終、異同なし。心即道、道即天。心をしれば、則ち道をしり天をしる。』といへり。氏が此心即理の說は、即ち氏が學說の基礎なりとしるべし。

(二)致良知。　氏は、已に、心即理なりとの說あり。然るに氏は又一方に於いては、人は必然的に人欲を固有せりとなせり。人欲とは何ぞ。耳目口鼻、四肢の欲也。耳目の聲色に迷ひ、口鼻の香味に惑ひ、四肢の安逸に流るゝが如き、皆良知を拘蔽し障碍し、惡に陷らしむるの因由ならずんばあらず。故に人は、人欲の私を去りて、良知の正に復せざるべからずといへり。氏が致良知の說は、是れ即ち復性復初の說。

氏が良知は、是非善惡を判別する知的作用あるのみならず。更に同感同憐、無限的博愛の情的作用を備ふるものなり。今、其故を說きて曰く、『孺子の井に入らむとするや、怵惕惻隱の心あり。鳥獸の哀鳴斛觫を見るや、不忍心あり。是れ其仁、鳥獸と一體たる也。無心の草木に至りても、其摧折せらるゝを見るや、必らず憫恤の心あり。』といひ、又『瓦石の如きは、無生の物なるも、其毀壞を見ては、愛願の心あり。是れ其仁、瓦石と一體たる也。』といへり。かくて此同感同情を推して、天地萬物一體觀をなせり。

(三)知行合一。　氏が所謂良知は、道德の知的作用と情的作用との兩方面を備ふるものなりといふへし。而して其知行合一の說は、是れ良知と行爲との合一を說けるもの也。良知は、是れ理想にして、行爲は是れ實現也。而して明察なる道德的知と、高尙なる道德的情操とを備ふるの體なれば、必らず行爲と相一致すべきものにして、決して相離るへきものにあらすと信せり。知の眞切篤實なる處、是れ行にして、行の明覺精察なる處、是れ知なりといへり。曰く、『知は是れ行の始、行は是れ知の成る也。若し會得する時、只々一箇の知を說けば、已に自ら行のあるあり。又一箇の行を說けば、已に知のあるあり。』と。如此知は行と相並びて、始めて理想と實現とは相一致せりといふべし。而して眞切篤實なる理想は、必らず實現せらるべきものなりと信じたり。要之、氏が心即理の說は、道德本體說にして、致良知の說は、其修養法也。而して知行合一說は、道德の全體、人生の極致なりといふべし。

氏が此等の學說は、一時明の天地を風動せり。其門人には、徐愛、錢德供、王龍溪、王心齋、聶豹、何廷仁、黃弘綱、薛侃等あり。明末に至り、黃石齋、劉念臺、出て、之を繼き、綱常を扶植し、毅然節を守りて、社稷と存亡を共にするに至れり。

(二)　本邦に於ける陽明學派

慶元偃武、程朱學鬱然隆起せし際、中江藤樹(二三六八)は、近江の僻境に生れて、陽明學を唱へ、本邦陽明學の首倡者となれり。其人至誠純厚、其德、後世を風化せるもの些少にあらざるなり。世之を追尊して近江聖人といふ。門下熊澤蕃山、中江常省、泉仲愛、中川謙叔、中村叔貫、加藤季弘、淸水季格等ありて、就中、蕃山(二三七九)最も傑出せり。蕃山の門下に、巨勢直幹、大江俊光あり。

蕃山に少し後れて、北島雪山あり、三宅石菴あり、三重松菴あり。而して之と相前後して三輪執齋(二三二九)あり。執齋、博學高德、一世に卓出せり。門下に川田雄琴あり。別に中根東里あり、此間に起れり。

佐藤一齋(二四三二)は、夙に藤原惺窩中江藤樹の爲人を追慕し、朱王を併取せり。世、氏を、陽朱陰王の徒と稱せり。門下俊才雲の如く輩出し、中にも佐久間象山、河田藻海、池田草菴、奥宮慥齋、竹村悔齋、山田方谷、大橋訥菴、吉村秋陽、東澤瀉、中島操存齋、の如き、其卓越せるもの也。此等の諸人、學問事功、一世を振盪し、赫々として史上の偉人たるを失はざ

りき。一齋か交友に、大鹽中齋（二四五、四九七）ありて、幕府の稗政を慨し、勤王救民の旗を飜し、悍然として天下に反抗せり。然れども其事成らず、空しく千歳の遺恨を齎らして逝けり。林良齋は、其門下より出てたり。其他陽明學を信奉せしもの、林子平、梁川星巖、横井小楠、春日潛菴、鍋島閑叟、吉村斐山、西鄕南洲、河井繼之助、吉田松陰、雲井龍雄等あり。皆良知の心法に心を潛め、膽を鍊り氣宇を高くし、毅然一世の偉人なりき。

陽明派に屬するものは、上述の如く甚だ多しと雖も、今は其尤なるもの、藤樹、蕃山、執齋、一齋、中齋の五氏を採り、其說を敍せんとす。

第一章　中江藤樹（二二六八——二三〇八）

（一）傳記、——（二）學風、——（三）孝說、——（四）良知、——（五）性欲と人欲、——（六）格物致知、——（七）誠意、——（八）神儒一致、——（九）歸結、

（一）傳記

明の王陽明（二一八九）卓然屹立して、遠くは子思か直覺說の流を酌み、近くは陸象山陳白沙の遺法に據り、致良知の心法を唱道して、天下の學界を風動せしが、未だ七八十年ならずして、中江藤樹の江西に興起せるあり、斯學を移植し、我が國陽明學派の鼻祖と稱せらる。

藤樹、名は原、通稱は與右衛門、字を惟命といひ、西江、默軒、願軒などの號あり。常に古藤樹の下に逍遙して、道を講したりければ、人呼ひて藤樹先生とぞいひける。慶長十三年、近江國高島郡小川邑なる一農家に生る。父名は吉次、家甚だ裕ならざりければ、氏を養ふこと能はず。乃ち其九歳の頃には、其祖父なる人の伯耆米子侯加藤貞泰に仕へけるが來りて伴ひ歸り、之を養育する事とはなれり。

かく氏は、幼少の頃より早く已に兩親の膝下を離れ、世路の艱難に遭遇しければにや、其志を持すること、殊に審固にして、之に加ふるに天性怜悧なりければ、祖父之に書を敎へけるに、日ならずして書札を認め得る樣になれり。筆法老蒼、見る人皆其巧妙を驚嘆せりと云ふ。其翌年、侯、封を伊豫大洲に移されたりければ、氏も祖父に伴はれて移りたるが、此年始めて塾師に就いて、學を修むる事となれり。一日大學を讀みて、『自天子

以至庶人、壹是皆以修身爲本。』とありければ、驚きて曰く、『人の人たる所以は、全く此にあり。幸に此經の存するが故に、聖人を學びて、聖人たるべからざらむや。』と、因りて涙下りて衣を沾すに至れり。又一日、將に食せむとして、忽ち箸を投して自ら責めて曰く、『此は是れ誰か賜ふ所ぞ。一には則ち父母、二には則ち祖父、三には則ち君。此三者の恩、須臾も忘るべかず。』と、其志の程、以つて想見すべし。其後、藩の士大夫と交はるに及び、自ら思へらく、身、田野に成長して、今、俄に交はらば、恐らくは人の笑侮を受けむと、因りて寢食を忘れて自ら奮ひ、一擧一動、悉く禮法によりて身を束し、夜寢に入るも晏然たること能はず、具に戒愼の工夫をなせり。故に其睡に當りても、呼ぶこと一聲にして、輙ち覺むといふ。因りて曰く、『人、聖人たらむことを學ばゞ、必らず一言一行、聖人の形迹に據らざるべからず。』と。

かくて十四歲の時には、祖母を失ひ、其翌年、又祖父を失ひ、連りに變凶に逢ひ、哀痛特に甚し。是より益〻言行を愼み、學問にいそしめり。されど邊境、書に乏しく、又良師なし。偶ま四書大全を得て、大に喜びしかど、物議を憚り、晝は出でゝ武を講じ、夜は竊に燈に對し案に倚りて、獨り瞑想に耽れり。未だ朞年ならずして、學大に進めりと云ふ。其十八歲の

春には、又近江なる父の訃に接し、鬱々として悲まず、憔悴色にあらはる。是より浩然として歸思あり。母を鄉里に省すること二回、伴ひて大洲に至らむとすれども、老の故を以つて應せず。されば歸養せむとするに、藩惜みて許さず。一日皐魚傳を讀み、『樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、』との語を見て益〻母を思ひて禁ずること能はず。遂に書を執政佃氏に托し、官を棄てゝ京師に逃れ、罪を待つて留ること百餘日、乃ち小川邑に歸れり。時に年二十七。

（備考）今度私御暇の義、言上被成下候へと奉願候に付て、傳左殿、助右殿、御同心被成、種々御異見の段、奈奉存候、此中も如申上、一ッには何れも如御存知、二三年以前より病者に被成候て、次第に人なみの御奉公相勤めがたき體、迷惑に奉存候。一ッには古鄉の母、十年以來一人住ひを仕罷在候。私の外、別に母を羽含み可申子も無御座、又よすがに頼可存程の親類も無御座候故、四五年以前より漸々飢寒に及ぶ體に御座候間、此地へ伴れ越し可申と奉存、去々年御理り申上げ、迎に參り候處、最早年罷寄り、又は病者に御座候て、里の中をも自由にありき申事不罷成體に御座候。其上女の儀に御座候へば、古鄉々離れ遠國に參る事、たとへ飢死仕候とも成申間敷旨申候故、不及是非捨置き罷歸候。私儀、やしなひ親共四人迄御座候へとも、二人は幼少にて離れ申、今母一人殘り申候。似一人、子一人の事に御座候。其上母存生の中も、今八九年の體に御座候條、御暇申請、古鄉へ罷歸り、母存命の間は、如何樣のわざ成共仕、養申し、母相果て候ばゝ、罷歸り、貴樣を頼存、召歸され被下候ばゝ、御奉公仕度覺悟に御座候。此外

聊か存仔細も無御座候。私の儀に候條、左樣には思召問敷候へ共、若右申上候事、當座の假事にて、眞實に身上をもかせき可申望にて申上げしかと御推量被下事も御座らむと存。此中も度々申上如く、左樣の所存少々にても御座候はゝ、立所に天道の冥罰を被蒙、母に二度あひ申間敷候。加樣になげき申所、御聞届被成候て、不便に思召候はゝ、貴樣に御構ひ被成、假言に言上仕るなとゝ聞召しあやまりの無御座候樣、被仰上、御暇被下候樣に奉願外、無他事候。

（托執政伽氏乞暇書）

氏の鄉里に歸るや、携ふる所の百文錢をもて、酒を買ひて、之を農家に賣り、些か其利を得、又佩ふる所の刀を鬻きて、母の養となせり。三十歳高橋氏を娶れり。高橋氏、資性貞順、奉事謹厚、凡そ事巨細となく、命を受けざれば敢て行はず。氏の諸生の爲めに書を講ずるに、或は深更に至るも、常に傍に侍して倦める色なく、十年一日の如く、未だ嘗て夫に先ちて寢に就きたりし事なかりき。母子鬻然、團欒の樂を極めたりと云。

氏、定省の餘暇、徒を聚めて程朱學を講說し、格律極めて森嚴なりき。遠近の人、來り會するもの多く、熊澤蕃山も亦、業を受くるに至れり。氏一日、王龍溪語錄（龍溪は、陽明門下の人。）を讀みて、是より漸く舊學に疑を挾みしが、其三十七歳の時には、偶ま陽明全書を得て之を精攷し、翻然として悟る所あり。乃ち見る所を擧げて、之を蕃山に授け、又人に告げて曰く、

『余嘗て朱學を信じ、汝輩に命じて、專ら小學を以つて準則とせしめしが、今始めて其拘泥の甚しきを知れり。蓋し格法を守るの、名利を求むると同日にして論ず可からずと雖も、其眞性活潑の體を害ふは則ち一なり。汝等聖賢の書を讀みては、宜しく其意を師とすべく、其跡に泥むこと勿れ。』と。其純乎たる陽明學者の口吻、以つて見るべし。氏三十九歳の時には、妻高橋氏歿し、翌年には更に別所氏を娶れり。而して其翌年には、氏は卒に其鄉土に歿せり。其村寺、玉林寺に葬り、題して「藤樹先生之墓」といふ。喪儀、一に文公家禮に從へり。葬るに及び、遠近のもの來り會し、哀痛哭泣、孝子の慈父母を喪ふが如くなりしといふ。初め、氏、痰疾を患へ、病む毎に數枕を重ねて臥し、愈ゆるに從ひて之を去るを常とせしが、其疾革るや、母之を問はれしに、氏、母の患へむことを恐れ、疾を力めて手自ら一枕を去りて曰く、『今日少しく愈えたり。』と、母喜びて室を出づるに及びて、即ち已に瞑目し畢りぬと云ふ。

氏、中年痰疾を患ひてより、身體忽ち羸弱となり、事、其志と違ひ、其子孫の如きも、二男一女は未た月を閱せずして早く殤し、長子宣泊、次子仲樹、皆人生の半に充たず、晩出別所氏の生、季重たゝ僅に天壽を全うしたるあるのみ。

氏、資性温恭退讓、平生村民と農事を談ずるに、恂々として和氣面背にあふれ、胸中灑々として又一點の染着なし。而も一旦事に臨みては、毅然として萬夫も犯すべからざるものあり。曾て某地に行き、日已に沒して家に歸らむとしけるに、途上兇黨數人ありて、刀を擁して之を途に要し、衣服財寶を奪取せむとす。氏從容として曰く、『吾之を與ふるが道か、與へざるが道か、少時之を待て。』と、沈思稍久しうして曰く、『吾は與へざるが道なり。若し强ひて奪はむとならば、來りて之を決せよ。』と、身構へして自ら先つ名乘りけるに、兇黨其姓字を聞きて、相顧みて僻易し、刀を抛ちて俯伏し、罪を謝して曰く、『小人夙に先生の大名を聞けり。今、知らずして將に害を加へむとす、恐懼止むなし。願くは先生、哀愍を垂れよ。』と。氏莞爾として笑つて曰く、『汝輩元是れ惡人にあらず。道を聽かざるの故を以つて、惡に習ふのみ。』と、乃ち之に說くに知行合一の理を以つてし、錢を與へて去れり。兇人感泣し、後咸行を改めて正業に就けりと云ふ。其性行略如斯なりければ、遠近の人皆其德に化せられ、江西の地、善風美俗綿々として今に至るまで猶竭きすといふ。去る明治三十年には、其二百五十年祭を擧行せられ、天下群聚して、皆其餘德を仰けり。近江聖人の尊號に負かすといふべし。三輪執齋、佐藤一齋、大鹽中齋、

の諸家、皆其遺風を欽仰し、感奮興起せるものなり。

氏著はす所の書、少からず。其初年には、朱子學に肆ひ、格法を主とし、日用常行、一に聖賢の遺法を遵守せむと欲し、特に孝經を尊信して、啓蒙一卷を著はし、又原人論一篇、持敬說一篇、翁問答二卷等あり。後年陽明學に向ふに及びて、學庸解二卷、論語解一卷、大學考一卷等あり。尙別に詩文歌集、往復書翰、鑑草、及び醫學に關するもの數種あり。

(二)　學風

氏が學說は、之を前後に二分して見るべし。乃ち氏は其始しめは朱說を信じ、朱子が研究法によりて、講說せられたりしが、其後王龍溪語錄を見るに及びて、心漸く舊說を疑ひ、其後陽明全書を獲て之を看るに及び、欣然として之に傾向し、其學を信奉するに至れり。唯惜むらくは、早世せしを以つて、其學を唱道せし時日甚だ短かゝりし事、是なり。然れども其學問見識、已に三昧に入り、其餘德は、後來幾多の學者を呼ひ起すに至れり。如此氏が見解は、前後に二劃せられたり。尤も其主要なる點は、後半の所說にありとはいへ、其前半の說も、亦卓然として一家見をなし、亦決して舍つべからざるものあり。今、

其所說を前後に分ちて之を略述せむ。

氏が前半に於ける所說を通觀するに、力を極めて儒道と佛老との差別を立てけり。故に一方に於いては、儒道の眞義を發揮して、之を主張し之を擁護し、他の一方に於いては、佛老の說の似て非なるを辨斥し、其人倫道德に大害ある事を痛論せり。此時代に就れる翁問答は、正にこれ氏が破邪顯正の利鋒を揮ひたるものなることを知るべし。而して氏が主張せし所の根本主義は、之を全孝說といふべし。其所謂全孝說とは、漢唐の古學に據るにあらず、程朱學に依るにもあらず、只氏が朱子の研究法を基礎として、其上に立てられたる所の、氏が獨特の見解なりといふべし。されども細かに之を觀察すれば、其說たるや、氏が常に最も尊信せる、易經及び孝經より來れるを見るべし。

氏が全孝の說たるや、孝の一字を翻弄して、人倫道德の說より、宇宙萬有の存在に至るまで、一切を網羅して之を說き盡さむとせし所のものなり。乃ち親と子と相對的なるが如く、宇宙萬有の現象、一として相對的ならざるはなし。而して此相對的なる彼我は愛敬の理を固有せり。此愛敬の理たるや、彼の「ヒューム」の同情說の如く、愛敬てふ本心を擴充せば、遂には物我の差別見を破して、廓然として大公、此に無差別的なる大通一

貫の身を立つるに至ると主張せり。其學問修德の工夫に至りては、朱子が格法森嚴なる他律的經驗的修養法に據れりしものゝ如し。

かくて一方に於いては、極力異端を駁擊し、自ら思へらく、『學問正邪の別を明にするは、修學上第一の要義なり。』と、是を以つて佛老は勿論、其他記誦詞章の學、名法の學、陰陽の學、墨氏の學、縱橫家の學、農家の學、小說家の學、楊氏の學などを列擧して之を痛責し、學者若し一步を誤らば、萬里の差を生ずるに至らむと警告せり。

然るに氏が後半に於ける學風は、全く之と異り、痛く朱說が格律徒らに嚴にして、拘泥甚しきを厭ひ、簡明直截、圓通和融なる陽明學に隨喜し、『聖は我心に在り。心外法なく、法は皆我心に備はる。』と道破し、偏に主觀的直覺的考察に一身を委ねたり。是を以つて佛老などに對しても、前時と異り、『聖人一貫の學、太虛を以つて體となす。異端外道、皆吾が範圍中に在り。』といひ、又其前半の著たる翁問答に對しては、『問答中、儒佛を論ずる所の如き、今之を讀むに、其理正當を得ざることを覺ふ。』といへり。又以つて氏が思想の變轉を見るべし。

此に尙ホ特筆せざるべからざる一事あり。何ぞや。氏が神道に對する見解是なり。氏は、陽

明學の立脚地にありて、神道を解し來り、正直愛敬無事を以つて天地の大道なりといひ、更に儒の知仁勇の三德をかり來りて之を合一し、又進んで天地の大道は、即ち自己內心中の大道なりといひ、神明をもて我が良知の本體となし、神儒を合一し去らむとせり。要は王學の眼孔をもて、神道を解釋せるものといふべし。而して氏が敬神はやかて尊皇なり。後來陽明學者が常に尊皇の大義を標持して立つに至れるもの、豈本つく所なしとせむや。

(三)　全孝說（前半期之學說）

氏が全孝說とは、氏が所謂狹義の孝を擴充して、廣義の孝を說けるなり。狹義の孝とは、何ぞや。孝の字、子の老を捧持せる體なり。即ち子の親を敬し、親の子を愛するの極、自然に彼我の差別見を破して、混一融和、親子一體の境に至る、是れなり。然らば廣義の孝とは何ぞや。氏は思へらく事と物とは、一も絕對孤立のものなく、すべて親子の關係の其の如くに、相對的なり。故に事と物との間には、皆愛敬の理ありて存せり。人に於いても亦其愛敬の心を推して、五倫の道より宇宙萬有一切の事物にまで及ぼし、其極、遂に彼

我の差別見を破して、混一融和、物我一體の境に至るべしと、是なり。是れ氏が全孝說の大體なりとす。今少しく之を詳說せむ。

かくの如く氏は、孝の意義を推して、頗る廣汎に解したりしが、氏は又自ら思へらく、愛敬の心を推擴するは吾人が本務なるも、此に本末先後の差別なかるべからずと。故に子としては、親に盡すか是れ本なり先なり。されば氏は、其狹義の孝を說く爲めに全力を灑きたるを見るなり。其說頗る長しと雖も、今之を略言せむに、曰く、『孝德を明にせむと思ふには、先づ父母の恩澤を明にすべし。』（答問答卷一）と縷述し、更に曰く、『本心の孝德ありて、父母の恩に報いむ事を忘れぬるものは、人欲の雲に覆はれ、明德の日の光暗く、心の闇に迷ふ故なり。九牛の一毛を言ひ述ぶる父母の厚恩を、善く體認して、一飯の恩に比べて見れば、人欲の雲、晴れ、明德の日の光、明にして、父母の厚恩に報いむと思ふ本心の孝念、限なく開發すべし。此一念をもて孝行の始めとなし、孝經の聖謨を鑑として、身を立て道を行ふの大孝を受用すべし。』（同上）と。かくの如く子としては其親が昊天罔極の厚恩を省察體認し、以つて吾人愛敬の本心を開發し、遂に親子一體の無差別的境涯に進まむことを希待せり。

氏は、狹義の孝より推して、廣義の孝に說き及ぼし、君臣夫婦朋友長幼の彼我一體たるべきは勿論、更に天地萬物、我と一たらざるべからずとなし、氏が根本主義たる全孝說を主張したり。何を以つて然いふ。氏は思へらく、吾人本心の愛敬の心は、頗る廣汎の德にして、太虛全體の名なりと。太虛とは、氏が考へたりし宇宙萬有の本體に對せる命名なり。氏が狹義の孝を說くも、已に此前提によれりしなり。故に氏は孝とは親子一體に止らずして、彼我一體、物我一躰の境に進まざるべからずと說くものは、又自然の結果といふべし。曰く、『孝は混沌中に在り、太虛本體の神靈、方寸にあるものを孝となす。所謂未發の中、是なり。故に曰く、孝は混沌中に在るものなり。』（同上）と。かくて『其私心の窟宅を破りて、其本心の大公に復せしむ。』（孝經啓蒙）といひ、更に其廓然たる大公、大通一貫なる物我一體の境を說きて曰く、『我が心の孝德明なれば、神明に通じ四海に明なる故、天地萬物皆我が本心孝德の內にあるなり。迷へる人は、心は身の內にばかり在りと思へども、根本は心の中に生れ出でたる身なり。然る故に悟りたる眼には、內外幽明有無の差別なし。』（翁問答卷一）と。如此吾人が先天的普遍的に稟受せる太虛靈明の本心は、即ち愛敬の德となりてあらはれ、親子一體の孝より、物我一體の孝に進み、吾人

一個の小身が、天地の間に介在して、縱然として太虛と同體となり、至誠無息、物に凝滯せず、跡に拘泥せず、獨往獨來、活潑々地、只だ心のまゝに行ふ所は、すべて太虛の道と合し、適當恰好なる景象は、秤の權の定まる所なくして往來滯らず、物に應じて其輕重を計り得るが如くなるに至ると考へたり。故に曰く、『聖人の行ふ所は、心に發して事節に中るが故に、之を權道といふ。』と。道の千篇一律固定的のものにあらざるをいふなり。氏が所謂權道とは、彼の孟子以後說く所のものと、其意を異にせるものなるをしるべし。

（備考）孝は、天地未だ畫の前にある太虛の神道なり。天地人萬物、皆孝より生ぜり。春夏秋冬風雷雨露、孝にあらざるはなし。仁義禮智は、孝の條理なり。五典十義は、孝の時なり。神理の含蓄する所を孝となす。言語を以つて名けいふべからず。強て象を取りて孝と云ふ。孝の字は、老子の二字を合せて作れり。文字の傍偏をなす時、畫を省きしなり。天地の未だ開けざる太虛の理を老とし、氣を子とす。天地既に開けては、天を老とし、地を子とす。乾坤を老とし、六子を子とす。日を老とし、月を子とす。易の字、日月を合せて作れり。日月老子、其義一なり。易と孝經と、隔なき道理なり。山を老とし、川を子とす。中國を老とし、東夷南蠻西戎北狄を子とす。君を老とし、臣を子とす。夫を老とし、婦を子とす。德性の成通に於ても、仁は老たり、愛は子なり。此理を以つて萬事萬物に推して見れば、孝の理なくして生ずる物なし。此理の我心に有するも

のを取りて受用すれば、愛敬なり。上より下を見れば、老夫の幼子を携へたる體にして、愛の象なり、下より上を見れば、子の老を戴きたる體にして、敬の象なり。其親を愛する心は、天下に於いて憎むものなし。其親を敬する心は、天下に於いて慢るものなし。愛敬親に事ふる一心の上に靈して、天地同機、萬物一體の性命、明なり。一日も私欲亡ひて天理存する時は、其大を尊るに外なく其小を見るに内なし、僅に始て仁をいふべし。義は、孝の勇なり。禮は、孝の品節なり。智は、孝の神明なり。信は、孝の實なり。赤子孩提の時、孝の理始めて親を愛するに發出す、花の僅に綻びむとするが如し。其長するに及びて、心に親を尊ふの敬發出す、花の清香を發するが如し。此愛敬の德、親に始めて顯はる。故に本文の名を改めて、親に事ふる道を孝と云ふ。母に事へては、愛敬並ひあらはれ並ひ存す。父に事へては、愛事を用て敬内に伏す、之を父の慈といふ。父の慈と子の孝とを合せて、父子有親といふ。此孝を以つて君に仕へては、敬外にして愛内なり。君に於いては、愛敬並ひ伏して威嚴備はり。仁政行はる。君の仁と臣の忠とを合せて、君臣有義といふ。妻に於いては、愛尊き敬存す。夫に於いては、敬を用ゐて愛存す。夫の義と、妻の順とを合せて、夫婦有別といふ。心ありて如此する。にあらず、心の妙にして自然にかく變化するなり。其中自ら淺深の天則あり。兄に事ふること父に事ふるが如く、弟を慕むこと子を愛すが如くし、兄の惡と弟の惡とを合して、長幼有序といふ。朋友は、眞實無妄の天道を父母としたる兄弟なれば、實なきものは朋友にあらず。これを朋友有信といふ。一人の人あり、子に逢ひては父と呼ばれ、父に於ては子といひ、君前には臣と名け、家臣には又君と稱せらるゝが如し。畢竟一人の人なれども、逢ふ所に隨ひて名替れり。これ本心の一德なれども、位により神通變化して其義極りなし。（孝經心法）

如上氏は、太虛靈明の本心、即ち愛敬の德を立てゝ、道德的本體となして、說を立てたりしが、氏は又他の一方に於いて、頑空なる人心の存在を認め、格律森嚴なる修養法を設け、意必固我問思雜慮を防止せむことを務めたり。乃ち氏は晦菴か白鹿洞規に倣ひて、藤樹規を作り、學問修養の方針を示せり。今其大要を叙せむに、（一）畏天命と尊德性とを以つて、持敬の要、進脩の本となし、（二）博學審問愼思明辨篤行の五事を以つて、進德の序となし、殊に其中篤行の類を別ちて、修身處事接物となし、其要を示して曰く、（イ）言忠信行篤敬、懲忿窒欲遷善改過を以つて修身の要件となし、（ロ）正其義不謀其利と、明其道不計其功とを以つて、處事の要件となし、（ハ）己所不欲勿施於人と、行有不得反求諸己との二事を以つて、接物の要件となせり。是れ其大要なり。亦以つて氏が前年に於ける、格律森嚴なる敎育法の一斑を想見すべし。

要之、氏が前半の所說は、上述の如く一方正道を立て、一方邪道を排するを以て、一代の天職と心得、論辯太た務めたりといふべし。而して其の全孝說は、氏が學說の根本主義なりと知るべし。當時に於ける氏が敎育法は、拘泥甚しき格律森嚴なる晦菴か經驗的

他律的修養法に依據せりといふべし。

(四) 良知(以下後半期之學說)

氏は、格律森嚴なる朱子學的立脚地より一轉して、圓通和豫なる陽明學的見解に移れり。前には拘泥甚しき他律的經驗的修養法を取りしに、今は直截簡明なる自律的主觀的考察法に據るに至れり。而して其說、良知を以つて基礎となし、兼ねて致良知を以つて、其終局の目的となし、格致の工夫に由りて、形後の意念を去りて、復性復初、良知本然の正に歸せむことを希待せり。今條を分ちて、氏が良知說の要領を叙せむ。

(一)良知は道德的規範。氏は、良知說を唱へて、生有道念を信じ、良知を以つて道德的規範となせり。故に『經傳は是れ吾人明德の註解にして、明德は是れ經傳の正經なり。』(藤樹全書卷六)といひ、又『書は雪中の兎迹の如し。』(同上)ともいひ、すべて道德法を我が內心の良知に取り、心外法なく、法は皆我が心に備はると考へたり。

(二)良知の體用。氏は良知の體をもて、太虛靈明の分殊にして、寂然として明鏡の如しとなし、良知の用をもて、太虛の萬物を化生するが如くに、常に惺々として發動し、鏡

の體の動かずと雖も、萬象の影を照さずといふ事無きが如しと考へたり。故に其體を說きては、『本、太虛と同體。』(大學十五條)といひ、又『明德(良知と同義)全體、太虛に充塞す』(同上)ともいひ、又『明德の本體は、少しも動く所なく、寂然不動にして、神明照々たり。』(答一尾書)ともいへり。要は其體、太虛と一如不二にして、純一無雜虛明中正のものなりと考へたり。而して其體如此純一無雜虛明中正なるが故に、其用となりてあらはるゝや、『欲に動かず、物に滯らず、慈愛恭敬、溫々惺々、坦蕩々たり。』(答中西常隣書)といひ、又『滿腔子皆惻隱の心。』(同上)ともいへり。知るべし、氏が所謂良知說は、死灰枯木、恬淡寂莫の無爲說にあらずして、惺々として發用して止まざる宏大なる博愛說なることを。

(三)良知の障碍。氏は良知以外に、惡の源因の存在を認めて、之を意念といひ、人心といひ、人欲といひ、凡心といへり。而して之を以つて、良知の障碍となせり。曰く『此心、天理に專にして、人欲の私なき時は、則ち聖人の心なり。』(藤樹全書卷六)といひ、此心、意念の私を拂ひて、天理の純善に復歸せざるべからざるものと考へ、其意念を除去する工夫を說けり。而して意念の五病をあげて曰く、(1)習心、(2)好惡の執滯、(3)是非の素定、(4)名利の欲、(5)形氣の便、と是なり。氏は思へらく、吾人の本心は、元惺々たる眞樂

を具ふれども、人の凝氷焦火の苦患を受くるは、皆此五病による。故に心廣體胖の安樂を受けむには、先づ此五病を去るの工夫無くんばあらず。五病除かるれば、滿腔子皆良知となり、眞樂愉々たるものあるべしと。曾て人に與へて良知及び意念の存在の狀態を說きたるあり。曰く、『心法の取入れ難成、善惡の合戰のみにて御暮し候由、善惡の實體を御辨へなく、事上に跡をとめて、善惡を御定め誤りにて可有之候。善惡の實體は、心の上に有之事跡にあらず。一念、良知に至るを善とし、一念、道を離るゝを惡とす。然る時は、善惡の合戰可有理なし。如何となれば、一念、良知に至る時は、滿腔子皆善なれば、敵對すべき惡なく、一念、道を離るゝ時は、腔子裏、皆鬼窟となりて、退治の主人權を失ひて、征伐の勢なし。此にて善惡の合戰の覺あやまりなる事を御辨へ可有候。學術を知らず、主人公の守なき方寸を、辻堂にたとへ申候。辻堂は、主人なき故に、或時は貴人高位も腰を掛け給ひ、或時は乞食非人も寢起きの宿とし、又或時は狐狸蛇蝎の栖ともなる。其如く主人無き方寸には、往來寓居の者は、貴賤所を爭ふを善惡の合戰と御覺候かと推量申候。此寓居のものは、貴賤共に羈旅のわだものにて候間、盡く御追出し候て、辻堂にたとへたる方寸の內に、光明赫奕たる本尊のましまし候間、其を御索し候て、此堂の主と御定め候はゝ、何れの者も近付き申間敷候。此本尊無上の威力まします故にて候。』（答田邊子）といへり。思へらく、方寸元虛なり。故に良知此虛を守るにあらざれば、意念の來りて之を占據するあるべし。辻堂の空虛は、來往する人の休憩に一任するが如し。故に人は先天固有の良知を守り、意念の私を拂ひて、天理の純善に復歸するの工夫無かるべからずと。

（四）良知の安樂。　氏は、良知は本來安樂なる實體なりとし、其煩苦になやむは、意念の迷によると。曰く、『心の本體は、元大安樂あり、惑によりて日に種々の苦腦を生ず。』（大學十五條）といへり。蓋し是れ、所謂良知は、高尙なる道德的知と、高尙なる道德的情操とを併せたる體なれば、其良知の行爲に對して、滿足及び呵責を感ずる所以なり。良知の滿足及び良知の呵責によりて、或は喜悅の情、內に溢れて、浩然として大安樂の狀態となり、或ひは、悔恨の情、內に充ちて、懼然として大苦腦の狀態に陷ることあり。良知の體や、かくの如くなれば、氏は眞正なる良知は、必然的に行爲と相一致すべきものなることを信じたり。良知行爲と相一致して戾らざれば、內心は常に喜悅の情に充され、一毫苦腦なきの狀態に至るべし。故に曰く、『世界は、本來の樂土なり。意必ありて始めて變

して苦境となる。人は安樂を願はざるなく、却りて自ら苦境に入る。』（同上）といへり。是れ良知本來の安樂は、意必の爲めに、行爲は障碍せられ、人は此に內心の苦腦の狀態に陷るに至るといふ也。

（五）良知は安心立命の地。　氏は、又良知をもて、安心立命の地と定めたり。何を以つて然いふか。彼孔孟は、支那固有の思想たる絕對神靈なる天（主宰者）を目して、人間界に於ける、吉凶禍福、一切運命の支配者なりと信じ、一にも天を呼び、二にも天を呼び、天を以つて安心立命の地と考へ來りしが如し。然るに氏に在りては、『在天の神靈、即自己心中の靈光なり。』と道破し、他律を轉じて自律的に感じ、萬有神敎的信念を抱きければ、又他の外界の天に向つて、運命の解決を求むる必要を認めず、一に之を內界の良知に一任したりき。曰く、『良知を以つて、安心立命の地と定む。』（答岡村子書）と、又曰く、『性に復る（意念の私を去りて、本體の良知に復す。）は、鄉に歸るが如し。久しく客となりて、今歸らむとするに、其未だ鄉里に至らざる中、夢も覺も唯故鄉を念し、勞すれば歸思をまし、難にあへば愈歸思をまして、一息猶存すれば、此の心懈ること不能、百年の故鄉すら、猶斯くの如し、況んや道德は、萬劫不壞の家山なるをや。凡夫は、名利を以つて安心立命の地とすれば、事として名利の計にあらざるはなし。されば名利の爲めに、身命を惜まざること塵芥の如し。只此心を道にうつしぬれば、所謂眞志也。其一たび立つときは、德に入ること難にあらず。故に志立而學半と云へり。』（送戸田子書）とかく良知は、太虛の宿在にして、良知と太虛とは融通一貫なり。而して太虛の恒存不滅なる以上は、良知も亦恒存不滅なり。故に致良知の結果は、肉體の小なる我以上に、心靈の大なる我の存在を自覺し、差別的小我の境を超越して、絕對的大我の境に入り、是を以て、萬劫不壞の家山と認め、此に安心立命の地を定め、小我の吉凶禍福、生死存亡以外に、心廣體胖、悠々別に一境涯を開くに至るべし。蓋し人間の最も固き安心が、自己に値ありと信ずるによりてのみ得らる。絕對に對する翹望は、自己が絕對其物なるより、始めて滿足することを得べし。自己が絕對を離るゝこと一分なれば、猶一分の不安あることを免れず。是れ古來幾多の道德家は、天道の是非を疑ひて止まざる所以なり。氏が所謂良知は、絕對其物なり。萬劫不壞の家山其物なり。於此乎善良なる道德家は、更に高尙なる宗敎的生活を營むに至るべし。

氏歌ひて曰く。

世の中は、とてもかくてもありぬべし。心一つを住家とおもへば。

要之、良知說は、氏が後半學說の精神骨髓にして、又最後の極致なり。前半の所說が、常に他律的經驗的に傾向せしもの、今や一轉して自律的思辨的に發向し、默座澄心、自反愼獨、以つて其工夫を凝らし、此に圓通和融、道德の三昧に入らむとす。

(五) 性欲と人欲

氏は、良知をもて道德的本體となし、意念をもて良知の障碍となし、意念はあらゆる害惡の起元をなすものなりと考へたりき。意念とは、吾人が耳目口鼻四肢等の人心的關係より起る意志作用をいふなり。然らば氏の說により、此等の意志作用を除去せよといはゞ、吾人が一切の活動は、忽ち停止し、虛靜無爲の自然的狀態に陷らむとするにあらざるかを疑はしむ。於此氏は、別に本體良知より來る意志作用あることを說けり。氏は、人心的意志作用を名けて、人欲といひ、良知的意志作用を稱して、性欲といへり。性欲の發動たるや、人欲の發動とは全然相異し、性欲の社會的他愛的精神的合理的道德的なるに反して、人欲は個人的自愛的肉體的不合理的非道德的なりと考へたり。於此氏は、道德上性欲の最も尊重すべきを知り、道德の活動的ならざるへからざる所以を主張するに至れり。曰く、『明德を天下に明にせむと欲するものは、性の欲なり。名は、高からむことを欲し、位は、貴からむことを欲し、財は、積まむことを欲し、色は、美ならむことを欲し、形氣は、便利ならむことを欲し、事は、通利ならむことを欲し、器は、好格ならむことを欲するものは、人の欲なり。克く人欲を去りて、性欲を存するものは、初學立志の要訣、點鐵成金の妙術なり。蓋し性欲、常に存すれは、則ち自反して愼獨、己を正して人に求めず、上、天を怨みず、下、人を尤めず。是を以つて心廣く體胖にして、富貴利達、亦命分に隨ひて通せざる所なし。子曰く、學ひて時に之を習ふ、亦說はしからずやと、其斯の謂なり。如し人欲常に存すれは、則ち其未た之を得さるや、之を得むことを患ひ、既に之を得たれは、之を失はむことを患ふ、寤めて如此、夢にも亦之を憂患す。所謂小人は、長へに戚々たりと、是なり。』(藤樹全書卷六)と。氏は、人欲を意念の發動なりとし、偏倚せるものとなして、極力之を抑制しなから、他の一方に於いては、性欲の發現か、良知より來りしものとなし、最も中正なるものとなし、性欲のまゝに活動すべきものなりと大に主張せし點は、猶彼獨の「カント」か、善意の絕對的尊嚴を主張して、あらゆる感情を排斥しなから他の一方に於ては、其感情的なるに拘はらず、信仰のみを許容して、之を尊重せしに相

似たるにあらずや。氏か所謂性欲と人欲との表を作れは、左の如くならむか。

欲 ｛性欲＝（良知的發現）―先天的―社會的―他愛的―精神的―合理的―道德的＝（中正）
　　人欲＝（人心的發現）―後天的―個人的―自愛的―肉體的―不合理的―非道德的＝（偏倚）

（六）格物致知

道德的修養の工夫は、格物致知にありとせり。曰く、『格致は、誠意の眼目、入德の門戶、聖となるの途轍、學者、力を用ゐ手を下すの實地、聖學の始をなし終を成す所以なり。』（大學考）と、又『千古不易の學脈、入聖の正路。』（大學十五條）と、いへり。かくて格致の工夫を積めは、能く意念の私を去り、人欲の倚を正し、良知の靈光自ら發現し、性欲の中正に從ひて活動し、人德は天德と一致し、所謂天人合一の狀態に止るに至るべしと考へ、之を稱して聖人とはいへり。『天理に專らにして、人欲の私なき時は、則ち聖人の心なり。』（蕺樹全書卷六）と、是なり。

格物致知の說は、學者の最も異說ある所なりしか、氏は之を解して、『格とは正、物とは視聽言動思の五事、致とは至るといふ義にして、知とは良知を指していふなり。』とかくて曰く、『天下の事、萬端なりと雖も、五事を不離。五事なき時は、萬事息む。五事は萬事の根本、善惡の樞機也。故に五事皆良知に率つて、天下の事善ならざるはなし。』（大學考）といへり。要するに氏は格物の物を解して、心の物などいふ空漠なる成說を斥けて、確に之を五事なりといへり。是れ格物說に對して一歩を進め、從來の抽象的說明をして、具體的に說きたるものといふへし。而して格物は致知を離れず、致知の功は格物にあり。かく格致の修養を積みて、誠意正心より、治國平天下の功全きに至ると考へたり。

（備考）格者正也。物者事也。事物之變雖無紀極。而未有出視聽言動思之五事者。故洪範舉五事以統萬事。是以正視聽言動思之不中節者。此之謂格物。致者至也。與至於命之至同義。至於此而不違之意也。天性之靈昭明覺。之謂知。天性本中和而不倚。無偏無蔽。無有作好無有作惡。毋意毋必毋固毋我。無內外無將迎。無才識無技倆。無終始無生死。五性之用知最先。而所以妙衆理而宰萬物者也。故明々德之工程。以此爲集。孝經所開示膝下親戚。孟子所謂良知是也。吾人之身心至於此而不違。苟日新。日々新。又日新。此之謂致知。蓋學者格物。而身心須臾不離知。則明德照明光於四海。通於神明。若視聽言動思不中節。則與知相離而昏亂迷妄。而視而不見。聽而不聞。食而不知其味。是故致知在格物。而格物者。正五事之非禮。而皆至性之靈覺而不違者也。夫然故致知之外無格物。々々之外無致知。々々之功必在格物。々々之主宰必在致知。々々以格物。々々以致知。猶眼目手足之相爲用也。而知本也。物末也。本立而道生。知本末之先後則近道矣。（大學十五條）

(七) 誠意

前にも述べたるが如く、氏は意念の存在して、常に良知の障碍をなすべきものと信じ、意あり故に人欲となりて發動し、百惡生ずと考へたり。故に氏は意を論ずる事、詳密なり。氏誠意の說は、即ち毋意の明德に復歸するにありといへり。曰く、『意は、萬欲百惡の源なり。故に意ある時は、明德昏昧、五事顚倒錯亂するなり。意なき時は、明德明徹、五官令に從ひ、萬事中正通利なり。是を以つて聖人の德を開示するには、曰く子絕四、毋意毋必毋固毋我と、大學の道を敎ふるには、曰く、誠意と。人の欲心昏迷萬端なるに、只意の一字を以つて、或は聖德を明にし、或は學術を開示し給ひて、他の病痛を指點し給はざる意、能可著心眼所なり。然るに意の字解、大學には、心之所發也と訓し、論語には、私意なりと訓し、異義あるに似たり。陽明も不及深考して從此解。今、竊に之を考ふるに、如未瑩。如何となれば、心之所發は本來の靈覺、有善而無惡者也。凡そ心の起發、有善有惡は、本心の裏面に、意の伏藏ある故なり。然らば則ち惡念は、意の伏藏より發起して、本心の發見にあらず。然るを只發する所のみとして、善念も意なり、惡念も意なりとする時は、善惡の根

據分明ならず。且つ發する所ばかりを退治して、伏藏の病根を省察克治する講論無き時は、端本澄源の功、缺けたるに似たり。(中略) 蓋し意とは、心之所倚也、誠意の意と、絕四の意と、本異議なし。如何となれば聖の聖たる所、無他、意なくして明德明なる而已矣。學者の所求も亦無他、意を誠にして聖人毋意の明德に復る而已矣。聖德には、本體自然上に論を立つる故に、毋意といへり。大學には、用力工程上に論を立つる故に、誠意といへり。毋といへるは聖人の事、絕といへば病あるによりて、誠意との玉ふ。其意義至つて、爲精密明備也。此は我が道の、三敎に冠たる所なり。或曰く、絕意といひて病あるは何そや。曰く、志を立つるにも、戒懼の功を用ゐるにも、初學の時は、此に於いて不倚事能はず、此亦意の類なり。故に初學より意を立てむとせば、頑虛に入る弊無き事能はず。誠は純一無雜、眞實無妄の本體即良知也。心の所倚、良知の誠に率ふ時は、倚と雖も邪僻にあらず。倚を以て不倚に至る時は、倚も又不倚の理なり。勿論の事なれども、誠意の立言切實哉、精妙哉。』(大學考) と、氏は意を解して、良知の障碍なりといひ、心の所倚なりと云ひ、誠意の意と絕四の意と本異義なしなといへるを見ば、氏は意は到底惡なりと考へたりしなり。故に意念欲心の發動を戒懼して、念々良知の本體を離れず、意を誠にして毋意の

明德に復歸し、誠意の極、人欲は、自然に性欲の發動と相一致して、悖らざるの境涯に至らざるべからず。是れ氏が誠意の說の概要なりとす。

(八) 神儒一致

氏も亦惺窩、羅山と同じく、神儒一致說をなせり。氏は、かねてより我が國固有の神明の大道を信し、是れ天地自然の大道にして、漢土聖人の道と揆合一致せりといへり。曾て伊勢大廟を參拜して、其志を抒へて曰く、

光華孝德績無窮。　正與羲皇業亦同。　默禱聖人神敎道。　照臨六合太神宮

と、其意以つて見るへし。

氏は、神道大義一篇を著はして、神道の眞義を發揮せり。其意に思へらく、神道は正直を以つて體となし、愛敬を以つて心となし、無事を以つて行となすと。而して其正直愛敬無事を以つて、知仁勇の三德に配し、正直を知とし、愛敬を仁とし、無事を勇なりとせり。今、神道大義より要領を撮記せむ。曰く、『(一)正直とは、天理自然の誠を本として、何事も有るべき樣なるをいふ。平生のことわざの、吾心に省みて耻しき事あるは、人にもかくすものなり。是れ正直にあらず。況んや心中に、少しにても惡念妄想を止むるは、大に忌む事なり。心地光明にて、內外なく曇りなければ、水精の玉に日月の映り玉ふ如く、常に天地神明と相通ず。此故に人は天地の德にして、神明の舍ともいへり。五行の秀氣を得て、生れたるものなればなり。(二)愛敬とは、上は下を愛し、下は上を敬ひ、上の心はよく下にくだり、下の情はよく上に達し、位の上下、禮の法は嚴なれども、心情相通じ、國治り天下平なるは、愛敬の法なり。親は子を愛し、子は親を敬ひ、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ひ、夫は婦を愛し、婦は夫を敬ひ、朋友長幼貴賤、平に相愛敬するは、人倫の明なるなり。愛敬は、心の一德にして、陰陽の神なり。陰は陽の根となり、陽は陰の根となる如く、愛の至は敬なり、敬の極は愛なり。子を愛して、大切に思ふは敬なり。君を敬して身命を惜まざるは愛なり。君に對しては、敬あらはれ愛伏し、母に向ひては、愛發し敬つく。父には、愛敬並び行はる。學びたる人、學ばざる人のかはりなく、無心自然にして然り。愛敬の神道妙用、神明不測なるとを知るべし。天氣のくだり下り、日月の下土を照臨し給ふは、無心の愛なり。地氣ののぼり昇り、山澤氣を通じて、水木生じ萬物を養育するは、地の敬なり。天地人一貫なり。無心有心は時なり。(三)無事は、神人の常なり。春夏秋冬、日月晝夜の約束違

はず、雲行き雨施し、風ふき雷おこり、露おき霜結ぶ。此程大成神通妙用は無けれども、常の事にて無事なる故に、人何とも思はず。世俗に、日月は生神なりと云へり。神は、形なくして用あれば、目に見えず。目に見ゆる神は、日月計りなり。誠の生神なり。天下の人、貴賤を擇ばず、毎日毎夜利生を得、福を受けれども、無事にして常なる故に、有難し辱しとも思はず。人の手とり、足引き、物云ふも、是れ何者ぞ、神の妙用にあらずや。目は、五色なくして五色を辨へ、口は、五味なくして五味を知り、耳は、聲なくして五聲十二律を分つ。心は、形なく色なく、聲なく香なくして、天下の萬事を掌る。此皆鬼神の妙用なり。如斯成る廣大高明、深遠神妙なる道理を辨へずして、小さき器となし、世の中に害はありて益なき事をば驚き信ず、眞理を知らざれば也。』（神道大義）といへり。

氏は更に、正直と知とを合せ解して、曰く、『正直の德は、知、明かにして鏡の美惡を照すが如し。（中略）神道には、內外明暗を以つて心を二つにせず、正直を以つて木躰となす。』（全上）といひ、又愛敬を仁と合せ解しては、曰く、『愛敬の德は、天地同根、萬物一躰なり。人慾清く盡きて、天理流行す、空々如たり。其大、外なく、其小、內なし。天地萬物、皆心中にありて、我に不在といふ事なし。故に我なく、無慾にして靜なり。富貴貧賤、安樂患難、死生

壽夭、皆我が一事なり、故に憂ひず。中國夷狄、皆我領內なり、故に好せず、惡せず。仁者富貴なる時は、人を敎育し、貧賤なる時は、退きて德を養ふ。生を得ては行ひ、死を得ては休す。君子は、入るとして自得せずといふ事なし。』（全上）といひ、又無事を勇と合せ解しては、曰く、『勇は、堪忍を尊ぶ。能く堪忍すれば、無事なり。（中略）人々善き心ばへ振舞あるを見ば、此こそ此人の本心なれと喜び親しみ、先日の非を咎めざるは、君子の心なり。惣じて昔より大勇の人は物咎めせず、常に怒れる事稀に、溫和にしておほとかなるものなり。之を沈勇ともいふ。』（全上）といへり。

氏は又三種の神器をもつて知仁勇（正直、愛敬、無事、といふに同じ。）の三德の象となし、鏡を知に比し、玉を仁に比し、劍を勇に比して之を說明せり。曰く『天地開けて人の道あり。人の道は、即ち天地の道也。天地は、不言にして人に敎垂れ玉へり。神聖之を輔くるに、言を以てし給ふ。神の代には、未だ文字も無かりし也。象といふものありて、人の德を象どり、敎をなし給へり。上古の書典なり。天照皇太神の御孫　瓊々杵尊に、天下知召す可き御德備り、おはしましゝかば、天神の初めの　國常立尊より傳はり給ふ心法を、三の象によせて象り給へり。是れ我が國文字書典の淵源にして、天下國家を齊へ給ふ政敎なり。（中略）

夫れ心は、形色なく聲臭なく、空々として遠近内外なし。然れども此心の中三の德あり、能く萬事萬物を照し、喩として辨へずといふ事なし。薄博淵泉にして、時に之を出すの德をば、鏡を鑄させて之に象り玉へり。神明不測にして私なく、寛裕溫柔慈愛の德をば、玉を磨かせて之に象り玉へり、人は萬物の長なれば、天下に恐るべきものなく、堪忍の力強くて物を破らず、神武にして不殺の德をば、劍をうたせて之に象り玉へり。唐土の聖人は、之を知仁勇と名付け玉へり。天地の神道は、倭漢同じ事なり。（中略）我が朝の神皇の象と、唐土聖人の言と、符節を合せたるが如し。故に神道に深き者は、儒道を借らでも心法明に政敎備はれり、況んや異端をや。易簡明白、至れり盡せり。」（全上）と。

由是觀之、氏は儒道の立脚地より、神道を解し來り、神道の正直、愛敬、無事を以つて、天地の大道なりといひ、之に彼の知仁勇の三德を配合して、神儒本來の眞意同一なりといひ、又更に一歩を進めて、天地の大道即自己内心の良知と論及し、又神明の本躰即良知と道破し、偏に主觀的考察に耽れる王學的眼孔を以つて、神道を解釋するに至れり。氏が神儒一致說は、氏が敬神說なり。氏が敬神說は、やがて尊皇說なり。氏は實に我國王學の開祖にして、又此の派に於ける尊皇論の前茅をなせしものなりと謂ふべし。

（九）歸結

要之、氏が學說は、前後二期に截斷して之を見るべし。前半は朱氏の步趨を學び、後半は王氏の規範に據れり。而して以つて我國王學の開祖となれり。當時朱學全盛期に際し、道德界別に一旗幟を樹て、隱然相對抗するに至れり。其功偉なりといふべし。

氏が學說は、氏が門生森村子、歸省に際して「知止之歌」一首を作りて、擇善固執の要を示せる語中、能く其眞義を明示せり。書して以つて歸結の語に代へむ。

萬欲紛擾中。止躰常寂然。小人揜不善。良知不滅玄。或閑室靜坐。或對境接人。
反求吾心裡。時常擇此眞。如未有所得。先致其良知。良知發見時。愼思明辨之。
氣機雖發動。仁即定靜安。時習而不罷。遂必有所觀。見之常無離。此謂必有事。
不用纖毫力。存養眞實義。學者之通弊。氣象與意味。毫厘千里誤。其機全在此。
棚柄已入手。須臾不可離。天君自玆立。意念不爲祟。識習漸消化。必復孩提誠。
誠者聖人本。天地亦此貞。人皆可爲堯。學脉甚分明。聖神之敎化。悉由此止生。
眞樂常惺々。萬境咸元亨。

第二章　熊澤蕃山（二二七九——二三五一）

（一）傳記、——（二）學風、——（三）天道と人道、——（四）道德の目的は慈愛、——（五）格物致知、——（六）人生の極致、——（七）神道を道德の本源とす、——（八）歸結、

（一）傳記

熊澤蕃山、名は伯繼、字は了介、助右衛門と稱す。蕃山又は息遊軒と號せり。元和五年、京都に生る。父を野尻一利といひ、肥後守加藤嘉明の臣たりき。氏は出でゝ其外祖父、守久に養はれて、其姓、熊澤氏を冒せり。氏、幼より岐嶷にして、學を好めり。年十六にして、備前岡山侯池田光政に事へて、祿七百石を食めり。此時に當りて、氏が學日に進み、優に三昧に入れり。闔藩の老生、一人の之に及ぶもの無かりしと云ふ。然るに氏が家は、元、武人なりければ、氏も亦、漸く之に志し、自是克己禁欲、自ら進みてあらゆる苦楚を嘗め盡し、身體を練修し、以つて他日の用に應せむことを期せり。

既にして侯、其賢を察し、益重く之を用ゐむとしけるに、氏忽ち翻然として悔悟して曰く、『君に仕へて政に任せられむには、學問なかる可らず。』と、乃ち致仕して近江の相原

なる姻戚伊庭氏を便りて、文武の道を講究せり。嗚呼、賢主の知遇を辭し、大夫の班位を棄てゝ、決然として此に至るもの、其志の程、以つて想見すべし。

一日中江藤樹の賢を聞き、自ら思へらく、『今の世に當りて、此人を捨てゝ誰に適從せむや。』と、是日即ち束裝して往いて謁し、業を門下に受けむことを請ふ。藤樹、辭するに人師たるに足らざるを以つてす。氏益々請ひて已まず、二夜其廡下に寢ぬ。而も遂に許されず。氏は、空しく歸れり。時に寛永十八年、氏、年二十三。其年再び往いて訪ひ、親の國に在して之を弟に託せし事など話し、情を陳して頻りに乞うて止まず。藤樹曰く、『學問の淵源、孝より先なるはなし。孝はよく養ふを本となす。己が爲めに養ふことをなさずして、今之を弟に託するは、子が志違へり。子よく奉養寄性せば、何處に居るとして學無からむ。』と、於此歸りて親を定省し、遂に一家を擧げて江州に移り、此に藤樹の許しを得て、其敎を受くるに至りぬ。氏弟妹五人、相共に母に孝養す。時に父、一利祿を失ひて、一家具に貧窮に及びしが、然も少しも屈撓せず、之に處して晏如たり。かくて勤學すること五年に及べり。後年、氏自ら語る所によれば、曰く、『浪人の間、五六年は、江州下民の食、百合粉雜炊といふものを食し、糠味噌を菜にして、汁肴酒茶なく、清水紙子木綿布子にて

寒を防ぎ、衣食共に吾を忘れて、書を樂しみて居たりき。」と。是を以て藤樹も大に其爲人に感じ、『同聲相應じ、同氣相求むるの機あり。講習討論、心と相融り、甚だ輔仁の益、莫逆の趣を得たり。』と喜びけり。既にして藤樹は、陽明學に向ひ、深く自ら悟る所あり。擧げて之を氏に授けたりといふ。於此氏も亦心を致良知の學に致して、倦むことを知らず。氏自らいへるあり、『書を見ずして、心法をねる事三年。』と。亦以つて此間の消息を窺ふべし。氏は於此藤樹の推擧によりて、復岡山侯に仕へ、專ら國政に參與し、力を救世濟民に致せり。時に年二十七。

氏は、於此再び藩士の列に加はり、祿三百石を受けて側用人となり、三年、番頭に抽んでらる。侯、以つて王佐の才ありとなし、爲めに異例の拔擢をなし、直に以つて大夫となし、采地三千石を賜ひ、日々質問して國政を行はしむ。氏は、かく頻りに明主の知遇を受け、風雲に際會して、大に經綸劃策する所あり。時に自ら思へらく、『國を治め天下を平にするには、今日の急務として先づ民に道を敎ふるに在り。』と、於此大に敎育を國內に興し、敎育を以つて爲政の本源となせり。又諫訟箱を設けて、下民の情を察し、時弊を救ふの端緒を開き、更に宗敎上の取締を嚴にし、堤防を築き、川澤を通じ、武備を整にし、奢侈を抑へ、一向政に心を碎きければ、封內驩然として其治績を謳歌するに至りぬ。太宰春臺が、『明良の遇、實に千載の一時なり。』といひしもの、實に此時に在り。

此時に當りて名聲甚籍、普く天下に知らるゝに至りぬ。其の江戸に入るや、令名を聞きて謁を請ふもの、上は列侯より、下は太夫士に至るまで、其數を知らざりき。而も譽の揚る處、毀之に伴ひ、盛名の下、久しく居り難し。天下の敬重、彼の如くにして、遂に亢龍の悔に逢ふもの、豈悲しまざるべけむや。於此誹謗の聲は、漸く起り、專權を以つて名となすに至りぬ。氏は、國に歸り、一日出獵して落馬し、右臂を傷け、自らいふ、『口强き馬に乘れず、弓引かれず、鎗も不自由に候へば、武士の務め是迄なり。』と、爲めに上書して骸骨を乞ひ、其采邑寺口村に退隱し、自ら號して蕃山といふ。

筑波山、はやましげ山しげゝれど、思ひ入るには、さはらざりけり。（新古今集）

蕃山の號は、此古歌に取りたりしなりと云ふ。其意のある所、以つて見るべし。時に年、三十九。

其翌年には京師に徙り、國典を學び、雅樂を肆ひ、優游以つて年を送りけるが、名聲復〻揚りて、天朝の公卿之を慕ひて、送迎絕ゆる時なし。然るに虛說造言、復〻紛起し、讒にあひ難

に罹り、心にもあらぬ惡名を蒙り、久しく一處に留ることを許さず。乃ち去りて大和吉野山中に隱る。歌あり。曰く、

よしやよし、吉野の山の山守となりてこそ知れ。花の色香を、

幾何もなくして、山城の鹿背山に移り、播磨の明石に轉じ、又大和の郡山に徙り、更に下總の古河に遯れたり。かく氏は幾多の迫害にあひ、窮阨に陷りしかども、經世の志、時に或は猶休まず。封事二十一箇條を幕府に上りて、時政の得失を陳じけるが、却りて將軍の旨に忤ひ、禁錮せらるゝに至れり。幽囚四星霜の久しきに及べりしかど、而も毫も憂忡の色なく、人の來りて當世の事を問ふ者あれば、默然として答へず、即ち笙を取りて之を吹奏せりと云ふ。其所謂封事は、今傳ふる所の大學或問是なり。元祿四年、古河城中に卒す。享年七十三。儒禮を以つて、城下の鮭延寺に葬る。

氏人となり、溫良寬宏、其榮達困阨の如きは、たゞあふ所に任せて毫も疑はず。蓋し優なる哉、游なる哉。其平生家人奴婢すら、未だ嘗て其喜慍の色を見し事なかりきと云ふ。其家を治むるや、家法甚だ儉なり。身、太夫の班位に列しながら、妻女は夙に起き夜に寐ね、家事に勤勞し、婢女甚だ寡く、衣服飲食に至るまで、淡然として營む所なく、閨門正しく、

家道齊ひ、施いて隣里鄕黨に迨び、愚夫愚婦と雖も、皆其德に化せざるはなく、其德を慕ふ事、父母を思ふが如し。氏又友に厚く、客を好み、文談武論、典古に覩中し、相親しむこと、骨肉の親の如し。氏嘗て岡山に執政たりし時、公に從ひて江戸に赴く。祿位已に高く、趨從甚だ盛なり。途、大津に宿す。同學の友、笠原竹友之を聞きて、鰹鯖を竹皮に包み、杖頭にかけ、蹩躄徒步、逆旅に抵りて見えむとを求む。主人其微を見、之を輕んじて禮せず。竹友、乃ち名姓を陳じ、之を久しくして通ずることを得たり。氏驚喜して曰く、『笠原先生來れるか、何ぞ速に告げざりしぞ。』と、即ち起ちて出でゝ之を迎ふ。竹友曰く、『今日、吾太だ疲れたり。』と、直に堂廉に踞す。氏、下りて自ら其鞋を解く。竹友、笑ひて謝し、相携へて堂に上り、檜を開きて酌を命ず。竹友、乃ち齋す所のものを出して下物となし、相共に舊を談じ、終宵歡を盡して去れり。見るもの嗟嘆せざるはなかりき。

其連りに讒構にあふや、寧處すべからず、身は日に逆境に淪みて、名聲は愈高し。而して其逢ふ所に處して裕如たり。曾て京都に流寓し、一日小倉少將と共に、元政を深草稱心菴に訪ひ、少將琴を鼓し、氏は琵琶を彈じ、元政和歌を賦しぬ。一時の風韻、後世をして追懷せしむ。思ふに氏は、富貴貧賤其逢ふ所に處して之に安んじ、其人品は、寧しろ困阨の

爲めに、一段の光彩を添へたるを覺ゆる也。

其著、集義和書十六卷、同外書十三卷、等は、其學說を見るに最も便なり。其他、大學或問二卷、大學小解一卷、中庸小解二卷、論語小解八卷、源氏外傳若干卷、等あり。

(二)　學風

藤樹が陽明學を開きしより、學派は、全く二派に分れたり。曰く、省察派、曰く、事功派、是なり。前者は、省察體認、個人性の完成を希ひ、後者は、治國平天下の國家經綸の實功を圖れり。三輪執齋、佐藤一齋を始じめとし、其他、川田雄琴、中根東里、吉村秋陽、奥宮慥齋、池田草菴、等の如きは、前者に屬し、大鹽中齋、及び山田方谷、春日潛菴、横井小楠、佐久間象山、西郷南洲の如きは、後者に屬するものなり。而して氏の如きは、事功派の翹楚といふべし。

氏は、思へらく、『學は、一流に拘泥し、徒に異說を立つべからず。要は、大道の實義を心得だらば、宜しく時處位に應じて、之を國家經綸の上に施さゞるべからず。』と。故に氏は、先賢の說の異同に對しては、殆んど之を講究することを爲さずして曰く、『予は自己の德を成さむが爲に、益を取るのみ。古人も、方は、汝の身に在りといへり。心を磨かむが

爲めに、師を取る事は、己が位によりて、自ら擇ぶ可き所也。先覺は醫師の如し、己の病を治するに便なる人を求むるのみ。未だ時と清和とを思ふに暇あらず。』(集義和書卷十二)と。かくの如くなりければ、氏は、古聖賢の成語を見ること極めて輕くして、是れ古聖賢が、其時處位の宜しきに應じて述べられたりし語なれば、必しも永世不易の格言として之に泥む可からずとして曰く、『聖賢の迹のみ見て、其故を知らず、時處位の至善を辨へず、人情時變に通せず、一流となりて、大道の基本ならず。』(集義外書卷二)といへり。されば、從來最も異論ありし朱王學說の異同の如きは、氏に取りては、殆んど一考覈に値せず。只々曰く、『道統の傳より來ること、朱王共に同じ。』(全書卷八)といひ、又曰く、『朱王の世、學者の迷ひ異り、地を易ゆれば同じかるべし。』(全上)と。

然らば氏は、藤樹に對しては、如何に之を考へたりしか。氏は思へらく、『藤樹は、大道の實義を得たる人なり。而して己も亦、藤樹が實義を繼承したるもの也。此實義たるや、古今東西の差別なく、一貫して差ふこと能はず。而も之を應用實現する一段に至りては、時處位の至善に應じ、人情の變に通せざるべからず。』と、曰く『心友問ふ、先生は、先師中江氏の言を用ひずして、自ら是を立て玉へる高慢也と申者ありと。曰く、予が先師に

受けて差はざるものは、實義也。學術言行の未熟なると、時處位に應ずるとは、日を重ねて熟し、時に當りて變通すべし。予が後の人も、又予が學の未熟を補ひ、予が言行の後の時に叶はざるを改むべし。大道の實義に於いては、先師と予と一毛も違ふ事能はずして、予が後の人も、亦同じ。其變に通じて、民人倦むこと無きの知もひとし。言行の跡の不同を見て、異同を爭ふは、道を不知なり。』(集義和書卷十三) といへり。而して其所謂實義とは何ぞや。曰く、『問ふ、何をか大道の實義といふ。曰く、五典十義是也。一事の不義を行ひ、一人の罪輕きものを殺して、天下を得る事もせざる實義なり。不義をにくみ、惡を恥づるの明德を固有すれば也。此明德を養ひて、日々に明にし、人欲の爲めに害せられざるを、心法と云ふ。是れ又心法の實義なり。先師と予と違はざるのみならず、唐日本と雖も、違ふ事なし。』(全 上) といへり。蓋し藤樹は、其性行隱君子的にして、其常に說く所は、個人は完全なる個人として、社會に對せざるべからずといひ、個人を本としての倫理を說きしが、氏は之と異り、爲政家的立脚地にありて、治國安民の經綸を說き、公利主義を鼓吹せしが如し。是れ氏は、藤樹と其性格を異にし、其境遇を異にせしより、如此相似ざるに至れるものなるべし。氏は、其相異は、先師と時處位を異にせるが爲めなりと考へたりしなり。

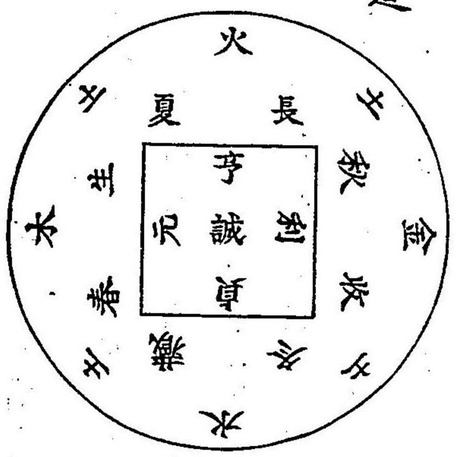
尙氏は、藤樹と同じく敬神の念殊に篤くして、我が上古神聖の世の至德を景仰し、國民的自負心の鬱勃たるものあり。藤樹が一片の靈犀を傳へたるものといふべし。

(三三) 天道と人道

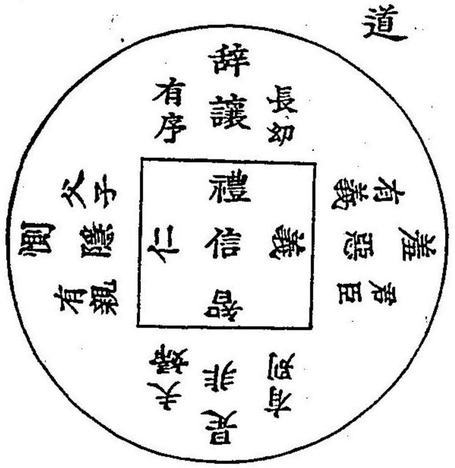
氏も亦、天道と人道との相關を信じ、道は他に求むる事を要せず、我心に在りと說けり。曰く、『我身は、即ち神の舍にして、我精神は、則ち天神と同じ。仁義禮智は、天神の德なり。』(集義和書卷二) といひ、又『此無極の理、二五の精、妙合して人となり、明德備る、是を性と云ふ。性中、自ら仁義禮智信の條理あり。天の元の、人に在るを仁と云ひ、天の亨の、人にあるを禮といひ、天の利の、人に在るを義といひ、天の貞の、人に在るを智と云ひ、天の至誠無息の、人にあるを信といふ。譬へば同じ水の流れなれども、所によりて名のかはるが如し。仁義禮智信は、未發の中なり、故に口と書す。喜怒哀樂は、氣の靈覺なり、故に○に書す。惻隱羞惡辭讓是非は、仁義禮智の端なりと雖も、氣に感じて聲色にあらはる、故に○に書す。云々』(全書卷六) ともいひ、天道と人道との間には、密接不離なる關係あるもの

にして、天道の絶對至善なるよりして、其一理の分殊たる人性も、亦絶對至善なるものと信せり。而して氏には天道及び人道の圖あり。左の如し。

天道



人道



父慈——子孝
君仁——臣忠
夫義——婦聽
兄良——弟悌
朋友——交信

かくの如く氏は、人性の稟賦を萬有神致的に解し去りければ、道の本體は、我心にあり、經書は、我心の柱脚なりと道破し、經驗說を舍てゝ直覺說を取るに至れるは、必然の勢なり。曰く、『道理本行は、我が心なり。經傳は、我が心の道理を解したるもの也。經傳を讀み得て悅ぶは、我が心の道理を見得たればなり。我が心の道理は、無窮なり。』（全書卷四）といへり。此等の言によれば、氏が天道と人道との關係說、亦以つて其一端を見るべし。

（四）道德の目的は慈愛

氏は、天道は慈愛を以つて其目的となすと信じ、之より推して人の本性の發現も亦慈愛ならざるべからずと說き、慈愛を以つて道德終局の目的となせり。其政治上に於ては、仁政を行ふを、人君の天職となし、君に仁政を行はしむるを、人臣の天職となすてふ說を唱へ、倫理說と政治說と相關連して、其慈愛說を極言したりき。其所謂天道の慈愛を本として、公衆的慈愛の人道を說きて曰く、『大道は、大同なり。俗と共に進むべく、獨拔すべからず。衆と共に行ふべく、獨異なるべからず。』（集義和書卷四）と、又曰く、『人情事變に通せず、一流となりては、大同の基本ならず。』（全書卷三）といひ、又『我道は、王道也。王道は、大道なり。大道は、大路の如し。』（全書卷七）ともいへり。而して此は天道と契合せる道なりと申明して曰く、『天地は、書なり。萬物は、文字なり。春夏秋冬行はれ、日月交る明なり、是神道なり。上世至德至知の時には、何ぞ書を用ひむ。元德感通して、木氣事

を用ひ、霞立ち梅咲き鶯啼き、萬物生々して、天氣温和なるは、吾に慈愛を敎ふる也。父母たるもの、慈愛の心ありて、子を養育す。君たる人、慈愛の德ありて、天下平なり。夫婦兄弟朋友、皆慈愛の情によりて、相睦し。慈愛といふは、生理の發見なり。唯此生理、天道にありては元といひ、人性にありては仁といふのみ。天道の春の敎によりて、仁慈の心の起る事、同氣相求め同聲相應じ、水は潤に流れ火は乾けるに就くが如し。何ぞ言を用ひむ。』(全書卷十六)と。而して其本性たるや、人々の普遍的に稟受せる所にして、此本性を喪失せざるもの即ち聖人なり。氏が、『天下の人、皆、聖人と同性同德なり。』(集義和書卷五)といひ。又『人の人たる實體は、聖人と異る事なし。』(全書卷十三)といへるもの是なり。然るに天下滔々、皆其性を喪失し易し。是れ人は本性の純善ありと雖も、他の一方に、此本性の障碍となりて、本性をして喪失に至らしむべき人欲の私あることを信じたり。是れ氏が道德修養說ある所以なり。

(五) 格物致知

道德的修養とは何ぞ。氏は思へらく、他なし、天理を存し、人欲を去る、是のみと。故に今日

一事を去り、明日一事を去り、其極は、則ち天理の至善に復し、一片人欲の私なきに至る、一片人欲の私なきに至れば、良知は自然に明になるべし。良知明なれば、良知は、必ずや行爲と伴ふべきものたることを豫想せざるべからず。故に氏は一片人欲の私なき處、是れ即ち聖人なりと考へたり。氏は、曾て人を敎誨せる言あり。曰く、『德は人の爲めにするにあらず、己、一人天理を存し、人欲を去る也。人欲を去りて天理を存するの工夫は、善をするより大なるはなく候。人倫日用の爲す可き事は、皆善なり。君子は義理を主とし、小人は名利を主とす。心には善く義理を主として、よく心法を受用すと思ふ人あれど、其人柄の全體、小人の位に住みて自ら知らず。其位をぬけざる者、古今多し。此處をよく得心して後、聖賢の書を見給ひ、人にも尋ねられ候て、皆入德の功となりぬべし。』(集義和書卷二)と。而して其天理を存し人欲を去るの工夫は、格物致知に據らざる可からずといへり。

格物致知の說は、藤樹は、從來の抽象的空漠なる說明を排して、所謂五事の說をなして、稍明確となれりしが、氏は更に明に具體的に之を說くに至れり。

氏は思へらく、格物の物とは、主觀的なる五事にあらずして、客觀的なる五倫の事なり。

天下事多端なりと雖も、道德は五倫を離るべからず。五倫とは、道德社會の總名なり。故に五倫の事に就いて、其知と行とを正し、以つて天理を存し人欲を去るを以つて、修德工夫の全體なりと考へたり。是れ氏が修養說が、只單に精神上の修養にあらずして、正に是れ行爲上の修養に屬せり。氏は特に倫理を政治と混一して、『大道は大同なり』（再出）といふ立脚地にありて、道德全體を說明し去らむとせり。故に其修養說たる格物致知の說も、只單に、反省愼獨の一個精神上の修養にあらずして、正に大に道德的社會と連關して說くに至れり。而して格物致知の義を釋して、『即物窮其理なり。』といへり。

先つ格物を說きて曰く、『物は事なり。事は、物の體なり、二にあらず。五倫の物あれば、五倫の事あり。五倫の物は、君臣父子夫婦兄弟朋友なり。五倫の事は、五典十義なり。五倫の物に即いて、五典十義の理を詳しく窮めて、心に得身に行ふを、格物致知と云ふ。』（集義和書卷九）といひ、又致知を說きて曰く、『知は、理なり。今の理を窮むといふは、書の上にて、文に即いて講明し、或は空談に議論す。是れ物に即いて、理を窮むるにあらず、文を以つて友を會すといふものにて、友を以つて仁を輔くるに至らず。仁を輔くといふは、父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信に於いて、過るを磨し、不足を補ひ、互に過を告げて相輔くるものなるに、今の學者は、過をきく事を厭ひ、至情をいふものを惡めば、即物窮其理の實を失へり。』（全上）といへり。かくて氏は、學問と實行、良知と行爲とを分殊して兩途とすべからざるを、反復陳論せり。

（六）人生の極致

氏は、道德的修養の結果は、遂に人生は、天道と相一致すべきものなりとし、之を以つて人生の極致なりと信せり。換言すれば、修養の結果は、人生の是非得失彼我の相待的なる差別界を超越して、天道の至公至明なる無差別界に到達すべきものなりと考へたり。而して其天人合一の狀態を稱して、仁者の境涯とし、又之を以つて安分の狀態とせり。

氏は、天人合一の境涯を以つて人生の極致となし、其眞趣を說いて曰く、『仁者は、太虛を心とす。天地萬物、山川河海みな我有なり。春夏秋冬、幽明晝夜、風雷雨露霜雪みな我行なり。順逆は、人生の陰陽なり。死生は、晝夜の道なり。何をか好み何をか惡まむ。義と共に

從ひて安し。』（集義和書卷四）といひ、又曰く、『仁者は、天地我心中にあり、萬物己に備はれり。故に幽明生死、隔なく、富貴賤貧、好惡なく、安樂患難したがひて行ひ、至公にして私心なく、至明にして私照なくして、浩々の氣、天地の間に塞れり。靜かなる時は、虛にして明なり、動く時は、直にして理にあたる。知至りて無事なる處を行ひ、其氣象を見るに、篤恭にして天下平なり。』（集義外書卷七）ともいへり。要は、人德至れば、天德と合一す。人の本心は、元來絕對的なる太虛と同體なれば、一片人欲の私なきの狀態は、これ人德は即ち天德と合一し、人生の差別界を超越して天道の無差別界に到達したるもの也。是を以て氏も亦藤樹が所謂萬劫不壞の家山となし、安心立命の地となせり。而して此境、是れ人生の極致なりと考へたりし也。氏は、孔子進德の順序を述べられたる言あり。又其意を詳述せられたるに外ならず。

（備考）孔子十有五より、七十までの次第の事、他の聖學をする人の受用によりて申候はゞ、志學は、道を學び德に入らむと志し、心中に向つて獨を慎しむにて候。三十にして立は、心志堅固に成りて、文武の才德成就したるにてあるべく候。四十にして不惑は、守り勤むるの力いらずして、心を動かさざるの位たるべく候。五十にして知天命は、天道に順從し、運命に出入して、造化を助くるの大賢の心地たるべく候。天なも恨みず、人なも咎めず、四時に應じて小袖葛衣を用ふるが如く、順逆に好惡なきこと其中にあり。六十にして耳順は、大にして化する也。聖人に至りたるにて候。是よりは少しの淺深熟未熟は候へ共、生知の聖にかはり無く候。孔子の志は、吾人にあらば、大方三十にして立つの心地たるべく候。石針の南北を指すが如く、義理より外に他念なきにて候。立は、天地人と並び立つにて候。不惑は、學士の天地萬物に惑はざる如き事にては無く候。賢人の心を不動なも越えて、死生順逆一致に候へば、富貴貧賤夷狄患難、入るとして自得せずといふ事無きにて候。知天命は、知行するの知にて、天命を吾物とする也。陰陽五行も、我なす也。運氣も我より進退すべき所御座候。他の死生有命、富貴在天の命を知るにては無く候。耳順は、精微を盡す所たるべく候。五十知天命までは、廣大に至る處にて候へば、言語を以つて解せられ候。六十耳順よりは、言語文書の及ぶ所に非らず候。從容として道にあたる形色は、天性也。形を踐むの位たるべく候。耳なもて、口鼻眼四體なかれ給ひ候。一身の中にて、神明に通ずるものは、先づ耳也。五聲十二律の精微を盡すも、耳にて候。七十、從心所欲不越則は、道器一貫、義欲一致、天道無心の動に同じきにてあるべく候。口なも聞けば則となり、足なあぐれば法となる事、其中に御座候。（集義和書卷四）

（七）神道を道德の本源となす

氏は、道德の本體は、吾が心中に在りと道破し、先聖賢の經書典籍を見ること、甚だ輕く、唯我獨尊の大識見を持せり。故に氏は、儒に依ると雖も、其精神は決して儒說に耽溺し、

漢土に心醉せず。稜々として敬神卑儒の思想を把持して、國民的自負心の欝勃たるを見る也。

或人問ひて曰く、『中夏の聖人を日本へ渡し候はゞ、道學の敎ひかゞ可被成候哉』と、氏は、之に答へて曰く、『儒道と申名も、聖學と云語も、被仰問敷候。其儘に日本の神道を崇め、王法を尊びて、廢れたるを明にし、絶たるを興させ玉ひて、二度神代の風に復り可申候。唐めきたる事は、何もあるまじく候。國土により風俗ありと雖も、天の神道は二なく候へば、儒といひ佛と云道といふ名を、其國ならぬ國へ持來る事は、道を知らぬ者のしわざにて候。』(集義外書卷二) といひ、更に、皇祖の至德を稱しては、『日本の　太神宮御治世の其昔、神聖の德厚く、能く天下を以つて子とし玉ひて、下民に近くおはしましたる事、堯舜の如くなりき。(中略) 太神宮は、御治世のみならず、萬歲の後までも、生きて不息の德明におはしまして、日月の照臨し玉ふが如し。參りても、又思ひ出しても、聖師に向ひたるが如く、神化の助け渺からず。』(集義和書卷二) といへり。

かくて氏は、又人の『神道を以つて、心をみがき身を修め、家國天下に及ぶべき道學とすべきや。』との問に對して、我國道德の淵源を述べて曰く、『三種の神器は、則ち神代

の經典也。上古には、書なく、文字なく、器を作りて象とす。玉を以つて仁の象とし、鏡を以つて知の象とし、劍を以つて勇の象としたまへり。知仁勇の三ッは、天下の達德なり。親義別序信の五ッは、天下の達道なり。父子の親は、仁也。君臣の義は、勇也。夫婦の別は、知也。之を三綱と云ふ。長幼の序は、禮なり。禮は、義の宜に生ず。信は、知仁勇の實理、天道の至誠也。天道造化の常よりいへば、元亨利貞也。人生五倫の明德よりいへば、仁義禮智信也。理本一理也、氣本一氣なり。しばらく天下の主宰として、達德となりたる所に、知仁勇の條理ある也。人に五體あるが如く、耳目口鼻あるが如し。耳の靈は、仁の如し。目の明は、知の如し。口鼻の通は、勇の如し。合せていへば、人也、分ちていへば司る所の名あるのみ、皆一心の左右也。』(集義外書卷十六) といひ、又『上古には、名なくして德行はる、あつきの至なり。後世に及びて、敎なき事不能。故に其時の聖人、是に名付けて敎とす。唐土の聖人は、是を知仁勇の三德と云ひ、日本の神人は、之を三種の神器に象れり。神は、心也。器は、象なり。神聖寶劍內侍所の象を作りて、心の三德を知らしむる經書とし、玉へり。其外、神代の文字言葉は、絶えて傳らずして、ひとり三種の象のみ殘り留れり。至易至簡にして、道德學術の淵源也。高明廣大、深遠神妙、幽玄悠久、悉く備れり。心法政敎、他に求めずして足り

ぬ名號文字は人の通じ易きものを用ふべし。かるといふとも可也。三種の神器の註脚は、中庸の書に如くはなし。』(仝上)と。亦以つて如何に氏が內外本末の別を明にせむとせしかを見るべし。

(八) 歸結

要之、氏は生有道念を信じ、道德の實義は、已に己が本性に固有せるものとせり。故に道德の實義は、古聖賢より藤樹に傳り、藤樹の實義は自家に傳り、自家の實義は又萬世不易なりと信じたり。然れども其應用の如きは、時處位の如何によりて變化窮りなし。故に古聖賢の言說より、藤樹の所說に至るまで、徒に其跡に拘泥すれば、却りて心性の靈光を戕賊するものなりと說けり。是れ彼ノ西川季格(西川氏、元、清水氏と稱し、藤樹に親炙せし人)が、集義和書顯非を著はして、『狼疾の人』といひ、又『高慢甚しきが故に、我分量を知らざるもの也』ともいひて、酷評せし所以なり。

尙ホ氏は、倫理說以外に、政事說あり、敎育論あり、宗敎論あり、經濟說ありけるが、皆議論時流に超越して、高論卓說見るべきもの尠からず。其政事說には、君は至公にして虛心、人

材を登庸すると施恩とを以て、政の大本とせざるべからずといひ、其敎育論には、敎育をもつて、治國の要具、平天下の基本となし、其敎授法に於いては、人爲の拘束を難じて、自然の發展を計り、大に自然主義を鼓吹し、其宗敎論に於いては、一切の宗敎(佛敎、及び吉利支丹敎等)に對して、寬宏包容し、是れ亦治敎の一具とするに足れりといへり。而して其經濟說に至りては、儒中の豪傑、荻生徂徠の夙に服せし所なりきと云ふ。亦以つて鼎の輕重をしるべし。

第三章　三輪執齋(二三二九—二四〇四)

(一)傳記。——(二)學風。——(三)心の本體及び其知。——(四)意念。——(五)學問及び成志。——(六)格物致知及び誠意。——(七)歸結。

(一) 傳記

巷山以後、王學を信奉せしものには、北島雪山あり、三重松菴あり、三宅石菴あり。石菴に後るゝこと五年にして、三輪執齋生る。翹然として一代の師儒なり。

執齋、名は希賢、字は善藏、執齋又は躬耕廬と號す。寛文九年京都に生る。父を澤村自三と呼び、醫を業とせり。其先は、大和三輪神社の司祝なり。幼にして母を喪ひ、既にして又父を失ひ、是を以つて他家に養はる。既にして長じて眞野氏を冒しぬ。十九歲の時には、崎門の高足、佐藤直方に從ひて、程朱學を修めたり。直方は、闇齋が姓氏說を受けて、嚴に他姓を承くることを非とせり。氏之が爲めに感悟し、本姓三輪氏に復し、深く直方を德とせり。幾何もなくして直方の薦によりて、脫橋侯に仕ふ。然るに氏は、此頃、心、私に藤樹を追慕しけるが、陽明の良知說を得るに及びて、忽ち舊學を捨つるに至れり。是を以つて侯に懌れずなりぬ。乃ち仕を辭し民間に下り、或は京都に、或は大阪に、或は江戸に、居所恒ならず。唯居る所に從ひて徒を會して其說を講述せり。然るに直方の學、程朱を固守して、堅く異學を排斥せり。是を以つて氏の王學に歸するに及びて、直方怒りて近けず。氏、往いて之を愬へむとなれば、又門人の怒に逢ふ。氏之が爲めに幽囚數年に及べりと云ふ。されど其後、氏の學を變せしは、名利の爲めにあらざりし事明になり、爲めに直方の之を見る事、故の如きに至れり。而して氏の之に事ふる事、愈敬を加ふ。直方病革るに及びて、先づ以つて之を氏に告げしむ。氏、即ち往いて之を訪ひけるに、命已に絕えて及ばず。因りて終夜柩前に侍し、和歌八首を賦して之を哭せり。

名に高き、最中の月の、かくれしや、世にたぐひ無き、恨なるらむ。

けふまでと、契りやかけじ、つかへしも、三十じみとせの、秋の夕露。

たづねけむ、千代の古道、あとかへて、ひとりや苔の、下に行くらむ。（餘三首）

氏、四十四歲の時には、傳習錄を標註せり。刻成るに及びて、王陽明に告ぐる文あり。其詞に曰く、

維日本正德二年。歲次壬辰。九月盡日。希賢敢昭告于大明新建侯文成王公曰。道無古今。心無彼我。恭惟先生得心傳於同然。指聖功於良知。德業輝於當世。餘訓流於萬邦。嗚呼盛哉。我京尹篠山源君景仰其德。篤信其學。政務餘暇。使希賢講傳習錄且考定刻行之。希賢固辭不得。叨奉嚴命。發軔於去歲八月。畢功於今月今日。謹考支干月日。悉皆正當先生誕辰。而曆號亦與先生存日同。實和漢萬世未嘗有之一遇矣。其偶然與。將有數存焉與。則斯道之興似有所俟也。謹以清酌茶菓奠傳習錄新刻本。虔告功畢於我文成公。伏冀先生之道。大明乎天下。至治之澤。徧蒙乎生民。

と。如此支干月日、及び歲號の暗合は、大に世人をして奇異を感せしむるに至れり。蓋し

陽明の誕辰は、成化八年壬辰九月三十日にして、傳習錄の翻刻は、正德二年壬辰九月三十日なりき。而して陽明の最も生榮せしは、正德年間にして、此歲號も亦偶然相同じ。是を以つて世人は、緣機、誠に熟すとなし、從ひて學ぶもの鮮からざるに至れりき。

氏は、又深く藤樹を尊信して曰く、『蓋し先生、德高く學正しうして、實に本邦道學の淵源なり。』（藤樹先生全書序）といひ、又『吾江西の中江先師、遺經によりて其緒を接ぎ、致良知の學を本邦百年の後に興起し、訓詁詞章の陋を改めたり。』（拔本塞源論私抄序）といへり。嘗て又藤樹の遺蹤を慕ひ、藤樹書院に至り、士民を集めて學を講せしが、聽くもの皆感泣し、藤樹先生の再生なりといへり。

元文四年、年七十一、壽藏を京都建仁寺中兩足院に立てゝ、和歌二首を自書せり。五年を隔て、延享元年、京師に卒す。年七十六、乃ち壽藏の地に葬れり。

氏著はす所、四言教講義一卷、日用心法一卷、標註傳習錄四卷、周易進講手記六卷、雜著四卷、及び古本大學和解等あり。

（二）學風

氏は、偏狹なる程朱學より一轉して、忽ち陽明學を唱へ、天下の學界に一旗幟を樹立せり。其時を考ふれば則ち聖堂、堀河、崎門、謖園の學、天下に漲り、才俊雲の如く起り、互に門戸を張り、辯難攻擊、殆んど紛糾を極めたり。氏が此間に在りて、其說を張らむとするは、誠に至難の業に屬せり。思ふに藤樹が說の、哲學的神秘的なりしに對して、蕃山の說は、通俗的なり社會的なりき。而して氏は更に一轉して、心理的分析に力を致し、其說の根底を固うせむことを勉めたり。且つ其修養上、藤樹、蕃山が、內界の道念を絕待的に尊重せし結果、聖賢の經傳を以つて、『雪中の兎跡なり。』といひ、又『我が心の註脚なり。』といひ、其說全體が殆んど直覺的獨斷的なりしに對して、氏は常に聖賢の語句を引援し來り、我が內界の良知を發揮せむことを勉めたりしが如し。是れ殆んど他の陽明學者と異り、多くの經驗的傾向あるものと謂ふべし。

如此なりければ、氏が古聖賢に對しても、其尊信亦淺からず。其、陽明を信ずるは勿論なりと雖も、晦菴を見て又敢て斥けむともせず、寧しろ之を幷稱兼尊せるものあり。嘗て人に與へて朱王の學を論せし中に、『王を信ずる事、固より深く、朱を尊ぶことも、亦淺からず。何となれば文公は、古昔の賢、而して文成公も亦古昔の賢。而して尊信せずば、其

誰をか之を尊信せむ。』といひ、又『晦菴、陽明、學に同じうせずして、同じく賢たり。』なといへるを見ても、之を知るべし。

上述の如く、氏は、他の陽明學者と、多少其歩趨を異にし、其學常に心理的分析に傾き、又其道德的修養上、無論主觀的考察に據るといへ、他の一方に於いては、客觀的考察を尊重しければ、其學說を通觀するときは、格律森嚴なる程朱の風あるものゝ如し。

(三)　心の本躰及び良知

氏は、吾人の本心を稱して、『天神の宿在』といひ、或は『天理の凝聚、性の生活、人に受けて知覺運動するもの也。』といひ、更に其躰たるや、『無善無惡』といへり。曰く、『人心、善惡二途ありと雖も、其は動き出づる時の事なり。動くは、氣によるが故也。其動かざる時は、一の明のみ。鏡の未だ開かざる時は、妍媸なきが如し。然るに其寫さゞる時も、萬象なきにあらず。向ふ者は、心、現す。心にて見れば、則ち象あり。鏡は、本の鏡也。寫さぬ心にて見れば、則ち象なくして、鏡の內、象なくむばあらず。是れ鏡に動靜なくして、向ふものゝ心に動靜あり。此鏡、人の人たる本躰也。此源を知らずして、善なりと思ふは、其善は

氣質の善にして、天理の本體にあらず。惡も亦然り。此所謂心の體は、即ち人心に宿りまします天神也。此光明、人の意念にわたらず、自然に是非を照す。是を良知と云ふ。(中略)

心に善惡なきは、心の本體也。夫れ只善惡なし。故によく善惡を辨へて、各あやまることなし。若し有之時は、善惡共に違ふ故に、善惡なきを心の至善とす。故に至善は、心の本體なりともいへり。』(四言教講義)と。かく天神の宿在たる心は、無善無惡なりとなせり。而して無善無惡の至善を、心の本體となせり。其心の無善無惡にして、善惡の素定なく、涵空澄明なるが故に、善惡を識別して謬らず。猶目に五彩の素定なく、耳に五聲の素定なく、口に五味の素定なきが故に、五彩五聲五味を識別して差はざるが如しと考へたりしなり。

吾人の本心は、涵空澄明なり。故によく善惡を識別して謬らず。而して人の生るゝや、先づ親を愛する事をしり、長して兄を敬する事をしる。是れ先天的知覺に屬し、之を稱して良知といへり。曰く、『孝悌は、天地生々の德也。人にうけて仁義となる。其發用は孝悌也。(中略)孟子曰く、孩提の童も、其親を愛することを知らずといふことなし。其長ずるに及びて、其兄を敬することを知らずといふこと無し。親に親むは、仁也。長を敬するは、

義也。無他之を天下に達する也と。是れ則ち書にも學びず、人にも傳へられずして、自然と生れ付きたる者也。人の以つて人たる所なり。是を名づけて良知と云ふ。』(日用心法)

と、又曰く、『夫れ知は、心の光也。善惡を照すこと、白日の黑白を分つが如く也。然れども氣質の偏によりて、樣々のたがひある事を免れず。其樣々のたがひとは、心は一なりといへども、剛柔善惡の下地の氣質によりて、照す所一樣ならざればなり。良知は、本體のまゝにして、人爲にわたらざるもの也。』(四言教講義)と。蓋し氏の考によれば、心の本體は善惡の素定なき涵空澄明の體にして、絶對的善なり、未發の中なり。而して良知とは、其心の本體のまゝに善惡を照し、善を善と知り、惡を惡と知るの知的作用をいふなり。故に其本體をいへば、心といひ、其作用をいへば、良知といへるなり。心と良知とは、二物にあらざるを知るべし。

(四) 意念

前述の如く、氏は、思へらく、心の本體は、無善無惡にして絶對善也、未發の中也と。而して其發現即ち行爲上より之を見れば、善あり惡あり。而して其善あり、惡あるは、意念の發動によりて分るとなせり。氏の考によれば、意念は、或は本體より發動し、或は形氣より發動すと。而して其本體より發動すれば善となり、形氣より發動すれば惡となるといへり。故に曰く、『心一たび本體より動けば、善となり、形氣より動けは、惡となる。動くによりて、善惡は別る也。』(四言教講義)と、又曰く、『人心元來、至善にして無善无惡と雖も、血氣の生々、時として止ること無ければ、必らず動かすといふ事なし。其動く所、千緒萬端、是を物といひて、皆意のある所也。意のある所かく千緒萬端といへども、約る所、善惡の二端にもるゝ事なし。』(全上)と。かくの如く意は、人間血氣の發動する所にして、道德上善惡の由りて別るゝ所なりとせり。思ふに氏が所謂意念とは、視聽言動等の一切の意思作用を指していふものにして、其發動が、良知の直覺と相一致したるものを、本體より動く意念といひ、其發動が、良知の直覺と相一致せずして、所謂人心の要求に出づるものを、形氣より動く意念とはいふなり。而して一を善となし、一を惡となす。氏は善惡は其心に就いていふにあらずして、全く其發動の結果に付する命名なりといへり。是を以つて意念は吾人が進德修行上、最も恐懼戒愼すべき地なりといはざるべからず。於此乎、學問及び成志の說あり。

氏は道德的修養は、之を經驗的工夫、及び反省的工夫の二方面より解說せり。即ち一面には、經驗的修養として、學問及び成志を說き、他の一方に於いては、反省的工夫として格物致知及び誠意を說けり。かくて內外相俟ちて、其德を全うすべしと考へたりき。今は先づ其學問及び成志の修養より之を說くべし。

(五) 學問及び成志

氏は、氏が所謂、學の意義を說いて曰く、『學は、效也、覺也。效は、覺のつとめ、覺は、效のしるし、二ッなし。』(四書教講義序文) と、更に其學の目を立てゝ之を說きて曰く、『其目、三あり。一に曰く、學脉、聖人の天より繼ぎ玉へる道德の心法、即ち仁德なり。是に悖れは異端に陷る。二に曰く、學術、六經四書に說ける所の敎誨、即ち知德也。是に從はざれば其脉を得ることなし。三に曰く、學業、其敎誨に從ひて修する所の實功、即ち勇德也。之を務めざれば其志を成すこと不能。三のもの其實は一也。』(全 〃) と。

說きて曰く、『心は、天理の凝聚、性の生活、人に受けて知覺運動するもの也。志は、其發出し、指し向ふ處につきて心を得るもの也。』(日用心法) といひ、又、孔子が一代の經歷に就いて述べて曰く、『孔子十五の御時、學に志し玉ふ。三十に立つは、志を立つなり。四十不惑は、志の惑はざるなり。五十六十より七十にして、心の欲す所に從ひて、矩を踰えずと宣ふも、此志の矩を踰えざる也。故に志の一字は、初學より聖人に至るまで、學問の全體也。』(同 上) といへり。思ふに志一たび立てば、內は以つて形氣の拘蔽を排し、外は以つて耳目の誘惑を斥け、其道に向つて猛然として進みて止まざるに至るべし。即ち學問によりて鍛ひ上げられたる志なれば、其發動するや、悉く其本體良知と相一致して悖らざるを得べし。是れ所謂成志也。成志とは、惑ひ易く矩を踰え易きの志を修養して、之を成就したるをいふ也。而して其之を成す所以のものは、學なり。故に曰く、學とは效なり覺なりと。蓋し聖人の學脉に據り、聖人の學術を修め、聖人の學業に從ふの結果、此に聖人の道を廓然大覺し、其志の發動をして、惑はず矩を踰えざらしむるの大公至正の境に止むることを得べし。故に成志は、學問の終りなりとしるべし。

(六) 格物致知及び誠意

氏は、道德の反省的工夫を說きて、格物致知及び誠意の說あり。是れ即ち其所謂學問及び成志の說と相俟ちて、內外相應し心行合し、此に圓滿なる崇高なる人格を形成すべし、と考へたりし也。

氏が格物の解は彼、藤樹、蕃山の如く、五事を正すとか、又は五倫の事を正すとかいふ如く、具體的說明をなさずして、只々漠然として、『意の在る所を正す』と解し去れり。意とは、即ち意念の發動にして、其行爲の結果は、善と惡との分るゝ所なり。善人惡人も、只一念の間にあり。曰く『それ學問は、惡人を免れ善人とならむと欲する爲めならずや。善人の至極は、堯舜にも進むべし。惡人の至極は、桀紂にも陷るべし。其界は、一念の間に在り。善人にならむと願はゝ、善をなすべく、惡人を免れむとならば惡を去るべし。惡を去るを不正をたゞすといひ、善を爲すを正しきに復るといふ。不正を去りて正に復る、之を物を格すといふ。是れ聖門最初手を下すの實功にして、聖となるに至るまで、外に待つ事なきもの也。(中略)物とは、事なり。凡そ我意にうつり來る事、一身より天下に至るまで、皆事也。其事の惡は、吾が心の嫌ふ所、是れ本體元來惡なきが故也。故に務めて之を去るべし。其事の善は、善心の好む所、是れ本體元來善なるが故也。故に必らず之を爲すべし。夫れ物を格すといふ事、世間外人は、物を格すにあらず。たゞ我が心の物を格す也。然るに身の上にあらはれたる物にて、是を格す事は、猶未だ要を得たりとせず。故に末は必らず僞に流る。小人閑居して不善をなすといふ、是也。それ身にあらはるゝ善惡は、皆、心より出づれば、先づ一念の起る所如何を察すべし。故に自反して愼獨の功を立つといふ。』(四言教講義)と。思ふに氏が所謂格物の物とは、意念の發動する所の惡事萬端すべてを指して之をいふ。意念發動して始しめて善惡分るゝものなれば、常に內界良知の靈光に照して、自反愼獨の功夫を立て、以つて其動機を愼むべきをいふ。夫れ如此して、意念の全く本體のまゝに出て來りなば、宜しく恥ぢ悔いて當下に之を去るべし。一事此體に反き、形氣のまゝに出て來りなば、之を尊信して當下に之を爲し、もし本の如くば、一事聖地に進み、一刻如此一刻聖地に至るものなりといふべし。

又致知を解しては、知は良知にして、致は力をもていたすなりといへり。氏の說によれば、良知は、普遍的に人々の己に固有せる所なるに、何が故に致良知の工夫の必要なるか。是れ氏は、良知は、時に形氣の拘蔽あるものなりと考へたれば也。曰く、『夫れ知は、心の光也。善惡を照すこと、白日の黑白をわくるが如く也。然れども氣質の偏によりて、樣

樣のたがひ有ることを免れず。其樣々のたがひとは、心は一也と雖も、剛柔善惡の下地の氣質によりて、照す所一樣ならず。』(四言教講義)と。故に平生間斷なく、形氣の拘蔽を開きて、良知の本體を明にすべし。然らば則ち前の所謂格物の工夫によりて意念を正し、良知を明にし、又更に良知の光明によりて、物を格すに至るべし。果して然らば格物致知二端ありと雖も、其目的とする所は一なりといふべし。氏は『格致の工夫、結局は誠意に歸す』といへり。

格物致知は、歸する所誠意の工夫なり。曰く、『事物なりとして格すは、何を格す事ぞ。良知なりとして致すは、如何なる知を致す事ぞ。此處をよく〳〵省るべし。天下の事々物々の理の外に窮めたりとも、我が心のおこる所誠ならずば、窮め得て却りて害あるべし。天下の事々物々、悉く知り得たりとも、吾が心を知らずば、亦害あるべし。然れば格といふも、我が意の在る所の物をたゞす事、致すといふも、吾が意に於いて致す事也。』(同上)といひ、又曰く、『凡そ天下の理は、心に備はりて、意に動き、良知にて知り、其物を格す故に、致知格物は誠意の工夫也。格物のはじめに、先つ志を立てゝ之をたゞすべし。夫れ誠意の工夫は、仁也。致知の工夫は、知也。格物の工夫は、勇也。此三の工夫によりて三德成就し、本心の正しきに復る。其之を行ふ所以のものは、一の志也。志は心のさし之く所、人の誠也。其初め志を立つる事誠ならずんは、事々よく其終を遂る事を得むや。』(同上)と。其意を正して誠ならしめば、其行爲となりて發漏する所、皆本心の自然にして、更に拘蔽なく、障碍なく、虛僞なく、知行は全然相合一するに至るべしと考へたりしなり。

思ふに氏は、一方に於いては、學問及び成志の修養を說き、又他の一方に於いては、格物致知及び誠意の工夫を說けりがゆゑに、經驗的なる學問と、反省的なる格致と相俟ちて、一は以つて志を成し、一は以つて意を誠にす。於此本體の良知(知行を兼ぬ。)は、一點拘蔽の患を受けず、所謂『血肉軀殼の欲に流れずして、本性の自然より悠然として發出し、動くに天を以つてするもの也。』(日用心性)といへるが如き境に至るべしと信じたりしなり。是れ即ち道德の目的にして、人生の極致なりと謂ふべし。

(七) 歸結

氏は、寬厚篤實の人にして、其德は以て人を薰化するに足れり。嘗て近江小川邑に抵り土民を集めて學を講じたりし時には、四座皆感泣して之に服し、翕然として相謂ひて

藤樹先生の再來と爲せりと云ふ。又其親死せし時幼弱にして喪に服せしざりしを悔い、三十餘年にして後、服喪をなせりと云ふ。此等は實に以つて氏が資性の一斑を知るべし。其學風も亦著實にして毫も輕薄浮靡の態なし。或は心理的に之を分析して其歸趣を示し、或は經驗的に先聖の成說を引きて其宗旨を明にし、其說く所の言々語々、常に修身の要道を離れず、其學問は、其行爲と相表裏して、一段の光彩あるを見るべし。

第四章　佐藤一齋（二四三二——二五一九）

（一）傳記、——（二）學風、——（三）理氣說、——（四）萬物一體古今一體、——（五）宿命說、——（六）死生說、——（七）人の身心、——（八）人生の極致、——（九）歸結、

（一）傳記

承平日久しくして、爲めに儒學の研究も愈〻遂に愈〻密に赴くと同時に、學派の讐視反目益〻甚しく、攻擊擠排至らざるなく、天下の道德は、殆んど歸向する所を失ふに至れり。於此乎寬政異學の禁は布かれ、政權を以つて官學たる程朱學を保護し、他の一方に於いては、天下の異學者に對して、大に迫害を加へむとす。是を以つて學者惴々焉として安

んせず、時に面從背反の徒も出づるに至れり。佐藤一齋の如きも、陽朱陰王の徒と稱せらる。而も其遺書に就いて、其所說を窺へば、深遠幽眇、一種の神秘的思想の髣髴たるを認むる也。氏は、業に已に王學の三昧に入れり。

一齋、名は坦、字は大道、通稱を捨藏といひ、一齋は其號なり。又別に愛日樓、老吾軒などの號ありき。其曾祖、義廣、號は周軒、儒を以つて岩村侯に仕へ、遂に家老となれり。祖、名は信全、父、名は信由、號は文永と云。相繼きて國政を執るに至れり。二男二女を生む。長は早く死し、次は則ち氏なり。安永九年江戸の藩邸に生る。此より前、信由、小菅氏の子、治助といふものを養ひて嗣となし、長女をもて之に配しけるか、一齋の生るに及びて、治助又一齋を養ひて義子となせり。

氏、幼にして讀書を好み、又臨池の技を善くし、射騎刀槍、學はざる所なし。十二三歲の比には、殆んど成人の如く、成童に至りては、嶄然として頭角をあらはせり。乃ち自ら天下第一等の事をもて、其名を成さむと欲し、專心、聖賢の學に從事するに至れり。十九歲、岩村藩の士籍に上り、近侍の列に入れり。時に公子、衡（後には、林氏を紹ぎて、述齋と號せり。）勤學、餘念なし。而して年齒も、殆んど氏と相匹せり。乃ち相共に交を訂し、相會して講習討論、概ね虛日な

し。又井上四明（名は潛。）應見星皐（名は允。）の門に出入して、其講論を聽けり。既にして去りて浪華に遊び、間大業の家に寓し、大業の介によりて中井竹山に從遊せり。日夜切劘經義を討究しけるが、竹山大に其切問を喜べり。既にして去りて京都に至り、皆川淇園に謁して道を問ふ。幾何もなくして江戸に歸らむとして、竹山に謁す。竹山乃ち一行の大字を書して與ふ。其語に曰く、『困而後寢、仆而復興。』と、一齋、其出處を問ふ。答へて曰く、『下句は王文成の語、上句は今紙に臨みて之を加ふるのみ。』と。氏か陽明學に向ふ、是れ蓋し其一因をなすにあらずや。氏は、歸りて林信敬の門に入れり。信敬卒して述齋、林家を繼承するに及び、改めて師弟の誼を正し、日夜同學すること又昔日の如し。相助けて學政の皇張を謀れり。既にして名聲漸く揚り、門人日に進む。大小侯伯、延きて教を請ふもの甚だ多し。其後、林氏の塾長となり、學生を督し、夜を以つて日に繼ぎ、耳提面命、講論倦むことなし。教を受けて家をなすもの、數十人の多きに及べり。

其後、岩村侯の爲めに擢でられて老臣となり、以つて國事を議せり。此時に當り、名聲愈高く、苟も文を學び道に志するものは、贄を其門に執らざるはなし。齡古稀に及びて、全く塵事を謝して、餘年を養はむと欲し、爲めに靜修所、東暖樓を築き、庭に蕉桂を植ゑ、以つて隱棲の處とせり。然るに此時、幕府庶政を一新し、賢材を求むる事急也。即ち氏を擢んで、儒員となし、俸二百苞を賜ふ。氏、殊遇に感激し、復ゞ起つに至れり。時に年七十。黽勉事に從ひ、後進を誘掖し、敢て頑老を以つて之を人に委せず。安政六年、八十八歳昌平坂の官舍に歿せり。

氏、天資高邁、精力人に絶し、少より耋に至るまで、一意精研し、祁寒暑雨と雖も、未だ嘗て懈怠せず。自ら思へらく、『熱誠身を盡すは、是天職なり。』と。其身を持する嚴毅方正、人に接するに平恕、人過失あれば、之を訓誡するに、先づ其容貌を肅にし辭氣を正しくして、之に臨み、誠實を開きて其人の腹中におく。是を以つて聽くもの、慚然として深く自ら耻ぢ、其過を改めざるなしといふ。

其家を治むるや、財利出入、飲食衣服、井然として法あり。家をあげて三十口、同竈共食、雜然として群居すと雖も、庭に間言なし。又義に厚くして、恩を親戚に施し、同姓及び姻族の貧困家を亡ぼすに至るものには、家資を傾けて之を賑く。義、苟くも施すべきものあれば、百千金を惜まず。之が爲めに血食絶えざりしもの、數家ありきといふ。氏は、又、喪祭の事を厚くせざるべからざるを說きて、哀敬編三卷を著はせり。當時、儒家、多くは僧家

と相惡し。然るに氏が家は、本、世々僧寺に葬りしが、之を改葬することを欲せず。嘗て曰く、『吾家の葬祭は、曾祖以來儒式を用ふ。但、遺體は、之を僧寺に托せしは、國法に從へる也。已に之を托すれば、敬禮せざるを得ず。彼の多くは僧寺を疎んずるは、即ち祖先を疎んずる也。不敬も亦甚し。』と、故に其身、儒員に擢でらると雖も、別に葬地を乞はざりき。其人となりの篤實、亦以つて想ふべし。

氏は、常に最も周易を喜び、之に關して周易欄外書、啓蒙欄外書圖考、等を著はしたりき。又、氏は壯歲言志錄一卷を著はして其說を發表し、六十を越えて、同後錄一卷を、七十にして同晩錄一卷を、八十にして同耋錄一卷を著したり。合せて之を言志四錄といふ。又、中庸、論語、孟子、を始めとし、近思錄、傳習錄、等の欄外書を作れり。

(二)　學風

天下、氏を目して面從背反の徒となし、氏の學を稱して、陽朱陰王の說といへり。然り、氏は林家の輔翼となり、又幕府の儒官たりし故に、其自然の勢として官學を措きて異學を唱ふべからざりし也。故に氏は、陽明學の蘊奧を究めたりと雖も、公然之を唱ふは忍

ぶべからざりし所なるべし。曰く、『姚江之書、元より讀み候へども、只、自己の箴砭に致し候のみにて、都ての教授は、並の宋說計りにて候。殊に林氏家學も有之候へば、其碍にも相成、人の疑惑も生じ候事故、餘り別說を唱へ不申事に候。』(復大鹽中齋書)といへるを見ても知らるべし。

然るに氏は、自ら其研究的立脚地を說破して、朱王併取にありといへり。自ら其理由を說きて曰く、『惺窩藤公、林羅山に答へし書に曰く、陸文安、天資高明、措辭渾浩、自然の妙亦掩ふ可からずと、又曰く、紫陽は篤實にして邃密、金谿は高明にして易簡、人は其異を見て其同を見ず。一旦貫通、同か異か、必らず自ら知りて後止むと。余いふ、我邦、主として濂洛の學を唱へたるは藤公にして、已に朱陸を併取せること如此。羅山も亦其門より出づ。余が曾祖周軒、學を後藤松軒より受く。而して松軒の學も亦、藤公より出づ。余が藤公を欽慕するは、淵源自る所は則ち有り。』(言志晩錄)といひ、又曰く、『朱陸同じく伊洛を宗として、見解稍異る。二子並に賢儒と稱す。蜀蒯の洛と、各、黨を爲すが如きにあらざる也。』(仝上)と。氏は、かくの如く惺窩等の朱陸併取せしを知れり。朱陸併取といひ得べくんば、則ち朱王併取ともいひ得べからむ。是れ則ち氏が朱王を併取せるに至れる所

以なりとす。而も氏は、公然陽明學を唱ふる事を憚れり。

されども氏が一代の學風を通觀するに、寧しろ陽明學は其眞髓となれり。又氏が養成せし濟々たる幾多の才俊を見よ。象山といひ、秋陽といひ、方谷といひ、慥齋といひ、悔齋といひ、草菴といひ、得所といひ、訥菴といひ、存操齋といひ、越雲といひ、良齋といひ、皆純乎たる王學者にして、洵に幕末の一偉觀に屬せり。此等を以つて之を觀れば、氏が平生數學上、精神の存せし所を察するに足れり。而して氏が深遠幽眇なる學理は、時に或は朱王以外に遠く奔馳せるものあるを覺ゆる也。

氏は、宇宙の主宰を直覺し信仰し、其修身倫理の說、一に此理より流出し來り、其思想は超然として相對界の羈絆を脫却して、絕對界に一路の光明を翹望し、遂には一轉して人世の無常を嘆じ、寂滅爲樂を說ける宗教的厭世的人世觀を漏せり。然るに更に又再轉して、吾人は宇宙の主宰によりて陶鑄せられたる天物なれば、當に宇宙の主宰に向つて盡さゞるべからざる重大の天職ある可きを自覺し、以つて天倫の忽にすべからざるを說き出すに至れり。是れ即ち氏が倫理說の因りて起る所なり。

氏が學說の根底は、其理氣の說にあるものゝ如し。氏が所謂理とは、宇宙の主宰の義にして、氣とは、流行の意なり。前者は本體にして、後者は現象なり。而して氏が理氣說たる、本體と現象との關係あるものなれば、密接不離にして、一物を內外の兩面より觀察したるに外ならずと考へたり。此一物二面觀は、即ち理氣を合一したる說なりと見るべし。而して氏は、自ら此間の消息を說明して曰く、『主宰よりすれば、之を理といひ、流行よりしては、之を氣といふ。主宰なくんば流行すること能はず。流行ありて然る後、其主宰を見る。二にあらざる也。學者は、輒ち分別に過ぎ、支離の病を免れず。』(言志晚錄)といひ、又『理は、本、無形也。無形なれば、即ち無名なり。形而後、名あり。既に名あれば、則ち理之を氣といひて不可なし。故に專ら本體を指せば、則ち形後も亦之を理といひ、專ら運用を指せば、則ち形前も亦之を氣といひて、並に不可なし。浩然の氣の如きは、專ら運用を指せり。其實、太極の呼吸、只是れ一誠、之を氣源といふ、即ち是れ理。』(言志晚錄)と。

以上は、氏が理氣說の大體なり。由是觀之、氏は宇宙萬有の實相は流行即ち活動して息

まざるものとせしが、是全く本體界なる主宰者の支配によるものなりとせり。其支配たる、實に絶對的にして、宇宙萬有は、一として其支配以外に存在すべからずして、宇宙萬有の生成、消長盛衰、榮枯死滅より、其流行活動に至るまで、一切主宰者の命令のまゝなりと考へたりしなり。而して氏は、其主宰よりして之を理といひ、其流行より見て之を氣といへるなり。理は本體にして、氣は現象なり。

かくて氏は、此理即ち主宰を見るに、只冷然として哲學的に觀して止むこと能はず。此理に對して非常に恐怖を持し、之を信仰し、之を敬虔し、之を宗教的に聖智萬能なる神なりと觀ずるに至れり。而して人も萬有中の一體なれば、生より死に至るまで、縱然として此理の支配の下に立たざるべからざるものとなし、人には自由意思を有するなどの事は、寸毫も之を信せざりし也。故に氏は此理の字に代ふるに天の字を以つてし、一切の事物に天の字を冠らせて、天の命令の絶對的なるを說けり。其天物といひ、天役といひ、天命といひ、天谷といひ、天子といひ、天職といひ、天祿、天定、天算、天分などいへる、皆其意に出でたりし也。蓋し此の天理てふ觀念は、氏が說の全般を一貫せる根本信念にして、此天理は絶對唯一、普遍恒久の體なりと信じたりしなり。

氏は、此天理の說を人生の上に引きあてたるが、即ち氏の倫理說なり。氏が倫理說は、天理の直覺に始り、信仰に半し、敬虔畏怖に終れる、一種神秘的宗教的倫理說なりといふべし。

(四)　萬物一躰古今一躰

氏は理氣說を基礎として、萬物一體、古今一體の說をなせり。何を以つて然いふ。氏は思へらく、萬物は固より萬殊にて、其差別あることは明なりと雖も、其本に遡れば絶對唯一なる天理が、普遍的に陶鑄せるものなれば、一本萬殊なりといふべし。故に今假に本體界より下瞰し來れば、萬物は是れ一體なりといふ可し。其萬物を萬殊なりと見るは、差別界より見たる名に過ぎざるなり。又古今は固より萬變にして、今日の已に昨日にあらざるは明なれども、其本を推せば、時間も亦絶對唯一なる天理が恒久的に發現せるものなれば、差別界を離れて本體界より達觀すれば、古今は是れ一體なりといふべしと。氏は先づ萬物一體の理を述べて曰く、『程子萬物一體をいふ、試に思へ、天地間、飛潛動植物、有知無知、皆陰陽陶冶中より出て來るを、我、其一なり、易を讀みて理を窮め、深

く造りて之を自得すれば、眞に萬物の一體たるを知る。』(言志晩錄)と。又古今一體の理を述べて曰く、『我が身一なるに、老少あり。老少の一身たるを知らば、則ち古往今來の一體たるをしる。萬物一體身たるを知る。九族の我が身たるを知らば、則ち九族の我が身たるを知る。』(同上)と

は、是れ橫說、古今一體は是れ竪說。須らくよく形骸を忘れて、之を自得すべし。』(同上)といへり。是れ即ち萬物萬殊、古今變化の差別界を超越し、よく形骸を忘れて、直に本體界に入り、更に本體界より向下的に觀察して、萬物の萬殊と古今の變化とを一抹し、直に之を一天理の發現作用に外ならずとなし、萬物一體、古今一體の說あるに至れり。是れ亦一天理をもて、宇宙萬有の主宰者となし、造物者となせる、氏が信仰より來る自然の推論なりといふべし。

(五) 宿命說

前に氏が理氣說に於いて說きしが如く、理は本體にして氣は現象なり。現象は、すべて本體界の支配により、萬變萬化して息まず。現象は、全然本體の支配以外に獨立するの餘地を存せず。故に現象界の一切の原因は、すべて之を本體の算等によれるものとせ

り。人も現象界の一物、又其支配の數に漏れざる也。故に吾人は一も意思の自由を有せず、全く本體の必然的命令に服從せざるべからずと考へたり。

如此氏は、意思の必然を說き、吾人一切の運命は、一に天の定數に依らざるべからずとふ宿命說を信じ、悲哀なる人生觀を漏すに至れり。曰く、『凡そ天地間の事、古往今來、陰陽晝夜、日月の代明、四時の錯行、其數皆前定す。人の富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合に至りても、一定の數にあらざるはなし。殊に未だ之を前知せざるのみ、譬へば傀儡の戲、機關已に具りて、觀者は知らざるが如し。世人は如此を悟らずして、以つて己が知力の恃むに足るとなし、終身役々、東索西求、遂に悴勞して以つて斃る。斯亦惑の甚しきもの也。』(言志錄)と。かくの如く天來の運命は、絕對的のものにして、縱令祈禱禳災の力を盡すも、遂に之を左右すること能はず。彼の富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合、すべて數あり、趨避すべからず。故に吾人は、絕對的に天命のまゝに服從し、其正を順受せざるべからずといへり。而して此刹那、忽ち人生の天職論は唱道せられたり。

(六) 死生觀

前述の如く、氏は宿命説を信じて、人生一切の事は、皆天の定數によると説きしが、今、人生の一大事たる死生の問題の如きも、亦自然の推論として、天來の運命によるといはざるべからず。果然氏は、身は天物なれば、天のなすがまゝに服從し、其命を順受せざるべからずといへり。

然るに氏は忽ち一轉して、本體界より向下的に觀察して、差別的なる生死を一抹し去らむとせり。氏は思へらく、差別界より見れば、生あり、死あり。されども若し本體界より見れば、何等の變化あるなし。且つ人の此世に生るゝや、其性は理より受く。故に人は其身死すと雖も、其性は天理として恒在すべしと。此の如くして氏は、性を以つて眞我と稱し、身を以つて假我と考へ、超然として生死を度外視して説き出すに至れり。曰く、『生物は、皆、死を畏る。人は其靈なれば、當に死を畏るゝ中より、死を畏れざる理を練り出すべし。吾は思ふ、我身は天物なれば、死生の權は天に在りて、當に之を順受すべしと。我の生るゝや、自然にして生れて、生時未だ嘗て喜を知らず。則ち我の死するや、應に亦自然にして死し、死時未だ嘗て悲しみを知らざるべし。天之を生じ、天之を死せしむるなれば、一に天に聽かむのみ。吾何をか畏れむや。吾が性は則ち天にして、軀殼は則ち天を藏するの室なり。精氣の物たるや、天此室に寓し、遊魂の變たるや、天此室を離るゝ也。死の後は即ち生の前、生の前は即ち死の後。而して吾が性の性たる所以は、死生の外に恒在す。吾何をか畏れむ。夫れ晝夜は一理、幽明は一理、原始反終、死生の説をしる。何ぞ夫れ易簡にして明白なるや。吾人當に此理を以つて自省すべし。』（言志錄）といひ、又『海水を器に斟み、器水を海に飜ほすが如く、死生は直に眼前に在り。』（言志晚錄）といへり。如此氏は、性を以つて眞我となし、身を以つて假我となし、其生といひ死といふは、假我の上に於ける一變化にして、眞我たる性は、假我の死生以外に恒在せるものなりと考へ、更に、『聖人は死に安んじ、賢人は死を分とす。』（言志錄）と道破するに至れり。

（七）人の身心

氏は、人の身心は理氣結聚より成れりしものと考へければ、氏は『人は小天地なり。』ともいへり。如此人は天地の精氣を受け、其身心は即ち天地を代表するものなれば、人は天地の間に介在して、眇たる軀幹をもて、尚能く天地を裁成輔相して、其の極は天地と參りて一たり得と想像したりしなり。然らば何を以つて、人は小天地なりといふか、

氏の曰く、『目を擧ぐれば、百物皆來處あり。軀殼の父母より出づるも亦來處なり。心に至りては來處何處にあるか。余曰く、軀殼はこれ地氣の精英、父母によりて之を聚む。心は則ち天にして、軀殼成りて天寓す。天寓して知覺生し、天離れて知覺泯ふ。心の來處は、太虛是のみ。』(言志錄) といひ、軀殼は地氣の結聚にして、本心は天理の分布せるものとなし、かく人は天理地氣の結合になれるものなれば、是小天地なりといへる所以なり。而して其小天地なるが故に、吾人は天地に對して天職を有し、又天職を果し得る能力を固有して、裁成輔相の功を立つる事を得るもの也と信じたり。

氏は、更に道德上に說き及ぼして、人の精神的狀態を說明したり。氏は、人の精神的狀態を分ちて、(一)本心、(二)人心、(三)氣質の三とせり。本心とは、先天固有の心にして、天理の宿在なり。人心とは、耳目鼻口の聰明臭味に於ける感應、或は四肢九竅の情欲是なり。更に氣質とは、土氣習氣によりて成れる習慣性なり。而して本心は道德的本體にして、一身の主宰なり。人心と氣質とは、本心の障碍にして、一身の主宰たること不能と考へたり。今、少しく詳に之を述べむ。

(一)本心　氏は、本心を稱して、一に道心ともいへり其先天本體の心といふより、之を

本心といひ、其道德的本體なりといふより、之を道心といへるにて、其實は一なり。氏は其所謂本心を說明して曰く、『人は當に自ら我が軀の主宰あるを認むべし。主宰は何物となし、物何處にあるや。中に主として一を守り、能く流行し、能く變化し、宇內を以つて體となし、鬼神を以つて迹となし、靈々明々至微にして顯る、呼びて道心となす。』(言志後錄) と、又曰く、『深夜、闇室に獨坐するに、群動皆息み、形影俱に泯ふ。是に於いて反觀するに、但覺ゆ、方寸の中、烱然として自ら照すものありて、恰も一點の燈火の闇室を照破するが如きを。認め得たり、此は正に是れ我が神光靈照の本體、性命即ち此物、道德即ち此物、中和位するに至りて、亦只これ此物の光輝宇宙に充塞する處。』(言志錄) といへり。

(二)人心　氏は、道心以外に人心の存在せることを認めたり。其道心とは、先天稟受の本心なるが、人心に至りては則ち然らず、吾人の形體あり五官の感應ありて後、始めて成れるものなりと考へたり。故に之を後天的形後の心といふべし。其中より之をいへば、耳目鼻口の聰明臭味の感應、其外よりいへば、耳の淫聲に於ける、目の美色に於ける、鼻の芳馨に於ける、口の甘美に於ける、四肢の安逸に於けるが如き是なり。曰く、『人は當

に自ら我の體ある事を認むべし。軀何物となす。耳に天性の聰あり、目に天性の明あり、鼻口に天性の臭味あり、手足に天性の運動あり。此物や、各〻一に專也。而して自ら主たる事能はずして、則ち物と感應するのみ。而して物の外より至る、或は耳目に塗り、鼻口に膠し、其牽引する所となりて、以つて其天性を拗するあり。故に人の善を爲す、固是れ自然の天性、而して惡をなすは、亦是れ拗後の天性。其體軀に涉りて是の如きの危を以つて、呼びて人心と做す。』(全上)と。如此氏が所謂人心は、是れ拗後の天性にして、道心の第一障碍をなすものなりと考へたり。之を又、私情私欲なりともいへり。

(三)氣質。　氏は、道心と人心との以外に、又別に氣質の性ある者と考へたり。然らば其性如何にして生成せるか。氏は曰く、『人の氣質は、土氣習氣を混合せる故、須らく識別すべし。土氣とは、其地氣によりて結聚せるもの、竟に是れ主氣也。習氣とは、其習俗によりて誘染せるもの、原是れ客氣也。客は追ふべく、主は追ふべからず。故に變化しやすきものは習氣、變化しやすからざるものは土氣。土氣は、只之を順導して、其過不及を去らむのみ。』(言志後錄)と。思ふに氏が所謂氣質の性とは、外界の狀態によりて、吾人の內心に一種の氣風を成すものをいふ。其土氣とは、地勢氣候の感應によりて、或は快濶の性となり、或は陰鬱の性となれる類にして、其習氣といへるは、風俗習慣の感化によりて、或は溫良の人となり、或は粗暴の人となれる類をいふ。而して其土氣習氣によりて善良なる氣質を養ひ得たらむには則ち已む。其然らざる以上は、又之を道心の第二の障碍をなすものなりと考へたり。

要之、氏は人は地氣の精英を受けて軀殼をなし、天理の宿在によりて本心をなすものと考へたり。而して、其本心を稱して一に道心といひ、道德的本體となせり。其軀殼ありては、人心及び氣質の性(善良なる氣質は、道德を助長す。)ありて、共に是れ道德的障碍をなすものなりとなせり。故に眞我を成して假我を去れといひ、其修養を說けり。

理(主宰)……氣(流行)＝人
- 軀殼
  - 五官四肢之感應及情欲(人心)
  - 土氣習氣(氣質之性(善良なる氣質のものは道德的行爲を助長す))
  - (道德的障碍)
- 本心(道德的本體)

氏は、本心及び軀殼を稱して、一に眞我及び假我といへり。氏は思へらく、本心は、天理の宿在にして、性命道德の本源、形骸の盛衰死生以外に於いて、縱然として萬古不滅の體なり。反之軀殼は、盛衰死生極りなくして、時に或は道德の障碍をなすの一時的の體な

りといへり。故に前者を稱して眞我といひ、後者を稱して假我といへり。本心は、已に之を眞我といふ。我の我たる所以のものは、是のみ。故に人は假我の盛衰死生を度外にして、眞我の本體に復歸せざるべかざるを絶叫せり。

氏は、眞我及び假我を說きて言へるあり。曰く『假己を去りて、眞己をなし、客我を逐ひて、主我を存せよ。』(言志後錄)といひ、又『夢中の我も、我也。醒後の我も我也。其夢我たると醒我たるとを知るものは、心の靈也。靈は即ち眞我也。眞我は自ら知り、醒睡に間なく、常靈常覺、萬古に亙りて死せざるものなり。』(言志晚錄)といひ、又『吾生るゝの前、此心何處に放在し、吾歿するの後、此心何處に歸宿するや。果して生歿あるか、無きか、若想此に到れば、凜々として自ら惕る。吾心は即ち天なり。』(言志錄)といひ、本心をもて眞我とし、天理と同體にして、軀殼の死生以外に恒在して、萬劫不易の生活を營むべきものと信じたり。故に其軀殼の死生存亡を見るに、一も心に介せず、冷然として泡沫器水に比し、殆んど關知せざるもの、如し。斷言して曰く。『我の我たる所以のものは、蓋し死生の外に恒在す。』(再出)と。

(八)　人生の極致

前に述べ來りしが如く、氏は宿命を說き、死生に冷淡に、意志の必然を唱へ、人生の無力を嘆し、殆んど無爲活澹、寂滅爲樂の悲哀なる人生觀に終らむとせり。此刹那、忽ち吾が身の天物にして、天職あることを自覺し來り、遂に眞我假我を說き出して、眞我の滿足を計らざるべからずといへり。而して眞我は、これ道德的本體なり。

氏は曰く、『人は須らく自ら省察すべし。天何か故に、我が身を生出せしか。我をして果して何の用に供せしむるか。我既に天物、必ず天役あり、天役供せずば、天咎必ず至らむ。省察此に至れば、則ち我身の苟生すべからざるを知る。』(言志錄)といひ、又『自彊不息は天道にして、君子の以つてする所也。』(言志後錄)といへり。かく氏は、人は皆天物、必らず天役あり天役を奉し天職を盡さゝれば天咎必ず至るものと信じたり。於此乎、『性分の本然を盡し、職分の當然を務む、如此のみ。』(言志錄)と、又『此學、吾人一生の負擔、當に斃れて後止むべし。』(言志後錄)といひ、人は自彊不息、修養の工夫を盡して、人心の私を去り、氣質の偏を除きて、本心眞我の本體に歸り、縱然として恒久無限の生活を營む

べきことを希待せり。是れ實に吾人が天職にて、抑も亦性分の本然職分の當然、吾人が一生の負擔に屬せり。

かくて吾人は、假己を去りて眞我を成すの極、眞我は天理と一致し、吾人が一擧手一投足皆悉く天の法則に合し、天地と並び立ちて裁成輔相すと考へたり。『我兩間に立ちて、仰觀俯察、裁成して之を輔相す。』(官志畫錄)と思ふに氏が信念は、此に至りて忽ち相對界を超越して、直に絶對界に進入し、相對界に於ける一身上の事實をすべて一抹し去れり。其順逆といひ、苦樂といひ、長短といひ、貧富といひ、幸不幸といひ、毀譽といふ類若し一度歩を轉じて、絶對界より之を見れば、常是なく常非なし。故に夫の相對界を超越して、本心眞我の絶對界に到達せば、順逆もなく、苦樂もなく、長短もなく、貧富もなく、幸不幸もなく、毀譽もなし。心は天道と一致して、裁成輔相の功を全うし、一生の負擔を遂げ得て、此中唯惺々たる絶對至樂の心あるのみと考へたり。曰く、『樂は是れ心の本體、惟聖人之を全くす。何を以つて之を見るや。其色にあらはれ、四體に動くもの、自然によく中々如たり、天々如たり。』(全上)と。かく氏は、相對界を離れて、直に絶對界に進入し、是を以つて大悟徹底となし、人生の極致となせり。此に於いてか、人は人としての性分の本然、職分の當然を果し得て、天物が天理に對せる一切の責務を免れたるものにして、大愉悅、大快樂の膽底より湧出するに至らむと信じたりしなり。

(九) 歸結

氏が學說を通觀するに、深遠幽眇、常人の眼を以つてすれば、遂に端倪すべからざるものあり。氏は深く自ら信仰し、優游饜飫の態、實に學問の三昧に入れり。然れとも其人となり和平にして氣節乏しく、其說を二三にし、社會の批難を招き、陽朱陰王の徒と嘗笑せらるゝに至れり。其大鹽中齋に送れる返信に、『拙も姚學を好み候樣被仰越候處、何も實得の事無之、赧羞に不堪候。姚江の書、元より讀み候へ共、只自己の箴砭に致し候のみにて、都而の敎授は、並の宋說計にて候。殊に林氏家學も有之候へば、其碍も相成、人の疑惑をも生し候事故、餘り別說も唱へ不申候事に候。』といふに至りては、其老猾寧ろ人をして厭はしむるものあり。されど門下濟々として多士輩出し、維新の鴻業をたすけたり。敎育の功勞、沒すべからざるものあり。

第五章　大鹽中齋（二四五四—二四九七）

（一）傳記、——（二）學風、——（三）太虛、——（四）致良知及び氣質の變化、——（五）主靜愼獨及び克己復禮、——（六）禍福、生死、——（七）餘結、

（一）傳記

大阪騷動の擧、何ぞ夫れ暴にして慘なるや。富豪の家宅八千餘戶、瞬息の間に焦土と化し去れり。父老今に至るまで、猶ほ其慘悽を傳ふ。而して其誰か之を釀したりしものぞ。大鹽中齋其人なり。氏は、何ぞ其れ狂暴の人なるや。而も其人の學說主義と其性格とを考察し、又兼ねて當時の大勢を詳にする事を得ば、聊か以つて氏が精神のある所を知ることを得む。

中齋、名は後素、又は正高といひ、字を子起、號を中齋と稱し、又洗心洞といへり。平八郎は、其通稱なり。阿波德島の人、眞鍋次郎の次男なり。寬政六年生る。幼にして母を喪ひしかば、大阪の人鹽田氏に育せられしが、又轉して與力大鹽氏の養子となれり。時に年七歲此年養父母共に歿せり。故に祖父に養はれ、早くより祖父の職を承けしといふ。氏は大

逆罪に問はれし人なりければ、氏に關する記錄、後世に傳ふるものなし。然れども氏は幼少の時より、幾度か人倫の變にあひしかば、あらゆる世の辛酸を嘗め、其間又自ら猖介傲岸、發屈弘毅なる性格を養ひ來りしや、疑なし。而して其學問上の經歷如何。氏は幼より各所に轉徙し、其齡未だ二十歲ならずして、業に已に刀筆の吏となり、事務に鞅掌し、簿書堆裡に其身を委するに至れりしかば、習學の餘暇を有せざりしなるべし。然るに氏自ら、『祭酒公も亦僕を愛する人也。』といふを見れば、其少年の際、或は江戶に下りて、林述齋の門に入りしか、遂に其詳を知るに由なし。訓詁煩鎖の學は、固より氏が心に適せず。一朝、寧陵呻吟語を讀み、玩索自ら得る所あり。更に右本大學及び傳習錄を讀むに及び、心、一向に陽明學に傾きぬ。終に自ら藤樹、蕃山、執齋の後を承けて、陽明學を主張するに至れり。氏自ら此間の消息を語りて曰く、『夫れ儒の授くる所、訓詁にあらざれば必ず詞章なり。僕、暇を偷みて之を慣習せし故に、其寡曰に陷るを覺えずして自ら之に化せり。是れを以つて聞見辭辯、非を掩ひ言を飾るの具、既に心に在りて、侈然として忌憚なく、病、却りて前日より深きに似たり。顧るに其志と徑庭す、悔無からむや。於是退きて獨學し、困苦辛酸、殆んど名狀すべからず。天祐に因りて、舶來せる寧陵呻吟語を

購ふ事を得たり。此亦呂子病中の語なり。熟讀玩味するに、道は其れ此にあらずや。恍然として覺むるあるが如し。所謂長鍼、遠痞を去るに庶乎からむか。而して未だ全く正心の人たる事能はずと雖も、然れども自ら幸に赭衣一間の罪を脱せり。自是又寧陵の淵源する所を究めて、乃ち其又姚江より來るをしる。而して我邦藤樹、蕃山の二子及び三輪氏の後、關以西、良知の學既に絶えたり。故に一人の之を講ずるものなし。僕、竊に復三輪氏飜刻せる所の古本大學及び傳習錄坊本を蕪廢の中より出し、更に稍功を心性に用ふることを知り、且以つて人を喩せり。於是夫襲取外求の志、又既に一變せり。而して僕が志は、遂に誠意を以つて的となし、致良知を以つて工となすに在り。爾來前を瞻後を顧みず、直前勇往、只力を現在の吏務に盡すに在るのみ。以是君恩に報じ、祖先に報じ、而して古聖賢の教に報せば、敢て人に讓らざらむ。』(寄佐藤一齋書) といへり。

氏は、已に陽明學中の人となれり。愈學問を實務に應用せむとして起り、風岸孤峭、高く自ら持せり。其獄を斷ずるや、私心を挾まず。訟を聞くに、公明にして一も隱す所なく、明鏡を以つて肝膽を照すが如し。時に大阪奉行高井山城守實德の値遇を受くるに及び、大に其驥足を伸すことを得たり。氏は毅然として當時吏人の情弊を矯め、邪を折き正

をあらはし、奸を懲らし善を助け、大に刷新の實を擧ぐる事を得たり。蓋し氏は、誠意正心、以つて事に當り、行はすべて心と一致し、吏務はすべて學問と離れず。唯直前勇往するのみ。是を以つて處斷流るゝが如く、治績大に擧れり。名聲隱然、天下を動かせり。

喬木の枝は風多くして、果の美なるものは鳥先之を喙む。氏曾て衆人の怨府となり、深く自ら怒り、決然として致仕の意ありしも、實德勸奬して再び職に從はしむるに至れり。然るに幾何もなくして、實德の老病の故を以つて退くに會し、氏、其世に望みなきを慮り、職を養子格之助に讓りて歸休せり。自ら曰く、『意はざりき、虛名州縣に滿ちんとは。因りて思ふに、未だ實得あらずして虛名如此は、是れ乃ち造物者の忌む所、徒に人禍を恐れて然するにあらざる也。』(寄佐藤一齋書) と、又自ら招隱篇并序を作りて以つて其志のある所を明にせり。

(備考) 招隱篇并序

昇平二百有餘歲。上下無事。而天下不可謂全無弊也。文政十丁亥之歲。迺吾官長高井公莅任之七年也。是歲之夏四月。公命予捕索耶蘇之邪黨于京攝之間以鎮治之。不日招伏就焉。公申呈之府。府聞之于東都憲臺。經三年之久而發落矣。妖邪煽誘庶民之害。於是乎稍息。十二月己丑春三月。公又命予糾察猾吏奸卒與豪强潛通隱交以蠹政害人者。而其所汪遽。及要路之人臣僕。歷世

之官司非不知之。蓋有所怖且憚而遁之歟。若爾不憂世思民之甚者也。余感公之忠憤。終置禍福利害於度外。潛圖密策。施疾雷不掩耳之遺意。以摘其伏發其姦。魁首自刎。餘黨各就刑于藁街。殛死者若干人。擧其職。有三千金。皆是民之膏血也。散之以肇建振恤茕獨之法。姦猾盡蝕庶民之害。於是乎又漸除。而無告之人。亦庶幾蘇息矣。十三年庚寅春三月。公亦命予沙汰浮屠之汚行。夫不與檢束浮屠。幾年于茲。故肆然犯婦女食魚鳥焉。甚於不賴之年少。其瀆腥汚穢。擧邦皆然矣。不徒此一方也。若急理之。則必不堪繁刑。故數訓戒之令。既及再三。終逮捕其不悛者數十人。盡流竄海嶋。使與邦人不齒。僧風於此乎一變矣。且京兆南都界浦亦風靡。其官司各黜貪鄙吏。誅姦邪僧。無皆不出于公之後。然則公之擧。諸衢之嘖矢也哉。而公年垂七十。其秋七月上箕裔之疏。而未允。嗚呼。余齡則三十有七。職則微賤而言聽計從。闢大政。除衙蠹。規僧風。豈非千歲之一遇乎。而公之進退乃如此。義不得不共棄職以招隱。而觀陳眉公讀書鏡所載。包明之於岐陽王也。不顧妻子之飢寒。弃職不往於汪公徽之府。則予雖俗吏。讀聖賢之書。從事其知之教。能無感于心乎。將見公之去而混樵漁之伍。故賦招隱之短篇。

昨夜閑窓夢。始醒。今朝心地似僊家。誰知。未。乏。索。交。者。秋。菊。東。籬。潔。白。花。

是より氏は、陽明學派の繼述者として、嚴肅莊重なる教育者となり、徒を聚めて其學を教授せり。前後來り會するもの、數千人に及べり。又遠く藤樹書院を訪ひて、村民を集めて致良知の學を講せり。

天保二三年の頃より氣候不順にして五穀多く登らず。四年に至りては、全國飢餓を訴へ、七年に至りては、更に甚しきを加へ、京畿特に甚し。九重の楓宸、何の狀あるを知らず。餓莩途に滿ちて、野に青草なし。氏は此慘狀を座視するに忍びず、之を奉行跡部某に訴へて、大に救恤の策を陳じたりしかど、言を左右に托して從はず。氏、心私に之を憤りしかども、亦之を如何ともすべからず。更に之を豪商輩に謀るに、跡部之を遮りしかば、氏、愈憤慨す。乃ち藏する所の經典書卷、擧げて之を鬻ぎ畢り、之を以つて一萬餘人を救ひ得たり。而も其財囊は一朝をだに支ふること能はず。此に於いて氏は、殆んど半は狂せり。既にして氏が志は、遂に決せり。

天保八年二月十九日、門生同志二百餘人を聚め、天誅の檄文（檄文は、備考に附す。）を四方に飛ばし、勤王救民の旗を一方に飜して、堂々として鼓行し、直に火を富豪の家宅に放ち、一擧奉行所を落し入れむとせり。猛火は、見る〳〵延燒し、浪華の八千餘戶、忽ち焦土となり、誠に慘悽を極めぬ。計、遂に成らず、一敗地に塗れ、餘燼、亦收拾すべきなし。乃ち子、格之助と共に、一民家に潛匿す。官、父子を大逆罪に問ひ、之を物色して搜むる事太だ急。父子其如何ともすべからざるに至りて、遂に豫め備へ置きたる硝藥に火を放ち、坐に腹を屠れり。燒爛せる死屍は、鹽漬とせられ、康衢を引廻され、果には叛逆罪を以つて、十字架上

に處斷せられたり。然れども其罪名の如何は、其人に於いて何かあらむ。

（備考）四海困窮致候はゞ、天祿長く絶えん。小人に國家を治めしめば、災害至ると、昔の聖人深く天下後世人の君、人の臣たる者を御誡め置れ候故、東照神君も餘寡孤獨に於て、最も憐みを加ふ可は、是れ仁政の基と被仰置候。然るに此二百五十年太平の間に、道々上たる人、驕奢とて、おごりを極め、大切の政事に携はり候諸役人ども、賄賂を公けに授受とて、贈り貰ひ致し、奥向女中の因緣を以て、道德仁義もなき拙き身分にて、立身重き役に經上り、一人一家を肥し候工夫のみに心を運し、其領分知行の民百姓どもへ、過分の用金を申付け、是迄年貢諸役の甚しきに苦しむ上より、無體之儀申渡し、道々入用當み候故、四海の萬物一體の仁を忘れ、得手勝手の政道を致し、江戸へ上米を致し、天子御在所の京都には、廻米の世話も致さゞるのみならず、五升一斗位の米を買に下り候者を召捕など致し、實に昔、葛伯といふ大名、其農夫の弁當を持運び候小兒を殺し候も同樣、官語同斷。何國の土地にても、人民は德川家御支配の者に相違なき所、如斯濟すに付候は、全く奉行等の不仁にて、其上、勝手我儘の觸書等を度々指出し、大阪市中の遊民斗りを大切に心得候は、前にも申通り、道德仁義を不レ存拙き身故にて、甚だ以て厚かましく不屆の至り。未曾有有福に暮し、町人の身を以て、大名の家老用人格に取用られ、又は自己の田畑雜用等も、夥だしく所持、何不足なく暮し、此節の天災天罰を見ながらも、思をもいださず、餓死の貧人乞食をも顧みず、其身は膏粱の味とて、結構の物を喰ひ、妾宅に入り込、或は揚屋茶屋へ大名の家來を誘引參り、高價の酒を湯水を呑むも同樣に致し、此雜澁の時節に絹服を纏ひ、河原者妓女どもを迎へ、平生同樣の遊樂に耽り候

は、何等のことに候哉、紂王長夜の酒盛も同事。其處の奉行諸役人手を握り候故を以て、右の者共を取締、下民を救ひ候儀も難出來、日々堂島米相場計をいぢり候事をいたし、實に誅盜人にて、決して天道聖人の心に難叶、御情なき事に候。蟄居の我等、最早堪忍び難成、湯武の勢ひ、孔孟の德はなけれども、無據天下のため存じ、血族の禍を犯し、此度志し有者共申合、下民困窮と相成候に付、人々上を怨まざる樣に成行候へども、江戸表より諸國一同、右の風儀に落入、天子は足利家以來、分て御隱居御同樣、賞罰の柄を御失ひに付、下民の怨み何方へ告愬とて告訴る方なき樣に亂れ候に付、人々の怨氣、天に通じ、年々地震火災、山も崩れ水も溢るゝより、五穀飢饉に相成候。是皆天より深く御誡めの有難き御告に候へども、一向上たる人、心附ず、猶小人奸邪の輩、大切の政事を執行ひ、唯下を惱し、金米を取立てる手段斗に相懸り候を以て、小前百姓共の難儀を、我等如き者、草の陰より察し恐れ候へども、湯王武王の勢位なく、孔子孟子の道德もなければ、徒らに蟄居致し候處、此節米價珍らしく高直に相成、大阪の奉行並に役人ども、惱し苦しめ候諸役人共を誅戮致し、引續き驕に長じ居候大阪市中金持の町人共を、誅戮に及び可レ申候間、右の者共穴藏に貯へおき候金銀錢等、諸藏屋舗内に隱置候俵米、夫々分散配當致し遣し候間、攝河泉播の田畑所持致さぬ者の、假令所持致し候とも、父母妻子家内の養方難出來程の難澁者へは、右金米取せ遣し候間、何れにも大阪市中に騷動起り候と聞傳へ候はゞ、里數を厭はず、一刻も早く大阪へ駈け付可レ參候。面々へ右の金米を分遣し可レ申候。鉢橋鹿臺の金粟を、下民に與へ遣さるゝ志ざしにて、當時の飢饉難儀を相救ひ遣し候。若又其内器量才力等あるものには、夫々取立、無道の者共を征伐致し候、

軍役にも遣ひ可申候。必ず一揆蜂起の企てとは違ひ、追々年貢諸役等に至る迄、輕く致し、都て中興　神武帝御政道の通り、寛仁大度の取扱に致し、年來驕侈淫逸の風俗一統を相改め、質素に立戻り、四民天恩を難有存じ、父母妻子をも被養、生前の地獄を救ひ、死後の極樂成佛を眼前に見せ遣し、堯舜　天照皇大神の時代に復し、離くとも、中興の氣象に恢復して立戻り申べく候。此書付一々村々へ知せ度候へども、夥多の事に付、最寄人家多く候大村の神殿へ張付置き候間、大阪より廻し有之番人共に知らせざるやう心懸け、早く村々へ相觸可申候。萬一番人等目付、大阪四ケ所の奸人共へ注進致し候樣子に候はゞ、遠慮なく面々申合せ、番人を打殺し可申候。若大騷動起り候を承りながら、疑惑致し、馳參り申さず、又は遲參に及び候はゞ、皆金持の米金は、火中の灰に相成、天下の寶を取失ひ可申候間、跡にて必ず我等を恨み、寶を捨る無道者と嘆言を致さぬやう、其爲一同へ觸知らせ候。尤も是迄地頭村方に有る年貢等に係ばり候諸記錄帳面類は、都て引破燒捨可申候。是往々深き慮り有事にて、人民を困窮致させ申さぬ積りに候。乍去此度の一擧、當朝平將門、明智光秀、漢土の劉裕、朱全忠の謀反に類し候と申すとも、是非無之道理に候へども、天下國家を擧盜致す欲念より起り候ことには、更に無之。日月星辰の神鑑にある事にて、詰る所は、湯武、漢高祖、明太祖、民を弔ひ君を誅し、天罰を執行候誠心而已に候。若し疑はしく覺候はゞ、我等の所業終る處を、爾等目を開き可看。

但し此書付は、小前の者へは、道場坊主或は、醫者等より讀聞せ可申候。若庄屋年寄眼前の禍を恐れ、一已に隱し候はゞ、直て急度其罪に可行候。

奉天命致天罰候。

天保八丁酉年月日

攝河泉播村々庄屋年寄百姓並小前百姓共へ。（檄文）

氏、資性猛介傲岸、時に情に激して睚眥咆哮の狀をあらはしやすし、事を處するに敢爲にして、始より己が禍福死生を忘れて之に當れり。氏自ら曰く、『英傑事に當りては、固禍福生死を忘る、而して事適成れば、則ち亦或は禍福生死に惑ふ。學問精熟の君子に至りては、則ち一也。』（洗心洞劄記）といへり。藤田東湖は其爲人を記して曰く、『面のあたり矢部に賓せしに、矢部曰く、平八郎を叛逆人といへど、駿河守の案には、叛逆とは不存候。平八郎は、所謂肝癪持の甚しき者也。與力を務むる內、豪富を折し、山民を救ひ、奸僧を沙汰し、邪教を吟味したる類、天晴の吏といふべし。又學問も有用の學にて、中々黃吻書生の及ぶべきにあらず。某、奉行在役中、度々燕室へ招き、密事をも相談し、又過失をも聞き、益を得る事淺少ならず。言語容貌、決して尋常の人にあらず。彼實に叛逆を謀らむには、いかで大阪の御城へ籠らざる事ある可き。然るに御城へは入らずして、捧火矢をもて燒き拂ひたるは何ぞや。某曾て平八郎を招き、共に食を喫せし折節、金頭（カナカシラ）といへる大魚を炙り出せり。時に平八郎憂國の談に及ぶ時、平八郎忠憤のあまり、怒髮衝冠ともい

ふべき有樣故、餘程慰諭しけれども平八郎益々憤り、金頭の頭より尾まで、ワリ〳〵嚙み碎きて食ひたり、翌日に至り、家宰某を諫めて曰く、昨夕の客は狂人なり、ユメ〳〵高貴の御方可近にあらず、爾來奥通り指留め玉へと。實に某が爲めと思ひて云ひけれども、汝が所知にあらずとて、始終交を全うせりと。此事小なりと雖も、平八郎の人となりをしるに足れり。』と。又其近藤重藏と會見せし時の如き、殆んど眼中人なく、互に其奇氣を較せむとせし狀を見るべし。

其著書少からず。就中、洗心洞箚記二卷は、氏自ら『一代の心血半は此書に在り』といひ、其一本は、伊勢朝熊山頂にて燔き、以つて天照大神の神靈に告げ、又一本は、富士山腹の石室に藏して、千歲の知己を俟たむとせり。然るに足代弘訓の勸めにより、豐宮崎林崎の兩文庫に納むることゝなれりと云ふ。氏の精神骨髓は、全く此書に在りと可知。其他古本大學刮目七卷、儒門空虛聚語三卷、增補孝經彙註三卷等あり。皆以つて參考に資すべし。

(二)　學風

氏が性格の、猖介傲岸、發扈弘毅なりしは、即ち氏が峻嚴峭酷、激厲風發なる一種奇拔なる學說をなせる所以也。箚記自述の序言あり、門人の言に托して、其說の世俗に戾る所以を記して曰く、『先生學を論じて人情に不協もの五あり。一に曰く、太虛、二に曰く、致良知、三に曰く、變化氣質、四に曰く、一死生、五に曰く、去虛僞。夫れ太虛は釋老に似、致良知は朱學に敵し、變化氣質は客氣勝心あるものゝなし難しとする所、一死生は凡庸怯懦輩の忌む所、而して虛僞は則ち中人以下、无始の妄、緣りて其血肉の間に攙入せざる者鮮し。故に一も其意に逆はざるなし。世の惡みを免れむと欲するも得むや。』と。然り、氏が一種奇拔なる說は、世俗と相容れざるものありし也。

氏はいふまでもなく、生有道念論者にして直覺論を主張せる人なれば、其學風が直截簡明にして、反省愼獨を主とし、其雜書をよみ徒に博覽廣聞を是れ事とするが如きは、むしろ邪知を長せしめ、却りて良知に害あるものとし、學者は學に入るの初め、先づ聖人の學脈を明にせざるべからずと論せり。而して修學の第一義は、主觀的考察たる愼獨の工夫にありといへり。此愼獨の工夫は、致知誠意の工程に外ならず。

氏は思らく、良知は道德的知識にして、先天固有の體なり、生れて後に得たるものには

あらざる也、然るに別に生れて後に得たる知あり、是れ邪知にして良知の障碍となるべきものなりと。曰く、『知覺聞見、情識意見の四知は、賢者と雖も免れざる所。故に賢者は之を過し、不肖者は及ばざる所也。海の東西南北となく、人たるものは是心あり、是理あり。而して學に志すとは、則ち四知の邪障を掃うて、此一知（良知を）を明にせざるべからず。某故に一語あり。曰く、邪、微にして靈光あらはると。靈光あらはるれば、則ち彼四知皆融會して、良知の使用たらざるなし。則ち良知も亦知覺聞見を廢することを得ず。故に愼獨の工は、聖學の第一義、霸學の及ぶ所にあらず。』（古本大學刮目）と、氏は、飽まで其所謂四知の道德的障碍となることを信じたり。人は幼穉の時代にありては、尙此心純天理の上にありて、自然的狀態を失はざれども、其成長するに從ひて、或は知覺聞見の知長じ、或は情識意見の知加はり、遂に先天固有の良知の靈光蔽塞せられ、徒に情に迷ひ、欲に利く、邪知を廻らして欺詐百端、全く不自然的狀態に陷るものと考へたり。故に氏が愼獨の工夫を凝らし、致知誠意を說くものは、是れ復性復初を說くに外ならず。氏は、人生の自然的狀態を翹望せる餘り、四知の邪障の止みたる睡時の狀態を以つて、心德の全き時なりといへり。曰く、『常人熟睡の時、反りて生き、明覺の時、反りて死せり。

何となれば、熟睡の時は、身死するが如しと雖も、然も心、一念なし。心、一念なければ、則ち心德全し。吾故に思へらく、反りて生けるなりと。而して明覺の時は、身固生活するも、心は雜念を起せり。心、雜念を起せば、即ち心德亡ぶ。吾故に思へらく、反りて死せる也と。因りて思ふ、人は學びて覺時も睡時の一念なきが如き地に到れば、則ち大學の定靜といはむ、周子の無極にして太極といはむ。』（洗心洞劄記）といへり。

氏は、此四知の邪障を掃ひて、良知を明に復せむが爲めに、嚴威嚴格なる敎育法を設けたり。氏は師たるものは、絕對的權威を以つて子弟に臨み、子弟をして其權威の下に常に戰々兢々として恐懼戒愼せしめ、以つて其邪知に流れむとするを防塞せざるべからずと考へたり。其門人正田竹翁の談話中に、『初めて來りました時に、入吾門學道、以忠信不欺爲本と、これが陽明先生の語じや。己が塾へ來て、不忠不信の行があつたり、人を欺く樣な奴は、手打に致すが、其は承知ならば來れ。』とあり。尙其洗心洞入學盟誓を參照すれば、氏が此中に於ける消息を、愈〻明にすることを得む。

（備考）洗心洞入學盟誓
欲學聖賢之道以爲人則師弟之名不可不正也師弟之名不正則雖有不善醜行誰敢棄之故師

弟名誠正則道行乎其間道行而善人君子出焉然則名問學之基也可不正哉某雖固陋寡聞以一日之長任其責則不得辭師之名而其名壞不壞大率在下文條件之立不立故結盟於入學之時以豫防乎其流不善之弊

主忠信而不可失聖賢之意矣如爲俗習所牽制而廢學荒業以陷奸細淫邪則辱其家之貧富使購某所告之經史以出焉其所出之經史盡附諸塾生若其本人而出藍之後各從其心所欲可學之要在躬行孝悌仁義而已矣故不可讀小說及異端眩目之雜書如犯之則無少長鞭朴若干是即帝舜朴作教刑之遺意而非某所創也

每日之業先經業而後詩文如遊施之則鞭朴若干不許陰締交於俗輩漁人以登樓縱酒等之放逸如一犯之則與廢學荒業之罪同

一夜中不許私出入塾如不請某以擅出焉則雖辭之以版省故不敘其罪鞭朴若干

家事有變故則必請詢焉以處之有道義故也非某欲聞人之陰私也

喪祭嫁娶及諸吉凶必告於某與同其憂喜

犯公罪則雖族親不能掩護告請官以任其處置願你們小心翼々莫貽父母之憂

右數件勿忘勿失此是盟之恤哉

(三三) 太虛

氏は、太虛の理を信じて、道德的本體となせり。太虛說は、氏が學の基礎にして、歸太虛は、

氏が道德終局の目的なり。而して其歸太虛の說たるや、氏が先賢の成語によりて發明したる所にして、陽明の說にあらずとは、氏自ら辯せし所なり。又太虛說は、宋の張橫渠の主張せし所なりしが、氏は又之に對して、『吾が太虛說は、致良知より來り、正蒙より來らず』といへり。要は其太虛を說き、又歸太虛を說くは、先賢の成語によりて、氏が發明に係れるものといふべし。氏は又其語の佛老より出でたるかを疑はれんことを恐れ、太虛に關せる先賢の言說を網羅して、儒門空虛聚語の編あるに至れり。氏が太虛說に於ける、亦勉めたりといふべし。今、氏が太虛の意義を分析說明すべし。

(一)太虛の說明　太虛とは何ぞ。氏は思へらく、太虛即虛、虛即萬有の本體にして、萬有の本體は、恒存不滅の體なりと。曰く、『太虛の理を了得すれば、萬物皆其中に在り。』(洗心洞劄記)と、又曰く、『形質あるものは、大と雖も限有りて必らず滅す。形質なきものは、微と雖も涯なくして亦傳ふ。高岳桑田、或は崩れ、或は海となる。而して唾壺の虛は、即ち太虛の虛、而して唾壺毀たると雖も、其虛は乃ち太虛に歸して萬古不滅也』(同上)といへり。氏が所謂太虛とは、漠々たる彼の空間を指して、之を萬有の本體なりと考へたりしなり。

(二)太虛と本心。　氏は、人の本心をもて、太虛の宿在にして、道德的本體なりと考へ、所謂萬有神教的に之を解せり。曰く、『心の體は、太虛なり。太虛は、一靈明のみ。』(同上)と、又曰く、『吾は、惟〻天地の中、即ち太虛の德にして、之を人の方寸の心に付す。而して方寸の心は、太虛の德を含む。故に曰く、天地の中は、他にあらず、人也と。此は乃ち實見の言、而して仁也、性也、道也、名を異にすと雖も、要は皆其德のみ。故に人、天地の中を全うせむと欲せば、則ち亦奚ぞ他に求めむや。只〻其良知を致し、性に率ひて以つて道を行へば、則ち仁熟して、心、太虛に歸す。學者此に至りて、亦聖か。』(同上)と。

如此方寸の虛、即ち人の本心は、天の太虛の宿在なれば、其相通じて際なき所以を述べて曰く、『方寸の虛は、口耳の虛と本通一。而して口耳の虛は、即ち太虛と通一にして際なく、四海を包括し、宇宙を含容して、捉捕すべからざるもの也。大を語れば天下は能く載する事なしと、此義甚分曉。手の舞ひ、足の踏むを知らず。』(同上)といへり。

(三)太虛と道德。　此太虛の存在せる本心は、即ち是れ道德的本源にして、彼〻仁義禮智信の如きは、太虛中に包含して、人心に宿在せる德目なりと論及せり。曰く、『善、孰か之を息せしむるか。惡、孰か之を消せしむるか。忠、孰か之を勸めしむるか。邪、孰か之を懲らさしむるか。父子、誰か之を親愛せしむるか。上下、孰か之を泰和ならしむるか。此亦太虛の德の致す所か。嗟夫吾は、其如何なるやをしらず。』(同上)と。又曰く、『仁は即ち太虛の生、義は即ち太虛の成、禮は即ち太虛の通、知は即ち太虛の明、信は即ち太虛の一、是れ皆太虛の德の用なり。而して人皆之を學ばずば、則ち昏黑にして長夜の如く、生せざると異ることなし。是故に學びて其德に率ゐ、以つて之を行ひて、始めて之を生人といふ。』(同上)と。故に又曰く、『夫道は、太虛のみ。故に學、太虛に歸すれば、則ち人の能事畢れり。』(同上)といふに至れり。

(四)歸太虛と聖人。　氏は、太虛をもて道德的本體となし、道德的理想となし、道德的目的となしければ、曰く、『學は、歸太虛をもて、人の能事畢れり。』と、又曰く、『心、太虛に歸す。學者、此に至りて亦聖か。』と又曰く、『其心、既に大虛に歸す。太虛、即無極の意也。無極、即ち亦人極也。是故に、聖賢の外、別に人極あるにあらず。』ともいへり。これより推論して、其心、太虛に歸したる聖人は、即太虛と同體なりと說くに至れり。曰く『聖人即有言の太虛、太虛即不言の聖人。』(同上)と。かく太虛と聖人とを合一し來り、聖人てふ名稱は、人倫の極致にして、其心量は太虛と共に通一にして際涯なく、四海を包括し宇宙を含

容して殘すなしと。曰く、『太虛、世界を容れ、世界、太虛に容れらる。而して物、千變萬化、未だ嘗て太虛に障碍すること不能。則ち聖人の心量累なきこと、是に於いてか見るべし。』（同上）と。

要之、氏が所謂太虛とは、宇宙萬有の本體にして、宇宙萬有は、其現象たるに外ならず。而して其體たるや、無形にして恒存不滅なり。反之、現象は有形にして一時的也。而して其太虛は、普遍的に吾人の方寸に存在して之を心と稱す。心は元、太虛と同一體にして、相通一して際なしといへり。又太虛は道德的本體なりと信じ、仁義禮智信の如きは、太虛中に包含せる綱目にして、吾人の本心に固有せる所なりと考へたり。故に歸太虛を以つて、人生の能事畢れりとなし、又有言の太虛、不言の聖人の說あるに至れり。要は太虛は、氏が學說上の基礎をなせるものにして、又終局の目的なりといふべし。

（四）致良知及び氣質の變化

氏が所謂致良知とは、良知を致して太虛に歸する積極的工程なり。而して其良知は、太虛の宿在せる本心の識別力を指していふ。『良知は、只々是れ太虛の靈明のみ。』（洗心洞劄記）

と。而して其良知を致すとは、四知（知覺聞見情識意見の四知をいふ。學風の條、參看せよ。）の邪障を掃ひて、良知を明にするをいふ。如此四知の邪障を掃ひて、良知の明なるは、是れ太虛の靈明を歸するなり。故に氏が致良知は、太虛に歸するの工夫なりと知るべし。太虛は、氏が道德上の絕對理想なり。故に曰く、『陽明先生、訓する所の致良知の實功を積むにあらざれば、則ち橫渠先生が所謂太虛の地位に至るべからず。故に心を太虛に歸せむと欲せば、宜しく良知を致すべし。』（同上）と。

如此氏は、良知をもて太虛の靈光、道德の識別力となし、且つ其識別力は、只々單に識別の作用のみに止らず、知行合一的の知なりと考へたり。故に致良知の結果は、良知獨り一身の主宰となりて、四知の邪障なく、知りて行はざるなく、行は道に合せざるなく、所謂知行合一すべし。之を聖賢といひ、君子といひ、仁者知者なりといへり。曰く、『只々幸とする所は、天地の德性、方寸の虛に含るが故に、獨を愼みて其虛を塞がざれば、則ち德性の一知、乃ち大君となり、四知を使用し、以つて祟をなからしむ。是を聖賢といひ、是を君子といひ、是を仁者知者といふ。』（古本大學刮目）と。氏はかく良知を致したる結果、其良知の作用の廣大なるを說きて曰く、『夫れ良知は、天を生じ、地を生じ、仁を生じ、義を生じ、

禮智を生ずるの主宰也。』（答由比計義書）といへり。

氏は太虛に歸ずるの消極的工夫として、變化氣質の說あり。氏は思へらく、人は軀殼ありて然る後に氣質あり。氣質あるが爲めに、私情私欲の累あり。是れ彼の風俗習慣等の社會的感化によりて成れる四知の障碍と相助けて、良知の光明を壅塞する者なりとせり。而して氏は、殊に氣質は軀殼あると同時に、軀殼に伴ふ所の私情私欲にして、良知の光明を牆壁するとの甚しき者なりと考へたるより、變化氣質を唱道して、太虛に歸するの消極的工夫なりと考へたり。曰く『方寸の虛は、是れ太虛の虛にして、太虛の虛は便ち是れ方寸の虛、本二なし。畢竟氣質之を牆壁する也。故に人學びて氣質を變化すれば、則ち聖人と同じき者、宛然として徧布照耀し、包涵せざるなく、貫徹せざるなし。嗚呼氣質を變化せずして學に從事する者、其學ぶ所將何事ぞ。陋といふべし。』（洗心洞劄記）と、又曰く、『心の本體は、所謂至善、所謂中、所謂太極なるを見ることを要す。則ち障翳する所の氣質、先之を變化せよ。』（同上）と。而して氣質を變化するは、是れ致良知と要は其歸を一にし、氣質を變化すれば、自然に太虛の本體に復歸し、昭々たる良知の靈光に接すべし。故に氣質を變化するは、是れ太虛に歸するの工夫にして、氣質を變化すれば、則ち本心太虛と一致すと述べたり。曰く『眼を開きて天地を俯仰して以つて之を觀れば、則ち壤石は即ち吾が骨肉、草木は即ち吾が毛髮、雨水川流は即ち吾が膏血精液、雲烟風籟は即ち吾が呼吸吹噓、日月星辰の光は即ち吾が兩眼の光、春夏秋冬の運は即ち吾が五常の運、而して太虛は即ち吾が心の蘊也。嗚呼人七尺の軀、天地と齊しきこと即ち如此。三歲の稱、豈徒然ならむや。宜しく變化氣質して、以つて太虛の體に復すべし。』（同上）といへり。

要之、致良知はこれ歸太虛の積極的工夫にして、變化氣質はこれ歸太虛の消極的工夫なりとしるべし。されど此兩者は、元、密接不離の關係を有し、之を分ち見るべからざるなり。即ち良知を致せば、從ひて氣質變化し、氣質變化すれば、從ひて良知明なり。而して其良知明に氣質も亦變化せらるれば、是れ已に太虛に歸したるものにして、又是れ本心は、太虛と一體なる至善の狀態に止れるものといふべし。

（五）主靜愼獨及び克己復禮

氏は、致良知及び變化氣質即ち歸太虛の修養として、主靜愼獨、及び克己復禮の工夫を

進べたる、而して心、太虛に歸すれば、道德的知は道德的行と相一致するに至るまで、又之を知行合一の工夫とも謂へり。

然らば主靜愼獨の工夫とは何ぞや。曰く、『其心の物を格し、其意の物を格し、其知の物を格すは、便ち是れ主靜愼獨の工也。』(古本大學別目)と。又克己復禮の工夫とは何ぞや。白く、『其物の心を正し、其物の意を誠にし、其物の知を致すは、便ち是れ克己復禮の工也。』(同上)と。然らば則ち兩者の干係は如何。氏曰く、『彼は、(主靜愼獨を指す。)則ち未發にありて工を用ひ、此は、(克己復禮を指す。)則ち已發にありて工を用ふ。內外を合せ、體用を一にし、顯微を融するの工夫、所謂文理密察にして滲漏なきものなり。』(同上)と。

氏は進みて、其心の物を格す上より工夫を積みたる聶双江、其意の物を格す上より工夫をつみたる劉念臺、其知の物を格すより工夫をつみたる羅念菴の三氏の修養體察の實話を擧げて、格心之物、格意之物、格知之物の三事を詳說して曰く、『双江は自ら心、ふ、只發見に即きて以つて格物致知誠意すと雖も、然も若し病を心の體、未發の中に受くるあらば、則ち必らず時ありて發し、或は十數年を經て發せざるも、明道獵を觀て害心復生するの類なり。故に多方靜を求めて、乃ち未發以前の心を見て以つて其隱伏の物

を格正して、遂に執中を得たりと。功、此に至りて、知に、意識情識の攙和なくして眞也。意に、私利邪僞の駁雜なくして誠也。身、固、既に修了す。此即ち格心之物の眞功驗也。念臺は自らいふ、致知以つて意の在る所の物を格せ。世儒の所謂意とは、則ち義にあらず善惡の形となす。善惡の形を待ちて其事を正さば、則ち艱難雜糅にたへずして、力を勞し精を費し、要は無益に歸せむ。然れども直に心體上に就いて手を下さば、則ち茫乎として歸着の所なけむ。故に獨知を愼しみ、以つて幾を察すれば、則ち善惡未だ形れざるを以つての故に、艱難雜糅の相犯すなくして、大に勞力費精の徒工を省きて、其事を正すに要あらひと。是故に愼獨の工夫、十分入微徹底して、遂に至善に止ることを得たる也。功、此に到りて、知に、意識情識の攙和なくして、眞也。意に、私利邪僞の駁雜なくして誠也。內には既に心亦正了し、外は則ち身も亦終に修了す。此即ち格意之物の眞功驗也。念菴は自らいふ、良知を事々物々の上に致すことを爲すと雖も、然も人習心ありて、不知不覺意識情識其間に加り、却りて良知の祟をなす。是故に主靜歸寂にあらざれば、眞良知を認むること不能と。是れ良工の獨、其心を苦む者也。故に石蓮洞中に於いて、靜坐三年、僅に其知之物を致すのみ。其格す所以の法、是れ情識か、意識か、聞見の知覺か、靈光の照燭か、之

を其獨に討ね、之を其微に訟へ、以つて其事を格して正に歸し、遂に良知の眞面目を窺ひ得る也。功此に到りて、知に、意識情識の攪和なくして眞也、意に、私利邪僧の駁雜なくして誠也。心も亦正ならざるを得ずして、身も亦修らざるを得ず。其即ち其知の物を格せる眞功驗也。格物三あるが如しと雖も、各、覺悟せし處より、功を下し天理に復し、以つて人欲の私なきは則ち其成功也。愚は故にいふ、此格物を主靜愼獨の功となすと。』(同上)

と。此三事は工夫を下すの地を異にせるより、或は心の物を格すといひ、或は意の物を格すといひ、或は知の物を格すといふ。而も皆是れ格物の說にして其心意知の三物に就いて、未發の上より手を下すより、氏は稱して主靜愼獨の工なりといへり。即ち道德修養の主觀的考察なりといふべし。

又、氏が所謂正物之心、誠物之意、致物之知てふ意義を詳說して曰く、『物の心を正し、物の意を誠にし、物の知を致す。一物と雖も、實に十百千萬にして窮盡なし。若し物を外にして、以つて正心誠意致知せば、則ち空心を正し、空意を誠にし、空知を致す也。此乃ち事物を離るゝは、老佛の學にして、吾が聖人の敎にあらず。吾が聖人の敎、重に格物にあり。上天の事、吾人の身心を貫穿し、而して意の動に就いて以つて發し、事々物々之に賴り

て裁成輔相を得て、則ち心意知其物を串して在り。可見、主靜愼獨の君子と雖も、已發の時、漫然一向管へざるにあらねど、猶恐る、其事を貫くの心、微にして不正あるか、意も亦不誠あるか、知も亦不致あるか、萬一不致ものあれば、則ち勉めて之を致し、不誠ものあれば、則ち勉めて之を誠にし、不正のものあれば、則ち勉めて之を正せ。是れ乃ち克己復禮已發上の實功、而して上乘猶中下を兼修す。況んや中下の者をや。修身の工夫は、此の如く詳密精純ならざるべからず。』(同上)といへり。氏が前の格物の說は、主靜愼獨純主觀的考察にして、其弊や道德的社會を離れて空心を正し、空意を誠にし、空知を致すの野狐禪に陷らむことを恐れ、其心といひ、意といひ、知といふは、道德的社會と相表裏して不離ものなりとし、此物の心を正し、物の意を誠にし、物の知を致すの說あるに至れり。物の心を正し、物の意を誠にし、物の知を致すとは、則ち吾人內面の心意知が、道德的社會に向つて、已發の上より手を下し、非禮視ることなく、非禮聽くことなく、非禮言ふことなく、非禮動くことなく、以つて時々刻々に修養をつみ、以つて知と行との一致を保つにあり。氏は之を稱して克己復禮の工なりと云へり。即ち或意味に於ける、道德修養の客觀的考察なりといふべし。

前にも述べたりし如く、氏が修養說たる、主靜愼獨及び克己復禮の二方面、即ち未發及び已發の上より工夫をつみ、氣質を變化して良知を致すと同時に、視聽言動の非禮を正して、道德的知をして道德的行と相一致せしめんことを希待せり。氏が此主靜愼獨、克己復禮の工夫は、即ち是れ歸太虛の工夫にして、又知行合一の修養說なりとしるべし。『君子の善に於けるや、必ず知行合一也。』（洗心洞劄記）と、又更に進みて、『理氣（蓋し、道德的知にして、氣とは、道德的意思也。）合一、天地と德を同じうし、陰陽と功を同うす。亦聖人か』（同上）といふに至れり。

（六）禍福生死

氏は、道德修養の結果、遂に太虛の本體に復歸し、すべて相對界なる禍福生死を一にするの說あり。蓋し氏は、主靜愼獨、克己復禮の工夫をつみ、以つて四知及び氣質の邪障を拂ひて良知を明にし、良知明にして公明至誠、即ち心太虛に歸すべし。心已に太虛に歸すれば、是れ即ち心は相對界を離れて、絕對界に超越せるもの也。心已に此境に進まば、是れ心は太虛と一にして、又太虛の恒存不滅の體たると同じく、心も亦恒存不滅の體

なりといふべし。是を以つて氏は我に形骸の我あり、本心の我ありと考へ、形骸の我を以つて一時的なる假我となし、本心の我を以つて恒存不滅の眞我なりとせり。氏は已に此信念を抱懷せしが故に、形骸上の生といひ死といふ類は、必竟假我の上に於ける一變化に過ぎずして、眞我には何等の與る所なしとせり。氏嘗て曰く、『未出の息は、內に在り、即ち生也。既に吹ける息は、外に出づ、即ち死也。身に就いて見之、則ち生死何の難知ことか之あらむ。』（洗心洞劄記）と。

氏は已に大悟徹底して、絕對界に藤樹の所謂萬劫不壞の家山を認め、進脩息まず、遂に絕對より相對を一抹し去り、假我の上に於ける、禍福生死一貫の理を發見し、毫も惑はざるに至れる境涯を述べて曰く、『英傑大事に當りて、固より禍福生死を忘る。而も事適成れば、則ち又或は禍福生死に惑ふ。學問精熱の君子に至りては、則ち一也。』（同上）と、又更に歩を進めて、一時的なる假我を舍つるも、恒存不滅なる本心の眞我を全うせざるべからざる所以を述べて曰く、『生を求めて以つて仁を害ふことなかれ。夫れ生は滅ありて、太虛の德は萬古不滅のもの也。萬古不滅のものをすて、滅あるものを守るは、惑へる也。故に志士仁人は、彼を舍てゝ之を取るは、誠に理あり。常人の知る所にあら

す。』（同上）と。要するに氏が禍福生死の說は、其太虛說より得來れるものといふべし。『如此氏は、一時的形骸的なる假我を超越して、恒存不滅の精神的眞我の無上絕對を信し、すべて相對界に於ける禍福生死を一抹し去れり。形骸の禍福生死以外に超立して、偏に本心眞我の無上の命令に對して、絕對的に服從して行止せざる可らず。禍福生死を冷視して、更に眼中に措かざる大悟徹底の境に進まざるべからざるを說くや切也。曰く、『天地の道は、一順一逆のみ。順境の如きは、心虛に歸せざるものと雖も、亦善く應ず。逆境に至りては則ち心虛に歸するものにあらざれば、應ずること不能。』（同上）と、又曰く、『平生至安の時に當りて、危難の念なかるべからず。倉卒危難の時に當りては、至安の樂しみなかるべからず。』（同上）と、又曰く、『吾輩聖人を學ぶに、一に良知に任せて是非を公にせむ。』（同上）といひ、最後に禍福生死を忘れて、一に本心眞我の道德的眞勇を說きて、孟子の所謂至大至剛天地の間に塞る浩然の氣なりと言へり。是れ氏が一代の性行の最も公明正大にして、其直覺論者として又其知行合一の君子として、侃々諤々の辯、踽々凉々の行ありし所以にして、更に最後の快事に至りては、震天動地の一大掉尾をなし、直覺論者の長所と短所とを一時に暴露して、悠然として本心の大喜悅大滿足を全うし、相對界なる此世を去りて、絕對的なる彼太虛の鄉に復歸せり。嗚呼是れ氏が所謂常人の知る所にあらざるものといふべし。

（七）歸結

要するに、氏が峻嚴峭酷なる資性は、其激厲風發なる學說と相待ちて、終始其理想に向つて直前邁進し、更に顧慮する所なく、躊躇する所なかりき。然り、氏が一代の行迹の、亭亭として一毫の邪淫私曲なく、潔白無垢なりしは、氏が一種の信念の動すべからざるものありしによれり。氏は、圓粹和融なる德行家、藤樹の如くなる能はず。氏は、又利用厚生、救民濟世の政治家、蕃山の如くなる能はず。氏は、又理論幽玄筆墨超妙、一齊の如くなる能はず。而も氏にありては、特に他の三氏にありて見るべからざる氣槩節操を認むべし。其歸太虛の說、其死生を一にせる說は、氏が眞本領のある所なりとしるべし。

第三編　古學派

(一)所謂古學派とは何ぞ、——(二)古學唱道者の崛起、——(三)各派の狀態、

(一)　所謂古學派とは何ぞ

程朱學は天下に瀰漫し、陽明學も亦將に大に起らむとし、所謂新學、獨り其隆盛を極めたりき。學者は持敬涵養を說くにあらざれば、則ち默座澄心を唱へ、或は記誦の末に走り、或は悟道の奇に流れ、或は物理を究めて本性を修むといひ、或は頓悟、良知を致すといふなど、要は天道理氣の說を信じ、心性を本として說を立てたるものといふべし。孔子が所謂性と天道とを常に語り、理論の末に流れて、遂に世敎と道德とは、二途となるの傾あるに至りては、豈斯學の一大欠陷にあらずや。於此乎此等新學派の見地を舍て、直に孔孟の門墻に逼り、堂奧に上りて、其眞趣を會得せむとて起りたるものあり。之をこれ古學派といふ。山鹿素行、伊藤仁齋、貝原益軒、荻生徂徠の如きは、之が先導者なりといふべし。此等の古學者が、相期せずして殆んど同時に起りしといふは、蓋し時勢に

挑撥せられ、反激せられて興起せしものに外ならず。就中、仁齋派と徂徠派とは、門流甚だ盛に、天下の學界を兩分せむとする勢ありき。仁齋の派を、一に堀河派といひ、古義學を主張し、徂徠の派を、一に護園派といひ、古文辭學を唱道せり。

(三二) 古學唱道者の崛起

素行、仁齋、益軒、徂徠、の諸家が、相期せずして同じく古學を唱道せしは、誠に奇といふべし。而して其興起の先後に就いては、世頗る疑あり。益軒、徂徠の素行、仁齋に後れしは、人の普く知る所なりと雖も、素行と仁齋とに至りては、孰か先、孰か後、之を論ずるもの、其說紛々として一途に歸すること能はず。今、四氏が生卒を見るに、

山鹿素行、　元和八年生、貞享二年歿、（一二八二、—一二三四五）
伊藤仁齋、　寛永四年生、寶永二年歿、（一二八七、—一二三六五）
貝原益軒、　寛永七年生、正德四年歿、（一二九〇、—一二三七四）
荻生徂徠、　寛文六年生、享保十三年歿、（一二三二六、—一二三八八）

由是觀之、素行は仁齋より長ずること六年、仁齋は益軒より長ずること四年、益軒は徂

徠より長ずること三十七年也。然らば徂徠が他の三氏より後れたること、遙に遠し而して素行は之が先輩にして、仁齋と益軒とは相繼きて出でたりしをしるべし。是れ生時に於いては、素行の先輩たりしを見るなり。然りと雖も學說唱道の先後は、必しも生時の早晩に相關せずといへば、生時を以つて直に其早晩を斷定すべからず。

先輩諸家が、素行仁齋二家が、家學唱道の前後を論せしものゝ中、安齋隨筆前編、先哲叢談後編等には、素行を以つて嚆矢を射られたるものとなして之を辯せり。然るに間合早學問、學問源流、及び九經談、等によれば、先鞭の功を、仁齋に歸せり。而して遂に益軒、徂徠に及べるものなし。然らば、唱道先鞭の功は、之を素行、仁齋、二氏の孰かに歸せざるべからず。

今二氏が家學を發表せし年次に就いて之を見るに、仁齋が論孟古義及び中庸發揮の草定は、始めて其主張を發表せしものにして、二書共に寛文三年に成り、氏が三十七歲の時なりき。然るに素行が、其主張を發表せる聖教要錄の刊行は、仁齋に後るゝこと四年、即ち寛文六年に在りて、其四十五歲の時なりき。而して益軒が大疑錄は、其晩年の作に係れりといへば、其前二氏に後れたるは言を俟たざる也。然らば古學唱道の先鞭は、

素行にあらずして仁齋にありといはざるべからざるか。

されど今、單に聖教要錄の刊行を以つて、素行が唱道は此に始れりと見るべからざるものあり。何ぞや。素行は聖教要錄を記述せし以前、已に語類四十三卷を草定せるあり。語類中、其主張は、歴々として見るべし。且つ要錄の書たる、語類中より、其聖教に關するものを撮記せしものなりといへば、素行が古學の主張は、已に要錄以前にありしをしるべし。而して語類の草定は、要錄の刊行に先立つこと四、五年なりきといへば、仁齋が古義、發揮と、殆んど前後無きが如し。嗚呼二氏は、特に時勢に挑撥せられ、反激せられて興起せしもの也。他に誘導啓發せられたるものにはあらじ。

(三三) 各派の狀態

素行(二二四八二五)は、夙に林羅山の門に入り、程朱學を受けたりし人なりしが、考察尋求の結果、遂に之を排斥し、『道統の傳、宋に至りて泯滅す。』と絶叫し、大に主張する所あらむとせしが、一旦幕府の忌諱にふれ、赤穗に幽囚せらるゝに及び、緘默、復其異同を辯せずなりぬ。從つて其統を承くるものなかりき。

仁齋(二二八七六五)は、宋說の理氣併存に疑を挾み、所謂古義學によりて、元氣說を唱へ出し、之を基礎となし、道德の社會的活動的なるを主張し、一家言を樹立せり。門下俊才甚だ多く、中にも子に東涯(二二三三九六)梅宇、介亭、竹里、蘭嶋、ありて、其名字皆藏字を附せるより、世之を伊藤の五藏と稱し、又特に東涯、蘭嶋の超出せるより、伊藤首尾藏の稱あり。門人中名あるものには、並川天民、小川立所、北村篤所、荒川蘭臺、中江岷山、松岡恕庵、三重松庵、大石良雄等あり。而して東涯の門下には、子、東所、門弟には垣內熊岳、奥田蘭汀、原双桂、澤村琴所、松崎觀瀾、原田東岳、靑木昆陽、等あり。蘭嶋の門下には、木村蓬渚、宮武器川、宮崎筠圃、等あり。東所の門下には、弟東里、門弟河田東岡、倉成龍渚あり。東里に繼ぎて東峰あり。

仁齋の學は、如此門下才俊の鼓盪によりて、直に聖道派を壓倒して、顧盼雄を示せる慨にありき。東涯の蓋簪錄に、仁齋が生徒を敎授せし事、四十餘年、諸州の人、國として至らざるなく、唯飛彈佐渡壹岐三州の人、門に及ばざりしのみと、謂を執りし士、千を以つて數ふるに至れりと云ふ。徂徠學行はるゝに及びて、稍衰ふ。

伊藤東里―伊藤東所、河内東岡、垣内熊岳、倉成龍渚、奥田闌汀、原双桂、澤村琴所、松崎觀瀾、原田東岳、青木昆陽、

伊藤東涯、伊藤梅宇、同介亭、同竹里、

伊藤仁齋、同蘭嶼、宮武器川、宮崎筠圃、並川天民、木村蓬渚、小川立所、北村篤所、荒川闌臺、中江浜山、松岡恕庵、三重松庵、大石良雄、

益軒（二三二七九四）は、木下順庵に學びて、程朱學を受け、其初は程朱信奉者なりしが、晩年忽ち疑を挾み、古學派の立脚地より、宋學を攻擊するに至れり。其唱道の年時、甚だ短かりしかば、遂に其學を傳ふるものなかりき。門下名あるものは唯、姪好古、竹田春庵、香月牛山あるのみ。

貝原益軒、貝原好古、竹田春庵、香月牛山、

徂徠（二三二八六）は、林鳳岡の門より出づ。曾て程朱學に據りしかと、後、仁齋が古義學を聞き、心私に之に葵向し、遂に超乗して李王の説に據り、古文辭學を唱道し、殊に宋説を排し、併せて仁齋に及べり。徂徠、人を教育するに才を採り、門下には、狂狷の徒斐然として章を成せり。就中著れたるものは、太宰春臺、（二三四〇七）服部南郭、安藤東野、山縣周南、平野金華、大内熊耳、宇佐美灊水、山井崑崙及び弟觀、義子金谷あり。春臺の門下に、松崎觀海、五味釜川等あり。周南の門下には、和知東郊、瀧鶴臺、林東溟、（以上山縣門下の三傑）龜井南溟、等あり。南溟の門下、龜井昭陽あり。昭陽の門下、廣瀬淡窓（二四四二五一六）を出せり。淡窓折衷學を

唱ふ。大內熊耳の門下には、立原翠軒を出せり。翠軒は、別に古註學を水戸に唱へて、門人を敎育し、水戸學を振興せるに與りて力あり、瀧水の門下には、義子片山兼山（二三九〇、二四四二）を出せり。兼山、父師に反して折衷學を唱ふ。金谷の子には、鳳鳴あり。

思ふに徂徠は、人を敎育するに其才を採りて行を論せず、文學を事として道德を忘る。然も其學、天下に蔓延して、直に仁齋の學を壓倒せり。元文の始めより、寛延の末年（二三九六、二四一〇）に至るまでを、最盛期とす。折衷學起るに及びて、稍衰ふ。

太宰春臺、（松崎觀海、五味釜川、）
服部南郭、—鵜殿本莊、
安藤東野、（和知東郊、）
山縣周南、（瀧鶴臺、林東溟、）
平野金華、（龜井南溟、—龜井昭陽、—廣瀨淡窓、—廣瀨旭莊、）
大內熊耳、—立原翠軒、—藤田幽谷、
宇佐美灊水、—片山兼山、
山井崑崙、
荻生徂徠、
荻生觀、
荻生金谷、—荻生鳳鳴、

以上、我が所謂古學派に就いて其一斑を叙述したりしが、今其中に就いて、素行、仁齋、東涯、益軒、徂徠、春臺の六氏を採り、其學說の梗概を見んと欲す。

第一章　山鹿素行（二二八二—二三四五）

（一）傳記、—（二）學風、—（三）性情說、—（四）性情の修養、—（五）德及び才、—（六）士道論、—（七）歸結、

（一）傳記

惺窩、起りて一派を立て、藤樹、起りて又一派を立て、闇齋、起りて又更に一派を立つ。其依據する所を問へば、程朱にあらざれば即ち陽明也。皆宋以來の新學にして、古代の儒學に比して、著しく心性性理の思辨說に傾き、默座澄心の工夫に流れ、其弊、兎もすれば世事に迂にして、其爲す所不知不識倫常に戻るものあるを見て、總て新學を捨てゝ古學

を唱道せるもの續々起りぬ。山鹿素行あり、伊藤仁齋あり、貝原益軒あり、荻生徂徠あり。素行、名は高興、初の名は義以、字は子敬、因山と號し、軒を素行と稱せしが、其後素行の號獨り行はるゝに至れり。通稱は、甚五左衛門といふ。元和八年、陸奥の會津に生る。父は高道といひ、會津の老臣、町野左近に賴りて、祿二百五十石を受けて、其家臣となれり。高道、左近の待女を妾とし、設けし子、即ち素行なり。其後、藩主罪ありて國除かれしかば、左近は出でゝ幕府に仕へ、高道も江戸に出て、髮を削りて玄庵と稱し、醫を業として生計の道を立て、專ら一子の教育に心を委ねたり。

氏、六歲にして書をよみ、八歲には四書五經七書詩文の類をよみ覺え、九歲の頃には、林羅山の門に入り、孜々として勉めて息まず。十一歲の時には、人の爲めに小學論語の類を講せしに、辯論態度殆んど老成の人の如きに至れりと云ふ。十二歲の時には、書を講ずるに見臺を用ふる事を許されたり。此事、實に異例なりきと云ふ。亦以つて其進學の一端を想ふべし。

既にして氏が志向は、稍多岐に涉れり。或は武藝に、或は神道に、或は國歌國典に傾けり。即ち十五歲にして、當時の軍學者たる尾畑勘兵衛及び北條安房守に就きて、軍學を修めしが、既にして其奧義を極め、同門中、一人の比肩するもの無きに至れり。十七歲の頃には、高野按察院、光宥法印の二人に就て、神道を學び、後には廣田坦齋より根本宗源の神道を傳へられたり。又同時に、國歌國典を修めたりき。氏は如此諸方面の學に涉り、才機の敏、氣力の壯なる、誠に絕倫なりしかは、如上程朱學は勿論、廣く他の軍學、或は神道、或は國歌國典にまで曉通するに至れり。加之時に或は老莊に耽りて、虛無冲漠の玄理を談し、又傍ら萬葉源語などの註脚を物するに至りぬ。其如此八面に馳騁し、而も皆其堂奧を極むるに至りては、其才機、其氣力、豈驚くべきにあらずや。而も其本領とする所は、儒と兵との二にありといふべし。

氏は、年未だ弱冠ならずして、聲譽已に揚り、其希世の質たるを稱せらるゝに至れり。時に將軍家光、其名を聞き、將に之を重用せむとせしが、偶々病に罹りて果さず、既にして薨去し、事遂にやみぬ。諸侯伯、皆、贄を執りて敎を乞ひ、又禮を厚くして之を聘せむとせしもの多かりき。然るに一朝赤穗侯淺野長友の知遇に感じ、意を決して之に仕ふるに至れり。時に年三十一、竊に侯に謂ひて曰く、『天下無事、死を以て舊恩に報いる事能はず。然れども非常の境遇に際せむには、將に大に報いる所あらむとす。臣は聊か聖道と

兵法とを以つて侯の諸臣に教べむ。臣の精力の盡する所、皆此にあり』と。侯大に喜べり。於此一藩文武の任を負ひ、皷舞督勵甚だ之を勤めたり。居ること九年にして致仕せしか、侯の禮遇愈々渥し。時に天下の公伯より、士太夫に至るまで、爭ひて其門に入り、勝げて數ふべからず。平生奉養甚盛にして、俸五六千石の者と雖も、之と抗すること能はず。聲望隱然たり。而も名のある所、謗も亦之に隨ふ。

寛文六年、偶ま聖教要錄を公刊せり。要錄の書、宋儒新學の空理空想に驚りて迂疎なるを排し、偏に聖人の實學を世に明にせむと欲するにあり。然るに此事、幕府の忌む所となりて、罪を得て赤穗に幽閉せらるゝに至れり。嘗て由井正雪等、兵を起してより、幕府は深く有爲の材を忌み、彼熊澤蕃山の如きも窮厄にあひ、果には古河に幽せらるゝあり。時勢如此なりければ、氏が要錄の書を公刊して、當時の官學に抗し、程朱學を誹謗せしを憤となし、かくは迫害に逢ふに至りしものならむ。

氏配所にあること十年、幕府の疑は稍〻解け、遂に其囚を赦さるゝ事となれり。乃ち江戸に歸れり。時に年五十四。氏、怨憤措くこと能はず。自是口、聖經を談ぜず、專ら兵學を教授せり。故に氏の名聲は、單に兵家として後世の崇敬を受けしのみにして、其儒家的半面は殆んど全く忘却せられたり。貞享二年歿しぬ。年六十四。門人相集りて、江戸牛込早稻田の宗三寺に葬れり。

氏、歿後殆んど二十年にして、淺野長友の子長矩、殿上に於いて吉良義央を傷けたりしが、其遺臣四十七士、相結びて苦心慘憺、以つて復讐の擧あり。此等の諸士は皆氏が曾て教育薫陶せし所のものなりきと云ふ。

氏、資性英邁、氣宇卓犖、之に加ふるに洽聞强識、時態に達練す。其利害得失を論定すること、瞭々として掌文を指すが如し。其人に接するや、藹然として胸襟を披瀝し、毫もかくす所なし。是を以つて一たび贄を執るもの、風猷を欽挹して之に心賴し、啻に問道請教のみにあらずして、事、機密に屬すと雖も、情實を吐露し、腹心を委して、其裁斷を受く。是を以つて公伯より士庶人に至るまで、門下に出入する者、日に數十百人に及べりといふ。嗚呼此等の人物、豈想像しかたからむや。

氏が著書中、最も重要なるものは、聖教要錄三卷、及び山鹿語類四十三卷なりとす。要錄の事は、前に少しく述べたりしかば、今は更め言はず。語類の書は、君臣父子の道より說き起し、中に士道を論じ、最後に聖學の要領を論辯せり。氏が一代の學問見識は、此書に

よりて見るべし。其他、謫居童問三卷、配所殘筆一卷、及び武教全書八卷、武教小學一卷、武家事記五十卷等あり。尙門人の編錄に成りしもの、數十種あり。

(二)　學風

氏の學風は、一言以つて之を蔽へば、功利教なりといふべし。氏は思へらく、『世間の學は、學問と事業と別々になり、學者は世事に迂遠にして、何等の稗益する所なし』と。蓋し當時程朱の學は大に普及し、之に繼きて陸王の學起りけるが、此兩學派は、共に萬有神教的立脚地にありて、本然の善を主張し、徒に默坐澄心の工夫にのみ沒頭し、其極、學は日用事物と扞格し來り、社會を離れて個人の完成を希圖するの傾あるに至りければ、氏は此等の學は、聖人功利の教に合はずとなし、歸然として、聖人道統の說を唱ふるに至れり。思ふに氏は、此等新學の根本的誤謬は、妄に本然の善を信ずるに基せるにありとなし、先つ其本然說を打破せむことに力を致し、以つて氏が學風を樹立して大に呼號するに至れり。氏は、學は一方に於いては標準を客觀的なる聖人の道統に求め、他の一方に於いては、事物應接の間に於ける條理を了解するにありとなせり。學は、必ら

ず此兩方面を備へざるべからずとなせり。何となれば若し聖人の道統を以つて標準とせずんば、事々我執に陷り、勞して功なく、又日用事物を離れては、學、社會と乖離し去り、果には聖人功利の教に合せざれば也。氏は、かゝる考なりければ、孔子以後の學風が、世の變遷に伴ひて、他岐異端に陷り、其統を失へるを痛罵して曰く、『伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公の十聖人、其德其知、天下に施し、而して萬世、其澤を被れり。周衰ふるに及びて、天、仲尼を生ず。生民より以來、未だ孔子より盛なるはあらざりき。孔子沒して、聖人の統、殆んど盡く。曾子、子思、孟子は企及すべからず。漢唐の間、其任に當らむと欲するの徒、又曾子孟子に於いて、日を同しうして之を談ずべからず。宋に及びて、周、程、張、邵、相繼ぎて起り、聖人の學、此に至りて大に變じ、學者陽儒にして陰異端、道統の傳、宋に至りて泯滅せり。況んや陸王の徒をや、算するに足らざるなり。唯朱元晦、大に聖經に功ありしも、然も餘流を超出することを得ず。噫道の人に托して世に行はる、皆、天に在り。其孰か强いて之に與らむや。夫子沒して後、儒學宋に至るまで三變せり。戰國の法家、縱橫家、漢唐の文學訓詁、專門名家宋の理學なり。』(山鹿語類)と。かくて氏は宋明漢唐の諸儒を超乘して、孔子の門牆に迫り、堂奧に上り、直に其學の眞義を得むことを勉めたり。尙氏

が學風に關しては、氏は自ら其著、配所殘筆に詳に記述せり。

(三)　性情說

氏は、宋明新學の根本的謬見は、其妄りに本性の善を信じて、說を立つるにありとなし其說を打破して、自ら別に性情の說を立つるに至れり。氏は思へらく、性を說くには、常に氣質の上より論せざるべからずと。曰く、『聖人、天命氣質の性を分たず。若し相分たば、則ち天人理氣竟に間隔す。此性や、理氣交感の間に生ず。天地人物皆然る也。氣質を措きて性を論ずる者は、學者の差謬なり。細は則ち細なりと雖も、而も聖學に益なし。』(聖教要錄)と、又曰く、『理氣の外、一箇の性ありて、這裡に入り來るにあらず。』(語類卷四十二)と。如此氏は、すべて從來の性說たる本然氣質の兩分說を否定し、氣質を離れて性を論ずるは、學者の差謬なりと論斷せり。

然らば氏が所謂性說は如何。氏は性を說くに本然氣質といはずして、性はすべて氣質の性をいふべしと考へたり。而して氏は、總していへば心といひ、分ちていへは其心の感通知識するより、之を性といひ、其心の發動し來るより、之を情といへり。故に氏が其

性といひ、其情といふもの、彼宋明儒が性情の說と、全然同しからずといふべし。曰く、『心は性情を具ふる謂也。這箇の性、此心より感通知識し、這箇の情、此心より發動し來る。故に其形而上は、是れ性也。其形而下は、是れ情也。心は性情の舍、其象を指せば則ち心臟といふ。』(全上卷四十二)と。蓋し氏が所謂性に、感通知識の作用ありとは、精神上感覺知覺の本能あるを指していひ、其所謂情に、發動の作用ありとは、心に感じて之を行爲に發動すべき本能あるを指していふものならむか。換言すれば、其所謂性とは、心の知的部分を指し、其情とは、心の情的部分と意的部分とを兼ねて之をいふものゝ如し。合せて之をいへば、心といふ。以下其意を分折して、之を叙述すべし。蓋し氏が性情說は、氏が學說の根底をなせるものなり。

(一)性は感通知識するのみ。　氏は、性を說きて、初めより其善惡を立てず。又善惡の素質を備ふるものとも言はざる也。只性は感通知識する本能ありといふのみ。而して其感通知識すといふ所以のものも、又未だ初めより倫理的に感通知識すともいはざる也。只だ吾人の感覺に觸接して、聲色臭味を辨ずるのみ。其道德的社會に向つて其正邪善惡を感通知識するが如きは、幾多の修養經驗の結果、本來の性は、此に其形をかへて、

始めて倫理的性（知識をいふ。）を形成するに至る。故に彼復性復初の説の如きは、無稽怪誕の妄説にして一も取るに足らざるなりといへり。されば彼の幼兒の性の如きは、其感通知識する所、極めて不完全にして、父兄を知ることなく、情欲を分つことなし、是れ修養經驗の結果にあらざれば、倫理的に發動すること能はざるを證すべしと論じ、世の良心論者直覺論者の妄を説破せり。曰く、『性は、氣質によりて其差あり。其證は、幼長の際にあり。幼穉の時、氣質未だ全からず、柔弱幽微なり。其性も亦全からずして、情の發する所甚だ寡し。若し幼兒の性質を以つて全しとなし、天命の性となさむか。天命の性は、甚だ昏く、甚だ不通底なり。彼の幼兒は、感通知識に渉ければ、父兄を知るとなく、情欲を分つことなく、只飲食笑語、睡啼嬉戲するのみ。是等を以つて天命の性といはゝ、天命の性は、更に善を以ていふべからず、明を以ていふべからず。幼兒の外誘の私、寡きは、氣質未だ全からざればなり。其性も亦然り。故に情の發する所甚だ全からざるなり。長成に及びては、氣質日に備る。其性も亦然り。欲情の發すること、始めて全し。是れ氣質によりて、性を論ずべき也。凡そ形氣ある類、皆かくの如し。各、氣質によりて、其性ありて來る。形氣によらずんば、則ち性のいふべきなし。人、赤兒幼兒を以つて、混全の質となし、天命の性、全しとなすも、若し長成して幼兒の行をなさば、這箇愚昧不肖の童蒙也。是れ感通知識を失却し、事物禮容を遺忘せしめば、竟に人倫をして禽獸たらしむる敎也。』（全上卷四十二）と。要は氏の考によれば、性は善惡を以つていふべからず、又決して先天的に普遍的に稟受せるものにもあらず。人の始めて生るゝや、性は只感通知識すべき素質あるのみとなせり。故に氏は修德上、生有道念説を信ぜず、反省愼獨復性復初の説の無稽妄誕を排して、却りて大に他律的敎權を重んじて經驗し、經驗によりて得來りし性に向つて反省し、以て知行の合一を希圖せり。

（三）情は德行の根底。　從來儒家の考によれば、性を以つて先天的に普遍的に善なるものとし、情を以つて、後天的氣質によりてあらはれ來り、性の障碍をなす所の罪惡の素因なりとなせりしが如し。其結果、性を絶對的に尊重し、情を無下に排斥したりけり。然るに氏は、全然之が反對の地に立ち、性は感通知識するのみ、情は以つて道德の根底なりと喝破するに至れり。當時固陋なる官學派（幕府の敎育主義を奉する者）が、此説を聞くに及びては、誰か愕然として瞠目せざらむや。

前にも述べたるが如く、氏は、性を以つて單に感通知識するのみとしければ、未だ之を

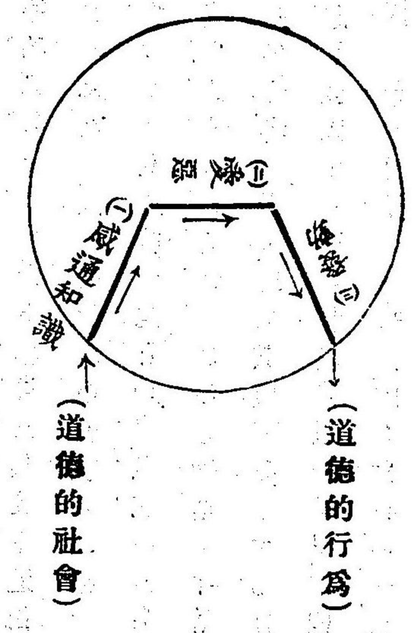
以つて道德上、善惡をいふべからざるは勿論なり。其之を道德上の善惡といふは、全く情の愛惡を感じて、發動作用を起し、其行爲にあらはれて節に中ると不中との結果にありと故に曰く、『人の情は、其發動は、只、好惡をして節に中らしむ。之を仁義といふ。』（全上卷三十七）と。故に此愛惡し發動せる行爲の結果が、やがて善惡の對象なりと論じて曰く、『性は生々無息、感通知識するのみ、更に善惡を以つていふべからず。善惡の名は發見の迹によりて見るべし。』（全上卷四十二）と。

されば氏は、情を以つて道德の根底と考へ、盛に情の修養を唱道せり。曰く、『仁義は、人心の愛惡にして、節に中りて其條理を得たる名、聖人道によりて教を立て、這箇の名分を設けて來る也。性は仁義を具ふといふべからずして、其感應する所、乃ち是れ性の虛靈感知也。愛惡の情發する所、是れ人生已むを得ざる情なり。其仁義を論ずるに至りては、專ら其情を修得するに在り。性豈之を固有せむや。』（全上卷三十七）と。由是觀之、氏は、當時の學者が、正心誠意を說き、其結果、道德的善惡を判斷するに、或は行爲の如何に就いては、之を等閑に付せしやの觀ありに對して、根本的に立脚地を異にして、之が非を說くに至れり。是を以つて從來の學者が、善惡の判斷を全然動機に求めて、其結果の如

きは敢て留意せざりしに對して、氏は明に結果論を採りしなり。

（三）性情の平等發展。　氏が性情說の大要は如上、即ち性は感通知識する本能を指し、情は愛惡し發動する能力を指していへる也。而して此二ツのものを合して心といふ。性と情とは、心の能力の兩方面をいへるなり。而して性は內に感通し知識するより、氏は之を形而上なりといひ、情は外に向つて愛惡し發動するの作用なるより、氏は之を形而下なりといへり。要は性と情とは心の內部的作用と外部的作用とに外ならず。而して人生れて幾多道德的修養をつみたる結果は、其性や、道德的に感通知識し、其情や、道德的に愛惡し發動するに至る。故に氏は、經驗修養の功果を深く信じて、性情の平等的發展を希望して已まざりき。其道統の說といひ、其格物致知自省の工夫といひ、皆性情の平等的擴充の修養を說くにあらざるはなし。性情を平等に發展して、始めて其知は行と相一致すべきものと考へたり。即ち其感通知識する所の性は、修養の結果、道德的に感通知識し、其愛惡し發動する所の情は、修養の結果、道德的に愛惡發動するに至る。於此乎其性と情とは一致す。性情の一致は、即ち知行の一致といふべし。今、氏が意を推して、性情相關の圖表を示せば、如次圖。

(イ)性情相關之圖



(ロ)性情發展之圖

心
- 性(知)感通知識(修養)道德的知識
- 情(情及び意)
  - 愛惡(修養)道德的感情
  - 發動(修養)道德的意志

知行合一

(四) 性情の修養

氏は、道德の目的は、公利(義の實)にありて、其心にあるをば、條理(義の形式)といふとひへり、而して其理を究め、其性情を修養する工夫として、三つの方法に依れり。即ち(一)聖人道統を標的とすること、(二)格物致知の工夫、(三)自省の工夫、と是也。今、其意義を說かむ。

(一)聖人道統を標的とする事。氏は本然の性を排し、道德の主觀的考察を斥け、偏に聖人道統の說をなし、他律的敎權を要して、道德の客觀的考察を唱道したりき。且ツ思へらく、人は幼穉の際、其感通知識する所極めて薄くして、其是非善惡の分別なきのみならず、他に又氣稟形體に附屬して五官四肢の情欲あるが故に、道は我心にありなど說きて、徒に其性に從はむとならば、多くは盜跖の言行に到らむといひ、專ら外部的なる他律的なる聖人及び道統をもて標的となし、之に準據して情欲を制節し、兼ねては又內心性情の修養を勉め、此に健全なる道德的性情を形成するに至るべしと考へたり。其氣稟形體の情欲を說きて曰く、『人、道、氣稟形體あれば、則ち情欲あり。四肢の動靜に於ける、耳目の視聽に於ける、喜怒哀樂の內に感ずる、飲食男女の外に牽ける、皆情欲の自然。』(語類卷三十三)と。かくて情欲は、過溢して足るを知らざるものにて、不合理的行

爲の原因をなすものなれば、其之を制節せざるべからざる所以を述べて曰く、『情欲は、必らず過溢して足るを知らず。聖人、教を立てゝ之を制節す、』(全上)と。其制節といふ所以のものは、情欲は人の自然的生理作用より起り來り、此肉體のあらむ限り、到底全然之を滅却すべきものにあらざるを知れば也。故に曰く、『先儒、無欲を以つて之を論す。夫は差謬の甚しきもの也。』(全上)と。

凡そ性情は、本來道德を生有せるものにあらず。故に氏の考によれば、人は、其內心を以つて標準となすこと極めて危險にして、又無意味の事に屬せり。故に外部的なる他律的なる聖人道統をもて標準とせざるべからざる所以を說きて曰く、『學の標的は、意見を以つて準據すべからずして、道統聖人を以つて標的となす。且ツ人、天地を以つて父母となせば、理に厚くして、感通知識悉く天地の妙用に應ず。己が性を以つて標的となさずして、聖人の道を以つて學的となすにあり。人々所賦の性は、氣習によりて太だ異れり。若し其性を以つて準據となし來らば、多くは盜跖の言行に到らむか。詳に其標的を究むべし。』(全上卷四十二)と。而して其所謂聖人の道とは、形式よりいはゝ條理にして、目的より見れば公利にありと考へたりし也。而して聖人が此教たる、『情を矯めて假作せるにあらずして、唯人の義(形式よりいへば、條理、目的よりいへば、公利。)に安喻するに因れり』(全上卷三十三)と。

(二)格物致知を主張す。　氏は性情修養法として、格物致知及び自省を說けり。格物致知以つて其性を開發し、自省以つて其情の發動を愼むるに在り。

氏は、格物致知の義を說きて曰く、『人心、少しも物に應接せざるなし。語默動靜、行住座臥、視聽言動、皆是れ物なり。身の接する所に及びては、君臣父子、夫婦兄弟朋友も亦物なり。身の養保する所に及びては、衣服飲食、居宅用具も亦物なり。此身、既に物なり。能く此物に至れば、即ち此身の性心情意に通せざるなし。性心情意其知を致さば、則ち其作用動靜竟に貫通す。故に其性心知識の修養、皆格物致知より出て來る。是れ誠意正心は、格物致知に繫る所以也。』(全上)と。かくの如く語默動靜、行住座臥、視聽言動より、君臣父子、夫婦長幼朋友、衣服飲食、居宅用具、等に至るまで、一切之を物なりといへり。而して其物の條理のある所に至り、(氏は、格は至るなりと解せり。)此に其知を開き致すべきをいへり。夫れ我が身、已に物なり。故に何の時、何の處、其條理を究むる工夫、間斷あることなし。かく間斷なく經驗を重ねて、究理の工夫をつみ、此に其性(感通、知識)を開發して、道德的性を作り出すに至りぬべしと考へたり。氏曰く、『格物致知なくして、裏面一箇の光明底あらば、妖怪影

彩の照々たるなり。』（全上卷四十一）と。是れ經驗を離れて、道念の生有を說くものを、明に否定せるもの也。

（三）自省を要す。已に格物致知の工夫によりて、物の條理を究め得て、以つて其性を開發し、又更に自省を說く所以のものは、自省はこれ情（愛惡發動）の修養に屬せるなり。其性に得、情に發するに及びて、始めて此に善惡の結果を生ず。故に萬般の行爲に對して、宜しく其修養せられたる性の、感通知識に照して以つて之を自省し、其動機の條理に合するや、其行爲の公利に戾らざるやを戒愼せざるべからずと考へたり。吾人は、間斷なく物に接せり。故に其情（氏の所謂性情といふ）の發動も、亦時に已むことなし。然らば則ち格物致知の工夫の間斷なきと同じく、自省の工夫も亦間斷あるべからず。其自省の說に曰く、『人々氣を平にし慮を靜にし、須らく以つて自省すべし。入りては父母に事へ、夫婦に別あり、子孫に慈あり。出でゝは君師に事へ、朋友に接し、奴僕を御す。一日も未だ嘗て此用なくんばあらず。飲食の節、衣服の制、動靜周旋の間、何の處か我其道を得むや。唯々情欲に從ひ、見聞に習ふのみ。人皆曰く、吾を知らずと。如し或は已をしるものありて、一官を得、一職を掌らしむるも、亦其事正しからずして、其判中らずば、則ち素飡のみ。我何

を以つて之に處せむや。自省如此して、能く吾の人に及ばず古に如かざるをしる。』（全上卷三十四）と。

如此氏は、格物致知の工夫によりて、事物萬般の上に就いて其條理を究め、以つて其性を開發し、此に道德的に感通知識せる道德的性を作り出し、又他の一方に於いては、情の萬般の事物に對して發動し來るものを、自省の工夫に正し、其心をして條理を得しめ、其行をして公利に合せしめんことを欲せり。已に道統聖人をもて準的となし、今は之に加ふるに格物致知及び自省の工夫を以てす。彼此相依り、相正して、己を內外より責め、矯惡爲善、矯惰爲勤、方に是れ功を積むこと久しくして、終に勉めずして中るに至る。於此乎心行一致し、心條理に適ひ、行公利に合す。所謂これ聖人なりといふべしと考へたりしなり。

（五）德及び才

氏は、德才を併稱せり。氏は思へらく、德とは內面的修得にして、才とは外面的發用なりと。正心誠意修身の條理を身に得たるは、德なり。齊家治國平天下の公利を外に施したる

るは、才なり。才德兼備之を全德といひ、其人を稱して聖人とはいへり。

德(內面的)正心正意修身
才(外面的)齊家治國平天下　全德(兼內外)＝聖人

氏は、德の正邪廣狹の差によりて、大德、小德、吉德、凶德などいひ、更に聖人の全德を形容しては、天德、至德、明德、峻德などいへり。而して聖人の全德は、才德兼備の名なることを述べて曰く、『聖人の德、必らず才をかぬ。德、中に得るありて、才、よく用にあらはる。修身正心は、德に屬し、天下國家の均齊は、才に屬す。故に夫子は、太伯を稱するに至德を以つてし、周公を稱するに才美を以つてす。是れ大學は、唯德といはずして明德と稱せり。明德を明にするは、內は修身、外は齊家治國平天下、聖人の全德、一箇を闕くへからず。中庸の所謂天下の至聖は、能く聰明叡知以つて臨むに足り、寬容溫柔以つて容るゝあるに足り、發彊剛毅以つて執るあるに足り、齊莊中正以つて敬あるに足り、文理密察以つて別あるに足ると是なり。蓋し聖人の德、包蓄せざるなし。若し一の不足あれば、則ち以つて聖といふに足らざるなり。今人德をいふも、多くは數般の才用を闕き、一箇の默靜底、言、必らず忠信、行、必らず果なるものをあげて德となす。豈聖人の德に比せむや。』(語類卷

三十六)と、又曰く、『聖人は、知至りて心正しく、天地の間、通せざるなし。其行や、篤くして條理あり。其應接や、從容禮に中る。其治國平天下や、事物各其處を得たり。別に聖人の形といふべきなく、聖人の道見るべきなし。唯日用の間、知、至りて禮、修り、過不及の差なし。』(全上卷三十三)と。其德と才との干係を知るべし。而して氏が己に德を稱し、又更に才を說くに至りしを見れば、其主義の如何に社會的にして、又如何に功利的なりしかを想ふべし。或人、氏に對して、聖人とは生知安行かと問ひしに、氏は全然之を否定して、斷して格物致知自省の結果なりと答へたり。氏が如き非生有道念論者にありては、必然の推論に屬せり。

(六)　士道論

氏が道德の理論的方面の說明は、概ね如上。然るに實踐的方面に於いては、風俗習慣民性等の差異あるにより、國を異にすれば、亦其踐履の方法も自然に異らざるを得ずと考へたれば、其國々々に於いては、宜しく其風俗習慣民性を重んずべく、其俗、殆んと異俗を用ふることを許さずと論斷せり。是を以つて氏は、先つ我が國體の尊嚴なる由來

を說きて曰く、『本朝者、天照太神の御苗裔として、神代より今日まで、其正統一代も違候事無之。藤原氏輔佐の臣まで、世々不斷して攝錄の臣相續候事、亂臣賊子の不義不道成事無之候故也。是れ仁義の正德、甚た厚成故にあらずや。次に神代より人皇十七代迄は、悉く聖德の人君相續あり、賢聖の臣輔佐奉りて、天地の道を立て、朝廷の政、國郡の制を定め、四民の作法、日用衣食家宅冠婚喪祭の禮に至るまで、各〻其中庸を得て、民安く國平に、萬代の規模立ちて、上下の道明になりしは、是れ聰明聖知の大德に達せるにあらずや。況んや武勇の道を以つていはば、三韓を平けて、本朝へ貢物をあげ、高麗を攻めて其主城を落し入れ、日本の府を異朝に設けて、武威を四海にかゞやかす事、上代より近代まで然り。本朝武勇、異國までも恐入り候へ共、終に外國より本朝を攻め取り候事はさておき、一ヶ所も彼地へうばゝれたる事なし。されば武具馬具劍戟の制、兵法軍法戰略の品々、彼國の及ぶ所にあらず。是れ武勇の四海にまされるにあらずや。然れば知仁勇の三は、聖人の三德也。此三德、一つもかけては聖人の道にあらず。今、此三德を以つて本朝と異朝とを、一々其印を立て、校量し來るに、本朝はるかに勝れり。誠に正しく中國といふべき所、分明也。是更に私にいふにあらず、天下の公論也』（配所殘筆）といひ、

殊に皇祖皇宗の、武を以つて國を立てられ、武を以つて國民道德の基礎となし玉ひしかば、此に自然に士道てふものを形成するに至れるなりと考へ、氏は全力を傾けて、此士道の振興發揮に勉めたり。而して氏が一代の行歷に於ける、自主不屈尊道輕死の氣魄は、歷々として見るべし。氏が一代の行歷は、所謂士道の實現として、我が國武士の典型として、洵に尊崇に値するものあり。

氏は、士道を論述して一箇士道の經典を遺せり。抑も我が所謂武士道たるや、我が國の固有の道德にして、世界の風波を受けず、豐なる此孤島に發現せる國民的精神の、自然に此に之を胎したるものに外ならず。而して其道たるや、親は之を子に傳へ、子は之を孫に傳へ、其平生訓諭する所は、極めて簡單なる敎誡にして、唯『無禮不義をなす勿れ。』といひ、『潔く君の馬前に死ね。』といひ、『祖先の名を立てよ。』といふ類に過ぎざるなり。而して其子たり孫たるものは、絕對的に之を服膺し、自然の積習、遂に此に一種の信念として、早や牢として拔くべからざるに至る。氏は、天下太平、風俗漸く淫靡に傾かむとする時に當りて、慧眼早くも斯道を振作して、民心を興起せんとを欲し、此に

氏は之を秩序的組織的に之を詳論し、一箇士道の經典を作り出すに至れり。大綱を分ちて六となし、更に之を目に分てり。六綱とは何ぞ。第一立本、第二明心術、第三練德全才、第四自省、第五詳威儀、第六愼日用、と是也。今簡單に其要を撮記すべし。

第一立本。此綱分ち說く所。(一)知己職分。(二)志於道、(三)在勤行其所志、との三項とす。

(一)知己職分。氏は思へらく、萬物は其分に應じて天職あり、人にありては殊に然りとなすと。而して其士たるものゝ職分とは何ぞ。曰く、『凡そ士の職といふは、其身を顧み、主人を得て奉公の忠を盡し、朋友に交りて信を厚くし、身の獨を愼みて、義を專にするにあり。(中略)士は、農工商をさしおき、此道を專らとして、三民の間、苟も人倫を亂さん輩をば、速に罰して以つて天下に天倫の正しきを待つ。是れ士に、文武の德知不備ばあるべからず。されば外には劍戟弓馬の用をたらしめ、內には君臣父子夫婦兄弟朋友の道をつとめ、文道心に足り、武備外に調ひて、三民自ら是を師とし、是を尊びて、其敎に從ひ、其本末をしるに足れり。於此士道立ちて、衣食居をつくなひ、以つて心安かるべし。主君の恩、父母の恵、しばらく報ずるに足りぬべし。』(語類卷二十一、以下同)と。

(二)志於道。道に志すとは、聖人の大道に志して、之を究明するをいふ。氏曰く、『人既に我職分を究明するに及びて、其職分をつとむるに道なくばあらず。』といひ起し、世の先輩を師とし、聖人の立言を師とし、格物致知自省の工夫を凝し、以つて其道を自得すべしといひ、彼私意私見を立てゝ、自ら以つて道を得たりとなす者に對して、『道、此に塞りて、遂に大道に不可入也。』といへり。

(三)在勤行其所志。氏曰く、『職分をしり、其道を志すと云ふとも、勤めて其所志を行ふにあらずしては、言計りにして其實あらざる也。行ふといふとも、一生之を勤めて死して後に已むにあらざれば、中道にして廢し、道の可遂所なし。故に勤行を以つて、士の勇とする也。』といひ、勤行が一生の大責務たる所以を論じ、更に、『殊に利害の間、色欲の妄動、名根の所萠、因循すること久しきを以て、更に間斷する所なく、其意、妄に先んず。於此我に大力量あらずしては、必ず引落されて、其誠を盡すこと叶ふべからず。我に大力量を出さしむるは、志の淺深による也。』といひ、又更に、『其志確立不拔にして、始めて士の本立つ。』といへり。

第二明心術。此綱分ち說く所は、(一)養氣存心、(二)度量、(三)志氣、(四)溫籍、(五)風

度。(六)辨義利、(七)安命、(八)清廉、(九)正直、(十)剛操、の十項となす。

(二)養氣存心。　氏は思へらく、心は常に氣に因れり。而して天資の氣には、過不及あるものなれば、其過ぎたるを損し、其不及を育てゝ、事物の間、動靜宜しきに合ふ樣せざるべからずと。然らば何を以つて之を養ふか。曰く、『常に道義を以つて是を養ひて、氣の不讓が如くならしむるに在り。』と、又曰く、『此氣を育ひ得る時は、至大至剛にして、能く萬物の上に伸びて、物に所屈あるべからず。心は氣によるが故に、氣能く靜なる時は、心則ち靜也。氣動する時は、心此に動す。是れ心氣兩樣ならざるを以つて、更に隔たる所なければなり。心は內にして、氣は外に動ずるものなれば、先づ氣を養ひ得るを、修身存心の本とすべし。』といひ、養氣をもて存心の本とし、氣を養ひて然る後心を存することを得べしと考へたり。

(三)度量。　士たる者は、天下の大任を受けて、其職分を果さゝるべからざるものなれば、度量空濶、胸中に天下の萬事を容れて自由ならしむべしといひ、其要を述べて曰く、『天下に中して立ち、四海の民を定むとも、是を以つて誇らず。大事を一胸襟に定め、大節を萬民の上に施せども、是を以て大なりとせず。如此に氣の力量を養ひ得ずば、物々に

狹まり困みて、浩然の大なるを得べからざるなり』といひ、又『文武の大用は、度量の間に可存也』ともいへり。

(三)志氣。　志氣とは、氏は、『大丈夫の所志の氣節をいふ。』といひ、氣節を高尙にせざれば、小事に屈して大事不成と考へたり。而して氏は、許由か耳を潁川の流に洗ひ、范蠡が、五湖に浮ひ、莊周が精神、嚴子陵が氣象をあげて、『利害に於いて、聊かも志を止めず、天下の大器と雖も、我が自適する所に易ふべからずと、氣節を立つる所、誠に大丈夫の氣象といふべし。』といひ、更に『但、聖人の道より至らずして、一向其氣象の高尙を尊ぶ時は、異端の虛無空寂を貴び、世間を以つて塵芥となし、天下を以つて糠粃と思ひて、唯、自適するを可なりとする故に、格致する事を詳ならしむべきなり。』といへり。

(四)温藉。　氏は思へらく、度量寬に、氣節立てば、自然に温藉の處ありと。温藉とは、內に德をふくみ光をつゝみて、外に圭角あらはれず、含蓄包容の意あるをいふなり。曰く、『度量氣象よく萬物の上に卓爾たるが故に、さらに功を立て名に誇る處あらず、而して更に忿勵の氣あらずして、温和自發、顏色仁人君子の姿あらはれ、物に交り人に友ふ時は、陽春のうらゝかにして、能く物を利するが如くなるべし。』と。

(五)風度。士の一向に剛操を立てゝは、卑しかるべき也。故に風度の世俗にあらず、明珠の傍にありて、自然に人を照すが如き風情なかる可らず。曰く、『大丈夫婉にやさしく膩たけたらんは、柔弱に溺れて風度といふにはあらず。少しも拙く卑しき質あらず、水精の瓶に秋水をたくはへ、白玉の盃に氷をのせたらむ如く、聊もかくれたる處なき風情是を大丈夫の風度といふべし。』と。

(六)辨義利。義利を辨別するは、人道の眼目にして、君子小人の差別、王道覇者の異論、すべて此間より起るものなりと考へ、語類中にも、各所に反復陳論せり。氏が所謂義利の辨は、公利と私利との間にあり。偕樂と獨樂との間にあり。氏の言に曰く、『君子の利は、格致の盡さゞるなきが故に、其利遠くして大也。小人の利は、格致せず至らざるなきが故に、其利近くして小なり。遠くして大なるものは義、近くして小なるものは利。義は、よく物を利し人を利す。利は、唯身に便にし獨を利する也。』(語類卷三十三)と。又之を內面より說きて曰く、『內に省て有所羞畏處、事而後慊、是を義といふべし。內縱欲而外從其安逸、是を利といふべし。』(語類卷二十一、以下同)といへり。義利の辨かくの如く夫れ明なり。然れども人には、常に惑の心其間に攙入して、輕重を能く辨ずることなし。輕重とは何ぞや。氏曰く、『君父兄師夫は、我が爲めに重く、臣子弟幼婦は、我が爲めに輕し。天下國家は、身よりも重く、視聽言動は、心より輕し。此輕重を詳に究理する時は、惑此に止むべし。其故は生死の場、此一刹那にありといふ時、君の爲め又人の爲め、其外重きものゝ爲めに害あらむに於ては、速に死して顧みるべからず。我が重きものゝ爲めに害なきに於いては、能く保ち能く養ひて、命を全くするに在りぬべし。利害勞逸、各然り。萬事においてかくの如く事物の理を究むれば、則ち義理の行長して、利害による所、則ち消滅す。』と。蓋し義利の辨は、氏が道德上の眼目にして、又武士道上に於いて骨髓をなせるものといふべし。道德上に於ける一切の正邪善惡の問題は、皆義利を準的として判別せらるべし。

(七)安命。命とは、天定の自然なり。人に於ける死生禍福、貴賤貧富の境、是也。士たるものは常に其逢ふ所の境に安んじ、決して妄動し、妄作すべからず。是れ甚だ愼むべきの處なりといへり。曰く、『人の所苦は、死亡禍難、貧賤孤獨也。人の樂しむ所は、其うら也。苦しむ時は、之が爲めに心安からず。樂しむ時は、之れが爲めに又心變す。故に憂苦に當りて、其志す所變し、心此に存せざるは、尋常の情也。大丈夫此時に於いて心を存する、是れ

富貴貧賤に不移謂也。易に曰く、澤無水困也。君子以致命遂志と、又曰く、山上有水蹇也。君子以反身修德といへる、是れ困究の時に當り、艱難の事に遇ひて、君子安命の心得也。』と。

(八)清廉。清廉とは、利害禍福の外に超然卓立して惑はざるをいふ。曰く、『內清廉を守らざれば、公に仕へ父兄に從ひて、利害此に崩し、天性の心を放失すべし。清廉といふは、外の賄賂、內の財貨、更に心に付せずして、世人の行ひがたき所に卓爾と立ちて、更に不屈、是也。(中略)さしも萬鍾の祿を辭する計り高尙なる行跡ある人も、一紙半錢の事に至りて、僅なる所に、內に驚吝の情生ずるは、清廉の心薄くして、鄙吝の情此に生ずれば也。』と。

(九)正直。正直とは、『其義のある所を守りて、更に變せざるの謂也。』といひ、更に進んで說きて曰く、『松到天而不屈、蘭無人而亦香、と是れ則ち大丈夫正直の立所といふべし。直方正大は、易の重んずる言なれば、君父に事へて世に立つことは、夙夜唯た正大直方を本とし、世俗の名譽に拘はらず、仁義にあらずしては、君前に陳せず、大節に臨みて、凜然として四海に跨る。是れ正直の心を存ずる所以也。』と。

(十)剛操。人剛操の志あらざれば、其志常に福禍利害の境に惑ひ、生死の大事をたがへ、大節に臨みて約を變ずるに至るべし。於此剛操の志を養ふ說あり。曰く、『剛とは、よく剛毅にして物に屈せざるをいひ、操とは、我が義とする志を守りて、聊かも變せざるの心也。大丈夫此心を存せざれば、我が好惡する所に於いて、必ず屈しやすく、義を守る所、確ならざる也。故に剛操を以つて、信を立て義を堅くするの行とする也。清廉正直も剛操を以つてせざれば立たざるなり。況んや士たるの道、常に剛毅を以つて質となし、其所守を變せざるを以つて行とすべきをや。人、誰か、生死利害好惡あらざらむや。內に剛操を以つて究理するが故に、死の至りて惡むべきをも猶安んじて死に就き、害の至りて避くべきをも、猶安んじて害をうけ、財寶酒色の必ず好むべきをも、猶安んじて之を避くるに至るは、剛毅節操を高く守るにあらざれば、誰か此行をなさむや。』といへり。

第三　棟德全才。此綱分ち說く所、(一)勵忠孝、(二)據仁義、(三)詳事物、(四)博學文、との四項とす。

(一)勵忠孝。出でゝは、君に仕へ朝廷に交り、入りては、父兄に事へ家を齊ふは、士の任

也。鞠躬、身を盡し、其誠を致し、一朝事變にあひては、百年の壽を一刄の下に棄てゝ顧みざるは、君に盡す道也。色養永慕、定省惰らず、死を致して顧みざるは、親に盡す道也。是れ人倫の大綱なり。氏は、忠孝の二大道を述べて曰く、『君父は、人倫の大綱にして、我がつかふる處。誠を盡さずば、君臣父子の道、明ならざるなり。誠を盡さんとならば、德を練らずば、其實、必らず薄くして、或は害に當りて變し、死に臨みて變す。凡ての事、大節に臨み、大變に逢ひ、大事を決するに至らずば、其德發見すること有らざるなり。世間平生底と雖も、德を本にして其事に處する輩は、其根ざし、かはれり。然れども事々足らざれば、其效あらはれず。非常の變こゝに來りて、臣として子として、明白に其誠を盡さむことは、德、以つて正しからずしては叶ふべからざる事也。』と。

(二)據仁義。人心の德、總じて之をいへば、仁義の二に出でざるなりといへり。而して仁義とは何ぞや。曰く、『仁は、天地生々の心にして、惻隱の情、發し節に中れるものにて、愛の用也。義は、事に處して羞惡の情あり、內に恥づる所あるを推して節に中れるの名なり。然れば仁の心あらざれば、寬容大度のかたちあらはれずして、其好惡に陷溺す。是れ仁を以て、聖人の源とする所以なり。義の心あらざれば、物に處するに節あらざるを

以て、裁斷果敢する事なし。仁をつとむる時は、禮此に立ち、義をつとむれば、智此に明也。是れ仁義は、禮智の源也。』といひ、士は卓爾として心を此に致さゝるべからざるを說けり。

(三)詳事物。事物の理を詳にすとは、是れ宇宙萬有の條理を明にするを說けるなり。曰く、『德をねり仁義によると雖も、事物の品々にして、天文のあらはれ、地理の形することと、二氣妙合の間より變じて千差萬別たる處を盡さゝれば、事に處する道不自由にして、其才能三才に通せざる也。君父に事へ、自ら修るの間、皆如此。大丈夫、一世の民を救ひ、功を萬代に立て、天地の德を輔け、聖人の誠を盡す處、唯此德を立て才を全くするにあるべし。』といへり。

(四)博學文。行ひて餘力あれば、必らず文書によりて其才識を廣めざるべからざるを說けり。曰く、『古今の人物、甚だかはり、異域本朝のことわざ、尤も異也。德天地にひとしきあり、才萬物に及ぶあり。其用舍は我にありて、其事跡は書にのこれり。故に廣く古今の書を閱して、事物の用を詳にすべし。』といへり。

第四自省。此綱に於いて說く所は、自戒の一項あるのみ。

自戒。自戒とは、自ら恐懼戒愼して、其氣質のおくれたる處を考へ、好惡の癖する所を計り、其行をして從容節に中らしむるを期するにあり。氏は思へらく、曾子の三省も、一の工夫也。仲由が聞過を喜ぶも、一の工夫也。後儒の家訓も、一の工夫也。要は是れ亦心術を修する也と、故に曰く、『凡そ天下の事、其なる處堅く、其起る處詳なりと雖も、改め正さず、省ること明ならざる時は、必ず弊ありて、之を賴む時は、失、乃ち生ず。是れ時を經て破るゝことあり、ついゆる事あり。故に其事物を致し初むるの節、詳に究理して、其事物を全かゝらしむと雖も、時を考へ節をつもりて、度々之を省み察して、其弊を改め、其時に合はざることを繕ひ變せしむるが如くに仕らずしては、終を全くすること不可有也。』と。

第五詳威儀。此綱分ち說く所は、(一)毋不敬、(二)愼視聽、(三)愼言語、(四)愼容貌之動、(五)節飲食之用、(六)明衣服之制、(七)嚴居宅之制、(八)詳器物之用、(九)總論禮用之威儀、との九項とす。

(一)毋不敬。敬せざること毋れとは何ぞ。氏曰く、『格致を明にし、天地の大德に比し、聖學の源流を正さむとならば、敬身せざる時は、何を以つてか其要を得べき。敬身の術、

先づ威儀の則を正しくするにありぬべし。』といひ起し、更に威儀の要を述べて曰く、『身に於ひて、視聽言動を非禮の爲めに感動せしめざる、是れ威儀の要といふべし。而して威儀は、如何して正すとならば、曲禮に曰く、毋不敬といふ此三字をよく工夫するに有りぬべし。凡そ禮は、其本、人心の止むを得ざるの處より出生して、事物の上に自然の節ありて、其文章嚴然として犯すべからず、斐然として章ある、是を禮と云ふ。身上の動靜、悉く禮を用ひたれば、一動一靜、一語一默、各禮節あるなり。禮節の本、毋不敬の三字にきはまれり。』と。

(二)愼視聽。威儀の要を詳にせむには、先づ視聽を愼むに在り。目は非禮の色を視すして、耳は非禮の聲を聽かざらむことを要す。然らば如何なるをか非禮といふべき。氏曰く、『事物見聞するの形、威儀を失ひて己が私にまかする、是を非禮と云へり。彼、邪色を視、邪聲をきくのみ、非禮といふに非らず。邪色邪聲は、外より來るもの、我之を欲せずと雖も、不得已して見聞せば、之を視聽せりといふべからず。色聲は、非禮の色聲にあらずと雖も、見聞するに威儀を失ひて、唯ゞ情欲に任さば、是れ非禮の視聽也。故に君父の臣子をみる、臣子の君父を見ること、物によりて各、視るの禮あり。君父は臣子の言をきき、

臣子としては君父の命をきくすべて聲の聽くべきは、各聽くの禮あり。一つも禮にたがへば、是れ非禮なり。』と、

(三)慎言語。思慮、内に妄動すれば、戯言となり、妄言となり、多言となり、僞言となり、過言となり、其威儀を失ふべし。故に言語の慎むべきことを說けり。曰く、『凡そ口を開きていふに易しと雖も、言ふに節を以つてせざるときは、多言饒舌にして更に益なし。行其所言を踐むこと能はざるを以て、多くは虛言食言に及ぶ、甚だ恥つべき也。故に言、必ず節ありといひて、此方よりいひ出さんには、時宜を詳に計り、其節を考へていふべし。』といひ、言、行を顧み、行、言を顧みて、始て言行一致し、威儀を失はざるに至るべしといへり。而して其言には、又朝廷の言あり、平生の言あり、喪祭の言あり、冠婚の言あり、賓客の言あり、軍旅の言あり、君臣父子兄弟朋友夫婦の言ありて、其時處位を詳にし、威儀を不失ことをも勉むべしといへり。

(四)慎容貌之動。容貌は、天命の性心を入るゝ所の器地なりといひ、内の思正しからざる時は、自然に外にあらはるゝものなれば、容貌を正さんには、先づ思ふ所を糾明すべき也といへり。而して其容貌は、時處位によりて一樣の方式ありとし朝廷の容あり、燕居の容あり、喪祭の容あり、冠婚の容あり、賓客の容あり、軍旅の容あり、或は拜容、或は坐容、或は跪容、或は立容、或は顏色辭氣の容、或は捧持の容などあれば、空しく戒慎して其威儀を詳にすべしといへり。

(五)節飲食之用。人は萬物の靈なるを以て、五行の養を得て天年を全くせざるべからず。是れ飲食を要する所以なりといひ、其要を述べ、更に其節を說きて曰く、『唯至りて饑渴せざるを以つて節とすべし。』といへり。

(六)明衣服之制。衣服は身を覆ひ、寒暑を節する所以にして、抑も亦知を以つて物を巧み、才を以つて其制を宜しくし、其禮容を正す所以のものなりといへり。而して衣服の制も、亦、時處位の差によりて、其制を異にし、或は爵祿の高下、或は五倫の次第によりて別あり。其他、燕居の服、朝廷の服、冠婚喪祭、賓客饗應、軍旅の服、其差別無かるべからず。是れ衣服の制を明にするは、威儀を正す所以なりと。

(七)嚴居宅之制。居宅は、飲食衣服と共に、人の生活上缺くべからざるものなり。而して他の飲食の用、衣服の制の具れるが如くに、亦居宅の制を嚴にせざるべからず。而して人には官位俸祿の高下、貧富の別、士農工商の品ありて一樣ならざれば、居宅又其分

限を守り、其制、大小無くばあらず。是れ亦威儀を正す所以なりといへり。

(八)詳器物之用。　家宅あれば、日用の器物、之に協ふ。而して器物に就いても、亦其分限を守らざるべからず。曰く、『貴賤をはかり、高下大小を極め、疎密をなし、表文に相じるしを出し、德を省み事をしらしむる物を表出すべし。唯々目を驚し、奢をなし、無用の費をいたして、其器物をかざる事を用ひず。』といへり。

(九)惣論禮用之威儀。　禮は、威儀のかゝる所也。曰く、『すべて禮は、人の本にして、人倫の交際、器物の制、皆禮を出でず。禮、此に違ふ時は、節、此に失す。節あらざれば動靜云爲、皆過不及に陷り、天理の宜に合ふべからず。古の聖人、禮を重んじて、品々の制法を立て、人の惡に陷らざるを戒とす。故に大丈夫の事物に於ける、毋不敬を以つて心にあてゝ、一生の品節を禮用に合せ、其究理を具にせば、初めて威儀の則たるべし。』と。

第六慎日用。　此綱分ち說く所、(一)惣論日用之事、(二)正一日之用、(三)辨財寶受與之節、(四)慎遊會之節の四項とす。

(一)惣論日用之事。　人の世に在るや、一動一靜、皆道を離るべからず。曰く、『身を顧るに、形に耳目鼻口、四支百體あり、其内に、性心情意血氣の差別あり、此一身の用に、行住坐臥、視聽言動の用あり。此身を奉ずるに、衣服居宅器用の物あり、飲食情欲の分ちあり。此身の相接する處に、君臣父子夫婦長幼朋友の交際あり。其間に、吉凶軍旅嘉賓の禮出で來る。是れ我身を顧みるに、悉く此事物を離るべからず。』といへり。

(二)正一日之用。　人壽たとひ百歲にのぼるも、今日一日の用を以て極となすべし。故に一日の用を正すことを勤むべしといひ、更に、『一分の間を忽にすれば、終に一日に到り、終には一生の懈怠ともなりぬべし。天地の生々、一分の間も止らず。人間の血氣、一分もつかふることなし。如此にして其天長地久を得、如此にして壽命の永昌をなす。德知の流行、如此にして聖人たり。』といへり。

(三)辨財用受與之節。　財は、用ありて始めて財たり。用は、財を以つて用をなす。然るに人の財寶に弱れて、義を失ふに至るあるは、悲しむべき事なり。曰く、『大夫丈の存する處は、唯義のみ。若し寶財を吝み、器物を玩ばゞ、則ち武義自ら闕如し、大節に臨みて、殆んど家を忘るべからず。家を思ふの切なる、義を棄てゝ死を遁れ、謗を指頭に受け、汚を父祖に及ぼす。人面獸心のこと、何の樂かこれ有らむや。』と。

更に受與の節を述べて、曰く『物輕重大小となく、其間、皆義ありて、或は與へ、或は受く。

故に與へ施すに道義を以つてせざれば、人喜ばず、士來らず。（中略）受くるの道、其義あれば、物の輕重に依らず、之を受くる可也。一義を闕き、一道を去れば、千鍾の祿、天下の重と雖も、受くべからず。其道を得ざれば、與へて感せず、受けて喜ばず。施すと受くるとの間、專ら愼むべき也。』と。

（四）愼遊會之節。　士は、明暗共に怠らずして、志を勵し、行を勤む、是れ其職也。而も此間、遊會の樂なかるべからず。されど飲酒制あり、游宴度あり、彼放鷹に、狩漁に、豈節を忘れて荒暴すべけむや。尤も可愼と。

以上は、氏が士道論の撮要なりとす。我が武士道を系統的に組織的に說明して餘蘊なしといふべし。氏が言論は、氏が實行と相俟ちて、一段の光彩ありといふべし。

（七）歸結

要するに氏は、儒學上に於ては、生有道念說を信ぜず、反省愼獨を主とせる靜寂主義なる宋明の新註學に反對して起り、社會を基礎として公衆の利用を說き、之を以つて倫理の終局目的なりといへり。殊に其士道說は、氏が本邦武士道の精神を詳述し、一經典を世に貽したるものといふべし。而して氏自身は、士道の權化として、常に處し變に應じて、冷靜沈毅、未だ曾て其心底を取り亂したりし事なし。其中、實に稜々たる氣節の、屈すべからざるものありしを想ふべし。氏は一朝災厄に逢ひ、門人四散し、爲めに其說を公然繼承せしものなしと雖も、其精神は長々に武人社會を支配せしものありしや疑なし。

第二章　伊藤仁齋（一六二七——一七〇五）

（一）傳記、——（二）學風、——（三）天道說、——（四）人道說、——（五）人性說、——（六）學問、——（七）知命、——（八）歸結、

（一）傳記

山鹿素行と其時を同しうし、又其步趨を並へて、歸然として特立し、彼程朱陽明の學風に抗して、所謂古義學を標榜せる堀河學派を樹立せしものあり。伊藤仁齋となす。而して仁齋は、始めより未だ嘗て素行とは相知らざりしものゝ如し。亦奇といふべし。されば

ど二氏をして此等の說を唱ふに至らしめしものは、新學は其長所あると共に短所亦從ひて暴露し、其弊又人をして厭はしむるものありしによれるなるべし。二氏が主張は、自然の趨勢に屬せり。

仁齋、名は維楨、字は源佐、仁齋又は古義堂と號し、古學先生と謚す。父名は長勝といひ、材木を鬻くをもて業とせり。氏は其長子なり。寛永四年、京都堀河の宅に生る。幼より深沈、兒戲を喜はず。十一歲、始めて師に就きて句讀を習ひしが、大學の治國平天下の章を讀むや、歎して曰く、『今世之をしるものありや。』と、意已に儒を以て一世に立たむ事を欲せり。既にして文辭を屬するに及ひて超凡、人をして驚嘆せしむるものありき。其學は、程朱を宗とし、性理大全、朱子語類、等の書に專ら心を傾け、其蘊を極むるに至れり。其心學原論、太極論、性善論、等は、皆此時代の作に係れり、皆宋說に本けり。

二十八九歲の頃、偶〻羸疾に罹り、首を俯して几に凭り、人事を謝絕して、足門庭を出てざる殆んと十年を及へり。性理を潛考し、又心を佛老に傾け、白骨觀法を修せり。而も或は信し、或は疑ひ、煩悶懊惱を極めたり。三十七八歲に至り、忽ち舊學を舍てゝ、毅然獨立し、門戸を開きて所謂古義學を唱道するに至れり。論孟古義、中庸發揮、等は、此頃の卿定に

係れり。當此時仁齋先生の名一世に高く、贄を委して敎を乞ふもの數を知らず、諸州の人國として至らざるなし、唯〻飛彈、壹岐、佐渡三州の人のみ、門に及ばざりしといふ。其盛、以つて想ふべし。

其母里村氏、性虛なり、膈噎を患ふ。氏、孝養至らざるなく、延きて三年に迨び、貧苦特に甚し。時に肥後侯言を卑うし禮を厚くし、祿千石を給して招きけるが、辭するに侍養、人無きを以つてし、敢て應せざりき。此年、母、卒に歿せり。其終焉に臨み、母、合掌禮をなし、孝養の篤きを謝せりと云ふ。其時、父なる人亦歿しければ、哀痛悲恨し、服喪前後通じて四年に及べり。除服の日よめりし歌に、

三年とて、定めしほどの限あれば、けふぬきすつる藤衣哉。

氏、寶永二年歿しぬ。年七十九。門人相會して洛西小倉山二尊院に埋り、私謚して古學先生といふ。氏五子あり、皆俊秀なり。其名に皆藏の字を付しければ、世呼びて伊藤の五藏といふ。即ち伯は源藏、二は重藏、三は正藏、四は平藏、季は才藏といふ。而して其伯季最もあらはれしかば、又伊藤の首尾藏と稱しあへり。伯原藏東涯、家をつぐ。

氏人となり寬厚和緩、人其疾言遽色を見たることなし。人に接して城府を設けず、邊幅

を修めず。又未だ嘗て古怪迂僻矯激の行をなして、以つて、驚異を取らず。又人の少長となく、之に接するに誠を以つてして厭怠の色なし。其道の爲めに許すこと甚だ重くして、之を誘ふに萬鍾の祿を以つてすと雖も、奪ふべからず。其肥後侯の豐祿を辭して、寒窶に甘んじたりしが如き、亦其性格を察するに足れり。

其家、極めて貧にして、歲暮糯米を買ふこと能はず。亦曠然として以つて意とせず。一日、妻、跪き進みて曰く、家道鞠育、妾未だ嘗て堪へずとせず。其忍ぶべからざるは、孺子原藏未だ貧の何物たるを解せざれば、人の家に餈あるを羨み、連に求めて已まざるに在り。妾、口よく譙責呵すと雖も、膓爲めに斷絶すと言ひ訖りて泣下る。氏几に隱り書を閱し、一言之が答をなさず。直に其着くる所の羽織をとり、以つて之に授けたりきと云。其他、濱井の擧を扶け、又劫賊を感化せしが如き類を見ても、平生其養ふ所のもの亦知るべきのみ。

當時一家言を唱道して、己始めて道を得たりとなすものにありては、其黨にあらざるものよりは、之を見るに寇讐の如し。然るに氏に對しては、其說を信せざりしものと雖も、亦推さゞる事能はず。太宰春臺の傲岸を以つてするも、漫筆中に、『伊仁齋は、豪傑の士也』といひ、又『予嘗て伊氏を見て之といふに、其貌を觀るに恭、其言を聽くに從、余故に以つて君子となす』と、又『仁齋に及ぶべからざるもの三あり。學、師傳に由らず、一也。仕へざる、二也。子東涯ある、三なり。物先生此に一あらず』といへり。祇園南海は、其送高生序に、『彼ノ至言要言を觀るに、聖賢を左右にし、以つて邪說に鞭箠し、奮然として麾を把りて世の爲めに先登する者、昭々乎として筆端にあらはる。人をして驚見せしむるは、猶景星卿雲の仰くべくして企つべからざるが如し。嗚呼是れ豈今之人ならむや、抑も古の所謂超然獨立の者か』といひ、祖徠も亦其德の高に服し、與都三近書中に、『熊澤の知、伊藤の行、之に加ふるに我學を以つてせば、東海始めて一の聖人を出さむ』といふに至れり。

其所著の書は、大抵經典の註釋にして、論語古義十卷、孟子古義七卷、大學定本一卷、中庸發揮一卷、語孟字義二卷、及び童子問、文集等あり。

(二)　學風

氏も亦、素行と同じく當時の學風に反激して起れる者也。自ら學問の家法を述べて曰

く、『儒者の學、最も闇昧を忌む。其道を論じ、經を解するに、須らく是れ明白端的なるべし。白日十字街頭に在りて、事をなすが如く、一毫、人を瞞することを得ずば、方に可なり。切に附會すべからず、牽會すべからず、假借すべからず、遷就すべからず、尤も回護して其短を掩ふことを嫌ふ。』(童子問)と。故に禪莊の理、宋儒理性の學を排斥して曰く、『其理、隱微にして知りがたく、其道、高妙にして行ひがたく、人事に遠り、風俗に戻る。之を人倫日用に推すに、皆用ふる所なし。豈之を天下の達道德といはむや。』(同上)と。而して論孟二書を推尊して、『孔孟の直指は、論孟二書にあらはるゝもの、炳々として丹青の如し。天下の理を包含して缺くるなく、百家の典を會萃して遺さず。此を出つるものは、旁徑なり、他岐也。』(同上)といひ、又曰く、『悉く注脚を棄去し、特に正文に就いて、熟讀詳味、優游佩服せば、則ち孔孟の本旨に於いて、猶ほ大寤の頓に寤むるが如く、自ら心目の間に瞭然たらむ。』(同上)といへり。而して特に論孟二書を稱して、宇宙第一の書なりといへり。其道を說くや、『人外、道なし。』(同上)といひ、社會を離れて道德を說くべからずとし、大に社會的實踐的に之を論及し、高尙なる理論を避けて、成るべく通俗的に之を說き去らむとせしものゝ如し。此等の主張は、又彼が素行が學問と事業との合一を說きし旨と

相同しと謂ふべし。

(三)　天道說

氏が倫理說は、天道說てふ純正哲學上の見解を基礎として組織せられたるものといふべし。故に其倫理說を知らむと欲せば、此に先づ其哲學說を知らざるべからず。氏は、宇宙の根原を斷定して一元氣なりといへり。而して所謂理とは、氣中の條理に過ぎず。故に彼の宋儒が理先氣後の說を唱へて、理を宇宙の根原なりと唱道したりし說に對して、氏は全然反對の位置に立てるものといふべし。其說に曰く、『蓋し天地は、一大匣なり。陰陽は、匣中の氣なり。萬物は、白醭蛙蟬なり。此氣や、從ひて生ずる所なく、亦從つて來る所なし。匣あれば即ち氣あり、匣なくんば即ち氣なし。故にしる、天地の間、只だ一元氣のみなるを。可見、理ありて後、斯に氣を生ずるにあらざるを。所謂理は、反りて是れ氣中の條理のみ。夫の萬物は、五行に本づき、五行は、陰陽に本づく。而して再び陰陽する所以の本を求むれば、則ち必らず之を理に歸せざる能はず。是れ常識の、必らず此に至りて意見を生ぜざる不能所なり。而して宋儒の、無極太極の論ある所以なり。』(孟子字義)

と。如此氏は、氣を主とし、理を以つて、氣と並立のものとせずして、只單に氣中の、條理と斷定し、氣主理客の說を主張せり。是れ明に氣を以つて宇宙の本躰とし、理を以つて氣の屬性となすに似たり。かくて氏は、世の唯理論者を目して、『是れ常識的判斷のみ』といひて之を斥けたり。

氏は、更に理を以つて、生々化々、萬化の樞紐、品彙の根底となすに足らざる所以を述べて、曰く、『問ふ、理の字、何故に生々化々の原たるに足らざるか。曰く、理は元と死字、物にありて物を宰すること能はず。生物にありては、生物の理あり。死物には、死物の理あり。人には則ち人の理あり。物には則ち物の理あり。然れども一元氣之が本たり。而して理は、則ち氣の後にあり。故に理は、萬化の樞紐たるに足らざる也。萬物は五行に本つき、五行は陰陽に本づく。再び推して陰陽の然る所以に至れば、則ち之を理に歸せざると能はず。既に理に歸せば、虛無に陷らざる能はず。所謂萬法一に歸し、一何處に歸するかと、是なり。此は常識の必らず此に至りて聖人と自ら相違はざるべからざる所以なり。唯聖人は、天地の一大活物にして、理字を以て之を盡す能はざるをしれり。』（童子問）と。如此氏は、飽くまで氣を以つて本躰となし、氣を以つて、『生ずる處なく、亦生せざる所なし。

萬古獨立、横樸破れず。』（同上）といひ、氣の獨立自存し、恒久不滅の躰たることを信じたりき。

氏が所謂宇宙の本躰たる氣即陰陽は、往來活動して息まず。是れ天地の一大活物たる所以なり。而して其往來活動するは、是れ即ち道なりといひ、說を立つるに至れり。氏は新學派の如く、之を解して理の然らしむるものなりとはいはざりき。曰く、『道字本活字、其生々化々の妙を形容する所以也。理字の如きは本死字、玉に從ひて里聲、玉石の文理をいふ也。以つて事物の條理を形容すべく、以つて天地生々化々の妙を形容するに足らず。』（語孟字義）といひ、更に其所謂道の往來活動する所以を說きて曰く、『易に曰く、一陰し一陽す、之を道といふと。其各〻一の字を陰陽字上に加ふるは、蓋し夫の一陰して又一陽し、一陽して又一陰し、往來消長、運して已まざるの意を形容せる也。蓋し天地の間、一元氣のみ。或は陰となり、或は陽となる。兩者只管兩間に盈虛消長、往來感應して、末だ嘗て止息せず。此は即ち是れ天道の全體、自然の機、萬化此より出て、品彙此より生ず。聖人の天を論ずる所以、此に至りて極れり。』（仝上）と。如此氏は、道を解して、條理といはずして、之を活動といへり。（業行の見と異る所。）即ち陰陽の交

運を稱して天道といへり。活動を以て天地の眞相なりと信じたり。而して直に之を倫理上に引き來り、天道とは陰陽の相往來するを指していふが如く、人道に於いても、仁義の相行はるゝをいふといへり。所謂活動は、氏が天道と人道とを一貫せる根本信念なりといふべし。

(四) 人道說

前述の如く、氏は人道を解して、仁義相行はるゝ往來活動の義なりといへり。由是觀之、仁義其物が道にあらずして、仁義の相行はるゝ往來活動其物が道なり。仁義の往來活動する地は、卽ち道德社會其物なり。故に氏が所謂道とは、社會を離れて存すべからずして、社會は、仁義の往來活動の地なりといふべし。故に『人外道なし』(童子問)といひ、又『道德は、徧く天下に達するを以つていふ。一人の有する所にあらず。』(語孟字義)といひ、もいひ、又更に此意を詳說して曰く、『人とは何ぞや、君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友なり。夫れ道は、一のみ。君臣にありては、之を義と云ひ、父子は、之を親といひ、夫婦は、之を別といひ、昆弟には、之を序といひ、朋友には、之を信といふ。皆人によりて顯れ、

人なくんば以つて道を見る事なし。』(童子問)と、所謂『人倫日用當行』といふもの是也。かくの如く君臣父子夫婦昆弟朋友の倫は、氏が道德的社會の全般を意味するものにして、吾人は其接する所、其應ずる所に從ひて、仁義相行はざるべからず。之を稱して人道といへり。其親といひ、義といひ、其他別序信といふものは、皆此仁義の、彼の各種の人倫に相接し相應じて後、此名ある所以なりと考へたり。

更に氏は思へらく、此仁義相行の人道たるや、時に古今の別なく、國に文野の分なく、人に貴賤の品なく、普遍的にして且つ固定的のものなりと。故に曰く、『道とは人倫日用當行の路、教を待ちて後あるにあらず、亦矯揉して能く然るにあらずして、皆自然にして然るなり。四方八隅、遐陬の陋、蠻貊の蠢に至るまで、自ら君臣父子夫婦昆弟朋友の倫あらざるなく、亦〻親義別叙信の道あらざるなし。萬世の上如此、萬世の下も亦如此。故に曰く、道は須臾も不可離と。』(語孟字義)と、又曰く、『道は大路の如く然り。豈知りがたからむや。所謂大路とは、貴賤尊卑の通行する所、猶本國の五畿七道、洎び唐の十道、宋の二十三路の如し。上は、王公大人より下は、販夫馬卒跛奚瞽者に至るまで、皆此によりて行かざるなし。唯〻王公大人のみ行くことを得て、匹夫匹婦は行くことを得ずば、道にあら

す。賢知のものは行くことを得て、愚不肖の者は行くことを得ずば、道にあらざる也。故に曰く、大路の如く然りと。只、安んずると勉るとの別あるのみ。』(同上)と。氏は如此社會を離れて道なく、道は社會人倫の上に行はるゝ名稱なりとなしければ、此見地より宋明學、特に佛老の說の、社會萬有を空虛夢幻視し、社會を離れ人倫に悖り、高擧深潛、樹下石上、徒に默坐澄心の工夫を費し、以つて道を得たりとなせるものに對して、排斥詆訾し、天地の公道にあらずといへり。

然らば則ち氏が所謂仁義の意義如何。仁義の二善は、これ萬善の總腦なりといひ、而して仁の意を釋して、無差別的博愛となし、義の意を釋して、差別的制斷なりといへり。故に此二者は、相兼ね相行はれて、中正の道を得べしと信じたり。曰く、『仁にして義なくんば、仁にあらず。墨子の仁、是也。義にして仁なくんば、義にあらず。楊子の義、是也。故に聖人、仁をいはゞ、義のあるあり。義をいはゞ、仁のあるあり。』(同上)と。かく仁義の二善は、相兼ね相行はれざるべからず。而して氏は又一歩を進めて、博愛の心無くば、制斷行はる地なしと考へたり。換言すれば、仁の心なくんば、義も從ひて施す所なし。故に仁義の上に就いて、仁義二物の本支先後を論ずれば、仁之が本となり、先とならざるべからず。

故に曰く、『聖門學問の第一字は、これ仁。義、以つて配となす。』(童子問)と斷言せり。更に仁の意義を詳說して曰く、『慈愛の心、渾然通徹、內より外に及びて至らざる所なく、達せざる所なく、而して一毫殘忍刻薄の心なき、正に之を仁といふ。此に存し彼に行はれざるは、仁にあらざる也。一人に施して、十人に及ばざるは、仁にあらざる也。瞬息に存し、夢寐に通じ、心、愛を離れず、愛、心に全く、打ちて一片と成す。正に是れ仁。故に德は、人を愛するより大なるはなく、物を破るより不善なるはなし。孔門、仁を以つて宗旨となすは、蓋し之が爲めなり。』(全上)と。又仁の効用を說きて曰く、『仁の德たる、豈言を以つて盡く言ひ悉すべけむや。天下に王たれば、則ち天下に及び、一國に君たれば、則ち一國に及び、一家に主たれば、則ち一家に及び、父たれば、則ち其子に及び、夫たれば、則ち其妻に及び、兄たれば、則ち其弟に及び、弟たれば、則ち其兄に及ぶ。此を以て身を治むれば、則ち身修り、此を以つて事を處すれば、則ち事成る。我よく人を愛すれば、人も亦我を愛し、相親相愛、父母の親の如く、兄弟の睦の如く、行くとして得ざるなく、事として成らざるなし。舜の一年にして聚をなし、三年にして都をなし、成陽、東面して征すれば西夷怨み、南面して征すれば北狄怨むが如し。是れ仁の効なり。不仁者は、之に反し、殘忍破害、衆、叛

き、親はなれ、死亡に至らずば則ち止まず。故に仁は、道德の大本、學問の極致、天下の善、之に過ぐるなし。』（全上）と、可知、氏が所謂仁とは、道德の大本となるべきものにして、之を博愛の義に取れりしを。此點、彼の素行が、義を以つて主義となし、公利を主張したりしと、其言は相異れども、其意は則ち相似たりと謂ふべし。

世、常に道と德との別を立てずし、混一して說くものありと雖も、氏は其別、判然たりといへり。故に此に其意の大端を敘述すべし。

氏、曰く、『德とは、仁義禮智の總名。』（語孟字義）と、又曰く、『德とは天下の至美、萬善の總腦。』（全上）ともいへり。而して道と德との別を示して曰く、『道德の二字、亦甚だ近し。道は流行を以つていひ、德は所存を以つていふ。道は自ら導くあり、德は物を濟す所あり。中庸に、君臣父子夫婦昆弟朋友の交を以つて達道となし、知仁勇を以つて達德となす、是也。若し推して之をいはゞ、一陰一陽するは天の道にして、覆ひて外なきは天の德なり。剛柔相濟すは地の道にして、物を生じて測られざるは地の德也。或は補ひ、或は瀉ぐは、藥の道にして、能く病を療し、命を活するは、藥の德なり。或は炎し、或は燒くは、火の道にして、能く飲食を調和するは、火の德也。由是觀之、道德二字の義、自ら分明なるべし。』（全上）といへり。要は、德とは仁義禮智の如き諸善を總合したる時の名稱にして、內に存するあるをいひ、道とは、仁義の互に相依り相行はれて、生々活動止むなきを指していふなり。彼の素行は德を分ちて、客觀的に全德一德大德小德吉德凶德などいひ、全一大小吉凶の差別を付したりしが、氏にありては只單に主觀的に萬善の總合なりといへり。

然らば氏は、德と善とは如何に差別せらるべきものなるか、氏は、明白に之が差別をなせり。曰く、『之を德といはゞ、則ち仁義禮智の理備はりて、其用未だ著れず。既に之を仁義禮智といはゞ、則ち各、事にあらはれて迹の可見ものあり。』（全上）といへり。

要するに氏は、道とは流行を以つていひ、德とは所存を以つていひ、善とは一々の發現の上よりいふ。又語を換へていはゞ、道とは、衆善の流行活動する上よりいひ、德とは、衆善の內に存し、理の備りて未だ其用のあらはれざる方面より觀察したる名稱なりといふべし。

（五）人性論

氏は、人性を說くや、素行と異り、全く孟子に準據し、四端を說き、良知良能を說き、其性善論を採れり。而して、孟子の所謂四端、及び良知良能は、人は先天的に完全なる道念を生有せりといふに非ずして、全く之を道德的素質と觀たりしと同じく、氏も亦然か考へたりしなり。故に宋明儒の復性復初說を排斥詆訾し、孟子が所謂擴充說を繼承し、之を主張したりき。

氏は四端及び良知良能の說あり。曰く、『人の此の四端（孟子か所謂惻隱羞惡辭讓是非の四端をいふ。）あるは、即ち性の有する所、人々に具足して外求を待たざるなり。猶ほ四躰の、其身に具ふが如し。苟も擴めて之を充大せは、則ちよく仁義禮智の德を成す、猶ほ火の始めて燃え、泉の始めて達して、襄陵の蕩に至り、漸々循々其勢自ら已む能はざるが如し』（語孟字義）と、又曰く、『良知良能は、本然の善をいふ。即ち四端の心なり。』（仝上）と。如此四端の心と、良知良能とを以つて此に是れ人性の善を示す語にして、共に相同じとなし、更に之を人性の固有する所なりと考へたり。是れ即ち吾人の天賦に係る道德的素質にして、善、其物にあらず。又、德、其物にあらず。何ぞ況んや道其物ならむや。故に氏に擴充の說あり。

氏は、擴充の意義を說きて曰く、『孟子の所謂擴充といへるは、推擴充大の勢、遏止すべからざるをいふ。本然の量を滿すの謂にあらざるなり。』（童子問）と。此擴充の說は、やがて氏が學問即ち經驗說の、よりて出づる所以なり。

氏は、已に人性を以つて善となし、道德的素質の生有を信じたり。されども宋儒の如く、又陽明の如く、本然の性又は完全なる良知の生有を信せざりき。故に彼の復性復初の說の如きは、氏の固く取らざる所なり。其說元ト老莊より出でたるものなりと斷言して曰く、『先儒、復性復初等の語を用ふる、亦皆莊子より出づ。蓋し老子の意に思へらく、萬物、皆無より出づと。故に人の性、其始は眞にして靜なりしが、既に生じて、欲動き、情勝ち、衆惡交、攻む。故に其道、專ら滅欲して以つて復性せむことを主とす。是れ復性復初等の語の由りて起る所なり。』（語孟字義）といひ、又更に進みて、此等の說の如きは徒らに滅欲を訓となし、果には愛根斷喪して、適、以つて仁義の素質をも猶亡せしむるに至らむといへり。尙ほ此說につきては、其子東涯說き得て詳なり。

（六）學問